



平成25年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進室

(Citation)

神戸大学地域連携活動報告書, 2013(平成25年度):1-92

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

report

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006137>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006137>



平成 25 年度
神戸大学地域連携活動報告書

平成 26 年 3 月
神戸大学地域連携推進室

はじめに

現在、教育基本法では、大学の使命として、教育・研究とともに、「その成果を広く社会に提供することによって、社会の発展に寄与するものとする」と明記されています。激動の変革期といえる今、地域の「知の拠点」である大学に対して、社会が寄せる期待が大きいことを感じています。

神戸大学では、「神戸大学ビジョン」の中に「卓越した社会貢献」を掲げ、平成15年から、地域の発展に資する事業を支援する組織として地域連携推進室を設置し、活動して参りました。同じ年に、地域連携事業の実施組織として、人文学研究科、保健学研究科及び農学研究科に地域連携センターが誕生しました。現在、学内では、このほか、国際文化学研究科異文化交流研究センター、人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、都市安全研究センターなどともに、それぞれの専門分野を活かした活動に取り組んでいます。

さて、地域連携活動発表会は、神戸大学における地域連携活動の取組を学内外の皆様にお知らせし、理解を深めていただくとともに一層の推進を図ることを目的に、平成17年から毎年開催されています。

今年は、神戸大学地域連携活動10年の節目の年にあたります。そこで、発表会のテーマを、「地域と共に～10年の活動と今後の展望」といたしました。平成25年度の地域連携学内公募事業の報告と共に、神戸大学の10年間の地域連携活動を振り返り、今後の展望について意見交換を行いました。地域の中で大学の果たす役割などについて、フロアからの発言も加わり、明日の活動につながる活発な議論となりました。

本書は、平成25年度の人文学研究科、保健学研究科、農学研究科の各地域連携センターの活動概要とともに、発表会の報告をまとめたものです。本書について、ご意見やお気づきの点がありましたら、いつでもお寄せください。あわせて、今後とも、本学の地域連携に対するご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

神戸大学地域連携推進室 室長

奥村 弘

目 次

はじめに

第Ⅰ章 地域連携活動発表会 3

プログラム

地域と共に ～ 10年の活動と今後の展望

アンケート

第Ⅱ章 研究科地域連携センター報告 41

人文学研究科地域連携センター

保健学研究科地域連携センター

農学研究科地域連携センター

篠山フィールドステーション

第Ⅲ章 学内公募事業活動報告 59

地域連携事業 60

板倉 史明 国際文化学研究科准教授

藤岡 秀英 経済学研究科教授

石川 雅紀 経済学研究科教授

地域連携継続事業 66

松岡 広路 人間発達環境学研究科教授

伊藤 真之 人間発達環境学研究科教授

学生地域アクションプラン 70

越智 玲奈 神戸大学アメリカンフットボール部 Ravens

花岡 麻里名 舞踊ゼミ (関 典子研究室)

森田 綾子 はたもり

今井 淳南 「イルミネこうべ」プロジェクト

水坂 洋介 大船渡支援プロジェクト実行委員会

石坂 将一 明舞団地の歴史を記録する会

沖 侑太郎 神戸在宅呼吸ケア勉強会

募集要項 84

付録 87

地域・だいがく連携通信 Vol.13

地域連携活動発表会告知チラシ

第1章

地域連携活動発表会

平成 25 年度 神戸大学地域連携活動発表会

日 時：平成 26 年 1 月 30 日（木）13：30～16：40

場 所：神戸大学 瀧川記念学術交流会館 2 階大会議室

テーマ：地域と共に ～ 10 年の活動と今後の展望

趣 旨：

神戸大学では、平成 15 年に地域連携推進室および人文学研究科・保健学研究科・農学研究科地域連携センターが設置されました。それから 10 年、各地域連携センターを中心に、地域と連携しながら、共にその課題に取り組み、学生の教育を展開してきました。今回その成果を検証し、今後の展望について、意見を交わしたいと思います。

開会挨拶 内田 一徳 理事（産官学社会連携担当） 13：30～13：35

【第一部 活動報告】

1. 平成 25 年度地域連携事業報告（各 15 分）（30 分） 13：35～14：05

(1) 映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携（国際文化学研究科 板倉 史明 准教授）

(2) 佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援（人間発達環境学研究科 伊藤 真之 教授）

2. 平成 25 年度学生地域アクションプラン報告（各 15 分）（30 分） 14：05～14：35

(1) 大船渡ワークキャンププロジェクト（大船渡支援プロジェクト実行委員会 水坂 洋介）

(2) 県営明舞団地における居住者目線の団地の歴史の記録・編集（明舞団地の歴史を記録する会 石坂 将一）

3. 質疑応答（10 分） 14：35～14：45

— 休憩 —（15 分） 14：45～15：00

【第二部 意見交換会：地域と共に ～ 10 年の活動と今後の展望】

（95 分） 15：00～16：35

全体趣旨説明 奥村 弘 地域連携推進室長

地域連携推進室報告 佐々木和子 地域連携研究員

人文学研究科地域連携センター報告 市澤 哲 人文学研究科教授

保健学研究科地域連携センター報告 高田 哲 保健学研究科長・教授

農学研究科地域連携センター報告 高田 理 農学研究科教授

<自治体からのコメント>

加藤 久雄 神戸市大学連携支援室長

村上 裕道 兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長

<意見交換>

閉会挨拶 奥村 弘 地域連携推進室長 16：35～16：40

地域と共に ～ 10年の活動と今後の展望

<報告>

- 奥村 弘 神戸大学地域連携推進室長（司会）
佐々木 和子 神戸大学地域連携推進室地域連携研究員
市澤 哲 神戸大学大学院人文学研究科教授
高田 哲 神戸大学大学院保健学研究科長・教授
高田 理 神戸大学大学院農学研究科教授

<自治体からのコメント>

- 加藤 久雄 神戸市大学連携支援室長
村上 裕道 兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長



意見交換会：地域と共に～10年の活動と今後の展望

長井勝典・神戸大学研究推進部連携推進課長補佐

長井 それでは時間が参りましたので、意見交換会を開始いたします。まず初めにパネリストの方をご紹介します。向かって左側から、地域連携推進室の奥村弘室長、同じく地域連携推進室の佐々木和子地域連携研究員、人文学研究科の市澤哲教授、保健学研究科の高田哲教授、農学研究科の高田理教授、神戸大学連携支援室の加藤久雄室長、兵庫県教育委員会事務局の村上裕道参事兼文化財課長です。まず、大学の先生方にお話いただきまして、自治体の方には後ほどご意見をいただきたいと思っています。それでは奥村室長、よろしくお願いします。



奥村弘 地域連携推進室長

奥村弘・神戸大学地域連携推進室長

奥村 それでは始めていきたいと思います。今年は神戸大学が地域連携推進室を設けてから10年ということになりました。室の10年の歩みとほぼ同時に人文学、保健学、農学の3つの研究科の地域連携センターが室と共に展開してきました。それらの活動についてお聞きいただき、この10年を受けて次にどこに行くのか、どうしていくのかということ、今日参加されている皆さんと共に考えてみたい、また、ご意見をいただければと考えています。本日は、私たちが思った以上に他の機関や他の大学の方も来られているようです。ここまで、例年までと同じく本学の地域連携の取り組みについて、詳しい説明をせずに進めてきましたが、今回は少し説明が必要だということで、佐々木地域連携研究員の話を経由して報告として先にやらせていただきます。その後、私が少し全体の話をしていただき、各センターの報告を続けます。それでは、佐々木さん、よろしくお願いします。

佐々木和子・神戸大学地域連携推進室地域連携研究員

佐々木 ご紹介に与かりました地域連携推進室の地域連携研究員をいたしております佐々木です。どうぞよろしくお願いします。



神戸大学地域連携推進室の活動ということで、今日の前半に話が出ました公募事業の話とか、うちの地域連携推進活動の体制など、全体像について10年の歩みを交えながらお話ししていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

神戸大学では、地域連携活動を大学を挙げて取り組み、総合的・組織的に支援するため、地域連携推進室が設けられていま



- <業務内容>
- ①地域との連携活動に関する対外的な窓口機能
 - ②魅力ある地域づくりへの協力
 - ③本学と自治体との連携事業の推進
 - ④本学における地域連携の組織的な取り組みの支援
- <重点課題>
- ①地域の歴史遺産の利活用による地域文化の育成 → 人文学研究科地域連携センター
 - ②少子高齢化社会に対応した地域支援 → 保健学研究科地域連携センター
 - ③地域社会の自然環境利用による地域の活性化 → 農学研究科地域連携センター
 - ④阪神・淡路大震災を経験した大学として、リスク社会への対応 → 都市安全研究センター

す。業務としては、学内の各部局の支援、自治体や地域との連携活動に関する対外的な窓口機能、魅力ある地域づくりへの協力、自治体との連携事業の推進、学内の地域連携の組織的な取り組みの支援、自治体との連携推進協議会の運営などを行っています。学内各部局の支援、連絡調整係ということです。

地域連携推進室は、学長直属の組織です。室員は、人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命・医学系からの教員、関係の事務局の担当職員などで構成されています。そのため、全学的に協力が得やすくなっています。実際の取り組みはその後お話をしますように、部局を中心にやっています。

他大学では、大きな全学組織をつくり、展開していくところもあります。しかし本学では、教育・研究の現場に近い各部局の地域連携活動を中心に言い、地域連携推進室はその支援を行う体制をとっています。なかでも人文学研究科、保健学研究科、農学研究科に地域連携センターを設け、「地域歴史遺産の利活用」「少子高齢化社会への対応」「自然環境への対応」の3分野を設けており、地域歴史遺産の利活用は人文学研究科地域連携センターが、少子高齢化社会への対応は保健学研究科地域連携センターが、地域社会の自然環境を利用した仕組みでは農学研究科地域連携センターが中心に活動をしています。最近では、地域連携推進室とは異なる震災復興支援・災害科学研究推進室が関係していますが、都市安全研究センターが中心となった「大災害等リスク社会への対応」も関係しています。

このように、平成15年から3つの地域連携センターを設けて活動を始めてきたのですが、約10年を経ますと、3分野がそれぞれ独自の活動を行うだけでなく、複合的な領域が起こってきました。そのときには主要な事業を担当するセンターが窓口となり、他の地域連携センターの協力を仰ぐということも出てきました。例えば加西市には、農学研究科附属食資源教育研究センターがあります。私たちは農場と呼んでいます。農場に隣接して、海軍姫路航空隊鷓野飛行場という滑走路跡があります。防空壕などの戦争遺跡も農場内にもいくつか残っています。加西市教育委員会と人文学研究科が調査を行ったときには、当然農学研究科の協力が必要でした。実際に農学研究科地域連携センターの方たちのお力添えをいただきながら一緒に調査が行われました。3領域という形でそれぞれが始めてきましたが、協力しあうことも必要となり、話し合いをしながら広がりを持って進めているところです。

3重点領域に加え、新しい地域連携の芽を育てるということで公募事業も実施しています。公募事業を行うようになったの



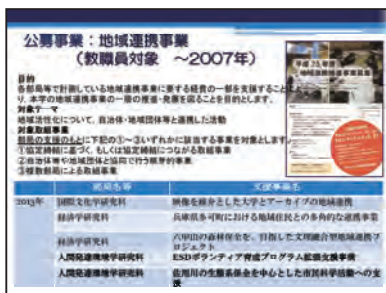
は、平成17年から始まった灘区まちづくりチャレンジ事業がきっかけです。先ほど本学の地域連携活動は、本学の施設があるところを重視していると申しました。本学では、一番最初にキャンパスのある灘区と地域連携の協定を結びました。神戸市ではなくて、神戸市灘区という非常に地域密着のところと連携を始めました。行政区レベルの連携ということで、非常に珍しいものです。これを機に始まったのが、灘区まちづくりチャレンジ事業です。灘区からの支援によって、学生・教職員を対象とした事業が毎年採択されています。

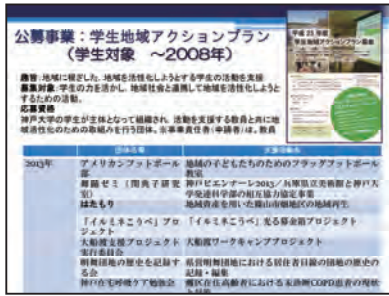
学生の事業から紹介します。今年度も「まちTゆうえんち」が灘区のチャレンジ事業として採択されました。これは、工学研究科建築学専攻の大学院生を中心に実行委員会という形で、約5年間続いているプロジェクトです。チャレンジ事業としては2年間ですが、プロジェクトそのものは、灘区の支援している別の公募事業で採択されていました。学生が行う事業は、毎年人が代わっていくのが特徴です。このグループもメンバーは毎年代わっていますが、毎年特徴を出しながら、上手に継続しています。「まちT」の考え方として、古くなったTシャツをアートの素材として利用して、そこに子供たちが集うような方法を考えるという基本コンセプトは変わりません。地域の方々が、楽しみにしているプロジェクトに育ってきています。

今年度採択されました「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」は、人間発達環境学研究科を挙げて、鶴甲のまちづくりに取り組んでおられるところの一部の支援という形になっています。人間発達環境学研究科の近くにある鶴甲団地は、高齢化が進んだ団地です。灘区の方から、中山間地域だけではなく、町の中にも高齢化が進んで、まちづくりを考えないといけないところもあるのですよというお話がありました。

学内では、平成19年から地域連携の新しい芽を育てるということで、教職員を対象に「地域連携事業」という公募事業が始まりました。学生を対象とした地域連携活動を公募する「学生地域アクションプラン」は、その翌年から始めました。

「地域連携事業」は、部局の支援のもと、3センター以外の部局の教職員が、地域活性化について、自治体・地域団体等と連携した活動を支援するものです。平成24年度には兵庫県内の市民グループによる科学コミュニケーションの活動の支援、容器包装ごみ発生抑制の生活実態調査(ごみじゃぱん)、兵庫県喘息死ゼロ作戦が取り上げられました。また、人間発達環境学研究科のESDボランティア育成プログラムのように、何年か継続的に採択された事業、つまり芽が少しずつ育ってきているような





ものは継続事業という形で毎年支援しています。

学生が主体になって行っている活動についても、「学生地域アクションプラン」と名付け、支援をしています。趣旨は、地域に根ざした、地域を活性化しようとする学生の活動の支援です。募集対象は、学生の力を活かし、地域社会と連携して地域を活性化しようとするための活動。応募資格としては、神戸大学の学生が主体となって組織され、活動を支援する教員と共に地域活性化のための取り組みを行う団体となつています。今年、アメリカンフットボール部、舞踊ゼミ、大船渡支援プロジェクト、明舞団地の歴史を記録する会、神戸在宅呼吸ケア勉強会など学生を中心としたグループが採択されました。今年度は特に応募数が多かったので、数を絞るというよりも、額を少なくしてもふさわしいと認められるような活動は支援していこうということになりました。舞踊ゼミや“イルミネこうべ”はゼミ単位で出てきたグループです。これがどういうふうになっていくかが今後楽しみです。また、“はたもり”というグループは、篠山市をフィールドとした授業から生まれました。毎年篠山市では、実践農学入門という授業のフィールドとして、地域に入らせてもらっています。篠山市の中では、ずっと1つの地区に学生たちが入っていくわけではなく、毎年入る地区が違います。最近では公募形式をとり、地区として神戸大学の学生を受け入れてもいいよと手を挙げていただいたところに学生が入っています。学生たちは決まった地区に、毎年違うところですが、ずっと通っていると、その地区が好きになります。実際に困っている現場を見たりすると、もっとその地区について考えてみたいとなります。1年間入っただけではなかなか分からない、もっと自主的に活動したいなという学生が生まれてまいりました。それは私たちが考えていなかった効果でした。それらの学生たちが、それぞれ工夫をしながら、現在各地区でいろいろな活動をしています。若い学生の感性といいますか、ネーミング力は思わずふっと笑ってしまったりします。畑地区に入った“はたもり”、西紀地区に入ったグループが“にしき恋”という名前です。

神戸大学から篠山へ通うというのは、バスで行きますとそう遠くはないですが、学生たちが自主的に活動しようとする、交通の便、経済的な側面などいろいろなハードルがあります。その交通の便が悪いということは、お金がかかるということにもつながってきます。“はたもり”や“ユース六篠”は、「学生地域アクションプラン」への応募があったため、スムーズに活動できるよう経済的な支援を行うことができました。これらの学生たちの活動は、このあと農学研究科地域連携センターから

報告があると思いますが、今年は、篠山で畑をお借りして作った黒豆やお米の販売も行われました。

本学では自治体と連携協定を結んでいます。相手方の自治体についても、本学では、大学が結ぶ大学協定と部局単位で結ぶ部局協定の2種類を設けています。大学協定は、基本的に複数部局が関わっているものです。神戸大学の協定への考え方として、冠協定だけ、名前だけの協定はやめようということになっています。個々に連携事業が始まり、それらをもとに部局協定が結ばれ、その地域での活動が全学に広がっていったときに大学協定にしていこうと考えています。

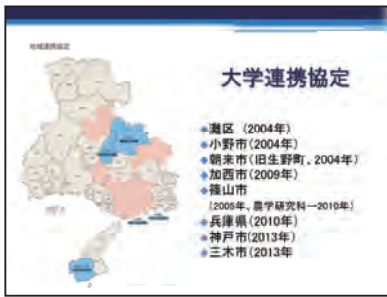
一番典型的なのが篠山市です。先ほど説明しましたように、篠山市とのお付き合いは農学研究科から始まりました。農学分野を中心に始まったものが、人文学、保健学分野などに活動が少しずつ広がってきました。それであれば、大学協定という形にしていこうということになりました例です。

現在、神戸大学では、灘区、小野市、朝来市、加西市、篠山市、兵庫県、神戸市、三木市と大学協定を結んでいます。このうち2つの自治体とは、今年度に大学協定を結びました。1つは、平成25年5月に結んだ神戸市との連携協定です。神戸市とは地元の大学としていろいろな形で協力をしておりましたが、このたび連携協定という形になりました。

2つ目は、6月に結んだ三木市との連携協定です。三木市とは教育、産業振興、地域の歴史文化というところで一緒に活動していこうという内容です。教育分野は、人間発達環境学研究所と連携しています。産業振興といいますのは、これからの農業をどうしていこうかということが中心になっています。地域の歴史文化ということでは、新市史の編さんや歴史資料の保全の問題などに取り組んでいます。

神戸市との主な連携事業としては7つ挙げました。大学のある街連携事業、神戸クラスターに関する連携、そして障害児支援に関する連携、安全な都市づくり、さらには革新的な膜工学に関する連携、歴史文化に関する連携、そして神戸市の海外事務所の活用です。

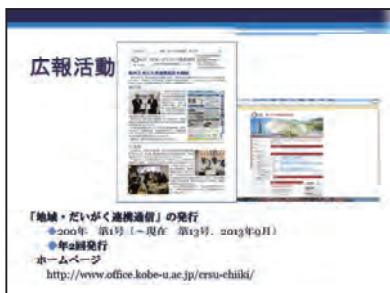
最初に大学のある街連携事業を挙げましたのは、灘区との連携がベースになっています。灘区と協働で取り組んできた、地域に密着した区レベルのまちづくり事業を充実させていく。大学がある街ならではの連携事業を広げていきたいと考えています。神戸市は、京都に次いで日本で2番目に大学の多いところでは、大学のたくさんある街・神戸ということで、大学を生かしたまちづくりを考えていくことをまず挙げました。障害児支



援に関する連携は、保健学研究科が中心に長年取り組んできています。神戸クラスターは、医療産業都市の問題、京コンピューターなどを生かしたまちづくり、また安全な都市づくりは、阪神・淡路大震災を契機として一緒にやっ払いこうということです。

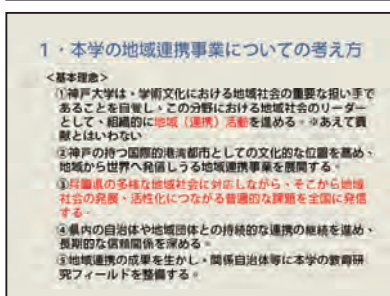
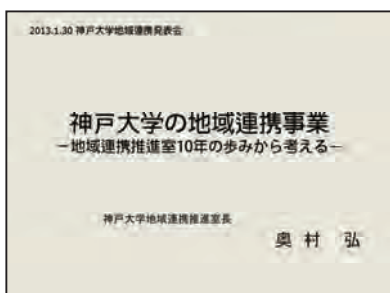
広報活動としては、平成19年7月から、「地域・だいがく連携通信」という広報紙を年に2回発行しています。最近では、第13号が発行されています。また、地域連携推進室のホームページもあります。大学のホームページの「企業・地域の方」という所をクリックしていただければ、「地域連携」という項目があります。公募事業や各センターのイベントなどをお知らせしています。

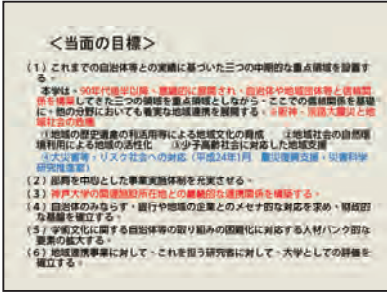
今日のような地域連携活動発表会を、平成17年から毎年開催しています。その成果は、報告書を作成し、皆さんにお配りするとともに、ホームページや図書館のリポジトリからもダウンロードが可能となっています。以上、地域連携推進室の活動を中心にお話しさせていただきました。



奥村 引き続き私の方から概要に続いて、神戸大学の地域連携事業の特質と今後の展開について、全体的な話をいたします。

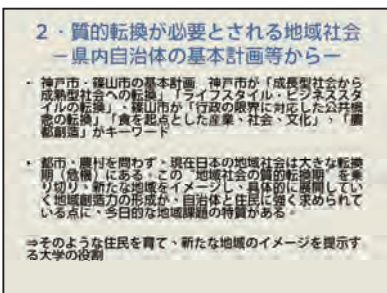
本学の地域連携事業の基本理念として、まず、何よりも神戸大学自身が地域社会の中の学術文化という領域における責任ある主体だと考えており、大学が外側にあつて外側から地域に入っていくというよりは、地域の一員として活動をしていることが、大学としては当然のことであるという発想に立っています。したがって、「地域活動」と呼んでいて連携というのはあまり入れない、もちろん貢献とは言わないということです。むしろ、大学そのものが地域活動の主体なんだ、と考えているのが特色です。2つ目として、神戸の持っている国際都市としての特色を考えた上で、単に地域の話地域だけではなく、これを世界に発信し得るような、そして、世界の中に意味を持てるようなものにしていきたいという考え方を持っています。3つ目は、兵庫県全体が日本の縮図と呼ばれていますように、多様な社会の地域を持っています。その多様な社会の中から、社会の発展や活性化につながる普遍的な課題を見つけ出し、それらを日本全体にも問うていこう、という志を持って活動するというです。4つ目としては、持続的な連携を行う。そして、持続的な連携を活かして教育研究フィールドを整備していこうと考えています。先ほど協定の話がございましたが、それもこの形で考えています。協定を締結した以上は、私たちは持続的に、自治体や地域団体の方々、地域住民の方々と共に教育と研究のフィー





ルドを作っていこうとしています。

10年間の活動の中で、かなり展開したのは4つの分野ではないかと思っています。1つは、地域歴史遺産利活用による地域文化の育成、2つ目が自然環境利用による地域の活性化、3つ目が少子高齢化に対応した地域支援です。4つ目は、大災害等、リスク社会への対応。これは直接的に地域連携推進室が扱っているわけではございませんが、この分野も、今日の学生地域アクションプランの大船渡の発表もございますように、全体として本学の地域活動としては重要な位置を占めていると考えています。さまざまな形で展開をしていますが、このうち今日は1、2、3の3つについて、各センターを通して具体的なお話を聞いていただけたと思います。それから、部局を中心として活動しているところも、本学の特色のひとつです。先ほどの佐々木研究員から話がありましたが、大学によっては、大きな推進室があり、そこに人を集約して、そこが地域連携を一手にやるという形を取っているところもあります。私たちのところは、決して地域連携推進室が小さくていいというわけではないのですが、重要なことは各部局ごとに責任を持って実施をしていく、持続的に展開していくところを大事にしているところです。これが他大学に比べ、特色あるスタイルではないかと考えています。また、これは当然といえば当然ですが、大学ですので、私たちの関連所在施設のあるところや歴史的にお付き合いが非常に深いところと継続的に進めていきたい。県内のあらゆるところで事業を展開できるとは考えていません。私たちの大学としての役割をちゃんと果たしていこうと考えています。



昨年、COC事業（地（知）の拠点整備事業）の申請書類を作りました。そのとき、兵庫県も含め多くの自治体の総合計画を読む機会がありました。すると「今は質的な転換の時期だ」と、どこの計画にも書いてありました。地域社会はそういう時期に入っている。神戸市や篠山市の基本計画の中にも出てきました。これは言わば公式の書類ですので、質的な転換とありますが「転換」というのはかなり危機だという認識ではないかと思っています。この転換期を、この危機をどう乗り切っていくのか、という表現が多いわけです。全体として地域社会の質的転換をやらねばならない、という強いメッセージを、各自治体の総合計画から、私は強く感じました。具体的にそういう新しい地域をイメージして展開していく地域創造力を持っているということが、自治体、住民に強く求められている。日本の今の地域課題の大きな特色ではないかと思っています。そのような課題に対して大学として何をやるのか。そのようなことに対応できる住民を育てて新

たな地域社会のイメージを作っていく、というところに私たちの今日の地域連携の大きな課題がある。恐らくそのことは今後、具体的な形を取ってより一層深める必要があると思うところです。

※地域社会の危機

グローバル化による産業構造の転換と災害のグローバル化

①高齢化・人口減による社会継承力の低下

1886 (明治19) 年	2009年
養父郡 39,206人	養父市 28,306人
多紀郡 46,017人	篠山市 45,352人
永上郡 70,934人	丹波市 70,810人

※濃区の人口の過半数は震災後流入

②大災害の頻発

③平成大合併と大規模自治体 8万から1700へ

実際、高齢化の人口減の問題は、単純に進んでいるだけではなく、問題は、明治、大正、昭和を通してコミュニティを支えていた人々の人口を割り込み始めている。江戸時代よりも人口が減っているという状態に県の北部ではなり始めているというところです。その頃の、ずっと少ない生産力で養われた人口を、その地域で内在的に養えないような状態にまでなっています。一方、神戸市では、例えば、灘区の人口の半分が震災前から入れ替わっている状態、もしくは新しく入ってきた人という状態になっています。この急速な流動化の中で、どういう形でコミュニティを作っていくのか。これまた高齢化と共に大きな問題になってきています。その上に、大災害が頻発するという状況が水害を中心として起こっていますし、地震の問題は明日来てもおかしくないということになってきています。また、特に、県の北部や丹波などでは、平成大合併がありました。これに関してもさまざまな問題があります。そもそも江戸時代の最後に8万あった村が、今、自治体は1,800しかありませんから、ドラスティックな移行というものは恐るべきものがあるわけです。150年ぐらいでそうなったのですが、どちらにしましても、この大きな変動の時期という中で、大学もまた新しい地域連携のあり方を求められているような状態になっています。

3・実践的な教育研究フィールド形成と地域の方々の信頼関係の継続

地域連携推進室による方向性提示と調整、広域地域連携センター等による活動の組織的展開とその連携による組合員実践

『神戸大学方式』本学の地域連携の特質 地域歴史遺産保存活用 (現代GP) 以来、小野市・新城市
人文センター編「地域歴史遺産」の可能性 (船田書院、2013)

篠山市での農学研究科地域連携センターの取組
専門家育成と市民育成 (フィールドステーション) ⇒協定でより実践化
人文学・保健学地域連携センター等の参加⇒総合型 (文理融合) 形成の可能性

兵庫県・神戸市・三木市との新たな協定に基づく新たな展開
地域の現在から未来をイメージしうる、市民である専門家の育成
専門家育成と市民育成を一体化 ⇒研究の重要性

現在、そういう意味では、本学の地域連携は「神戸大学方式」と呼んでもいいような形で展開しています。地域連携推進室による方向性の提示、調整、部局の地域連携センター等による組織的な活動の展開、さらに、センター同士や関係する研究科同士の連携によって総合的な実践を展開していくスタイルが生まれてきているかと思えます。元々、現代GPという文科省の取り組みがあり、その頃から全体的に個別の研究を中心にしながら他の方々と協力して展開するスタイルが取られてきました。人文の地域連携センターが今年度、『『地域歴史遺産』の可能性』という本を出しましたが、その中でも議論がされたと思います。それを具体的な形で一番分かりやすく展開できている例としては、篠山市での農学研究科地域連携センターの取り組みだと思えます。ここでは専門家の育成と市民育成というのをフィールドステーションの場を通して、具体的に地域で展開していくというスタイルができ始めています。それが農学だけでなく人文学や保健学研究科地域連携センター等の参加によって、さらに

多様な地域課題に応え、総合知、文理融合型の新しい地域連携の可能性、まだ可能性の段階ではないかと私は思っていますが、生まれてきている状況です。

私たちはそういうことを通して、兵庫県、神戸市、三木市とも新しい協定を結び、展開をしていきたいと思っています。地域の現在から未来をイメージし得る専門家の育成、専門家育成と住民育成を一体化したような新しい学生の育成、そして市民の方々との関わり方をどう作っていくのか、というところが重要であるかと思えますし、そういう研究を展開していくことの重要性もあるかと思っています。私たちは新しい挑戦として、そういう拡大する事業にふさわしいような総合知を形成し得る地域連携推進室の体制を、さらに一歩進めていく必要がある。そのためには、地域連携を担う教員評価システムの形成が必要であり、新しい地域課題に対応し得る専門家集団を中心とした研究部の創設が今後要るのではないかと考えています。また、室自体が全体的に調整機能を増していくための専任教員を持つこと、逆に言えば、地域連携というものが、そういう形で大学教員として評価されるということを明確に示すことが大事かと思っています。昨年、篠山市で助教の方を雇用していただけたようになり、来年度は三木市でおそらく講師を雇うことができるようになる見込みです。今まで委託以外、教員雇用の形での地域連携はありませんでした。これが今後も展開できるようになっていくことも含めて、こういう新しい挑戦を進めていきたいと思っています。

4・新たな挑戦へ

①拡大する事業に相応しい総合知形成を担う地域連携推進室形成

②地域連携を担う教員評価システム
*「研究部」の創設と室への常勤教員の雇用の重要性

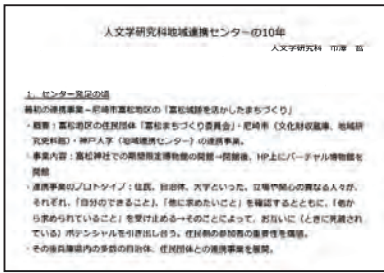
項目	内容	担当教員
1	地域連携推進室の設置	室長
2	地域連携推進室の業務	室員
3	地域連携推進室の体制	室員
4	地域連携推進室の業務	室員
5	地域連携推進室の業務	室員
6	地域連携推進室の業務	室員
7	地域連携推進室の業務	室員
8	地域連携推進室の業務	室員
9	地域連携推進室の業務	室員
10	地域連携推進室の業務	室員
11	地域連携推進室の業務	室員
12	地域連携推進室の業務	室員
13	地域連携推進室の業務	室員
14	地域連携推進室の業務	室員
15	地域連携推進室の業務	室員
16	地域連携推進室の業務	室員
17	地域連携推進室の業務	室員
18	地域連携推進室の業務	室員
19	地域連携推進室の業務	室員
20	地域連携推進室の業務	室員
21	地域連携推進室の業務	室員
22	地域連携推進室の業務	室員
23	地域連携推進室の業務	室員
24	地域連携推進室の業務	室員
25	地域連携推進室の業務	室員
26	地域連携推進室の業務	室員
27	地域連携推進室の業務	室員
28	地域連携推進室の業務	室員
29	地域連携推進室の業務	室員
30	地域連携推進室の業務	室員

神戸大学の科学研究費での地域をフィールドにしたものの一覧が、ここに19件出ています。神戸大学の科学研究費における、基盤Sとか基盤Aとかいう協働的なものに関しては、きわめて地域連携型が多いということが、去年のCOCの調査のときに分かりました。個別の先生方の研究ではなく、多くの先生方が一緒に研究していくときに、地域連携型の研究は極めて重要であって、そういう意味では、今後の私たちの研究大学としての位置付け、文理融合型の研究の中でも地域連携というのは非常に大事なものではないかと考えているところです。以上です。

それでは引き続き各センターからご報告いただきたいと思っています。最初に人文学研究科地域連携センターの市澤先生の方からよろしくお願ひします。

市澤哲・神戸大学大学院人文学研究科教授

市澤 市澤です。よろしくお願ひします。パワーポイントはな



市澤哲 人文学研究科教授

いですが、レジュメが1枚お手元に行っていると思います。それに従ってお話させていただきます。添付の資料として、センターのパンフレットと平成25年度の活動報告があります。こちらの方も適宜参照していただければと思います。私の話の内容は、地域連携センターが人文学研究科にできて10年、正確には12年ですが、その12年を振り返って成果と課題について整理をさせていただこうと思います。

まず、1番目のセンター発足の頃、何が最初の連携事業かは難しいのですが、平成14年に行われた事業の1つに、阪急武庫之荘駅の北側にある尼崎市の富松地区、その富松城跡を活かしたまちづくりの連携活動があります。それが比較的初期の事業だったのではないかと思います。富松地区の住民団体である「富松まちづくり委員会」—これは純粋に地域の住民の方の団体ですが、ここの方々が城跡を活かしてまちづくりを考えたいということで、尼崎市と神戸大学に呼びかけられ、地域住民と自治体と大学の三者の連携事業として始まりました。具体的には、富松神社という神社があり、そこがまちづくり委員会の拠点なのですが、その参集殿を借り、住民の方々が学芸員になった期間限定の博物館を開館しました。展示のノウハウや展示のコンテンツなどは、自治体と大学が住民と協議を重ねて、その内容を詰めていきました。博物館はほぼ一週間で閉館したのですが、閉館後、見るができなかった人から「もう一度、開館してほしい」という要望があり、今度は改めてホームページ上にバーチャル博物館を開館するという当時としては非常に画期的な事業を展開しました。この事業を通じて、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの活動の一つのプロトタイプみたいなものが、確認できたように私には思えました。つまり、住民、自治体、大学といった立場や関心の異なる人々がそれぞれ自分のできること、それから自分にはできないけど、他の人にやってもらいたいことというのを自分たちで確認するとともに、自分が他から何を求められているのかというのを受け止める。そういうことによってお互いに自分が気付いていないような能力を引き出しあって、事業を展開していく。このようなありかたが、地域連携事業の一つの基本的な考え方になるのではないかと思います。特に、この中で他に求めたいことや、他から求められていることをハッキリさせることというのは、連携事業をやる上できわめて重要だということが、この後もいろいろな経験から再確認することができました。「何でもいいからやってくれ」とか、「とにかく何か来てくれ」とか、いうこともあります。しかし、事業が一番スムーズに展開するのは、

自分たちはここまでできるが、後はやってもらいたい、と認識しているアクターが地域の側にいるときです。このような場合は、非常に事業は上手く進んでいきます。また、他から何を求められているかということをも自分が持っているポテンシャルと照らし合わせながら、自分ができることをじっくり考えていくということも、連携事業をやっていく上で大事なことだと思いました。その後、同じようなパターンで兵庫県内の多数の自治体、住民団体との連携事業を展開して今日に至っています。正確なデータを出せば良かったのですが、大体、兵庫県内の15前後の市町、住民団体との間で連携事業が、現在展開しています。

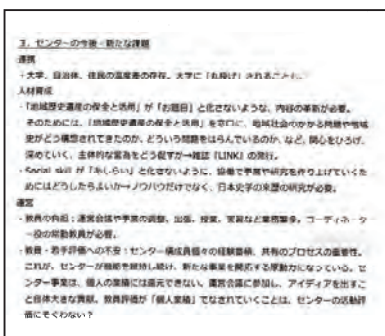
よ、人材育成への展開
 文部科学省の大学G Pへの応募→地域歴史遺産を保全・活用する人材育成プログラムを編
 成、採択（04年）→その後文部科学省の「地産地消」推進事業（06年）特別採択（
 10年）として採択、北大平のノウハウの共有
 ・地域リーダー養成：地域の側から連携事業をコーディネートする人材（高校の教員）
 →「まちづくり歴史講座」の実施
 ・学生、大学院生、研究者、博物館学芸員、自治体職員を希望する学生・大学院生に
 加え、市民として地域社会存続に積極的に関わっていく人材
 ・連携事業の参加者を客員 に招いたオムニバス授業「地域歴史遺産保全活用論」と実
 習「地域歴史遺産保全活用実習」
 ・成果：①連携活動の成果と課題の整理→『地域歴史遺産の可能性』（13年、有限責任
 の発行）、②研究者や専門的な職業を目指す大学院生のSocial skill の飛躍的向上、③連
 携活動に関心をもち神戸大学を志す学生の出現（1名ではあるが）。

2 番目として、人材育成の展開ということですが。文部科学省の現代G Pに応募するというので、地域歴史遺産を保全・活用する人材育成プログラムを作ろうということになりました。これは平成16年に採択され、その後も教員養成のバージョンが平成18年に採択されました。さらに、人材育成プログラムを高度化するという特別研究も平成20年に採択され、センターの大きな柱になっていったわけです。ここでいう「人材」とは、2つの人材をイメージしています。1つは地域リーダー、もう1つは学生・大学院生です。地域リーダー養成に関して言いますと、地域連携事業をやっていく上で、自治体、大学、地域住民という三者の協働を考えたときに、地域の中から連携事業を主体的にコーディネートしてくださる方の存在というのがなかなか見出しにくい。中には非常に卓抜した能力を持った方がいらっしゃるのですが、どこの地域にもそういう方がいらっしゃるというわけではない。大学とか、自治体が協働してそういう人たちを育成できないだろうか、と考えたということです。これに関しては、大学が県民局単位で「まちづくり歴史講座」を実施して、地域の方々の交流を含めて地域リーダーの養成に取り組んでいます。大学の本務では、学生・大学院生の教育について、研究者、博物館学芸員、自治体職員を希望する学生や大学院生だけではなく、普通に大学を卒業して、市民として地域社会に入っていく、そこで地域社会づくりに積極的に関わってくれるような人材を育成しようと考えました。大学では、連携事業の参加者プラス大学の教員だけではなく、自治体、住民団体の代表の方を客員に招き、オムニバスの授業や実習を行っています。ここで強調しておきたいのは、さっきも述べましたように、受講生の大多数は専門的な職種に就くのではなくて、一人の市民として地域社会に出て行くということです。こういう一人の市民を育てるという観点から、大学の教育を点検すると、現行の大学教育は必ずしもそうはなっていないのではないかという問

題が、事業をやっている中で、浮かび上がってきました。例えば、大学の教育の一つのイメージを考えると、とんがり帽子のようなものだと思います。三角形と言ってもいいかもしれません。多様な興味を持ったところからスタートしながら、4年間のうちに自分の専門をとがらせて社会に出ていく、というイメージです。しかし、実はその逆もあるのではないのでしょうか。非常に狭い関心や興味しか持っていないものが、4年間学ぶ中で、興味の対象を広げていく、まさに逆三角形になっていく成長のプロセスもあると思うのです。そういう三角形と逆三角形を組み合わせたような、そういうプログラムが今後必要になってくるのではないか、というのが事業を通じて私たちが学んだことです。

そのようなことを考え、先ほど紹介がありました平成25年出版の『地域歴史遺産』の可能性」という480ページ程の本を作りました。これが成果の1つです。また成果の2点目として、これは声を大にして言いたいのですが、大学院生が実習などで地域の住民の方と接する中で、ソーシャルスキルを身につけていたことです。自分は同じ歳のときに、あんなに人と上手く付き合えただろうかと思うと、絶対無理だったと思います。大学の教員以上に上手に地域住民の方と接して、これをコーディネートしていく若手が少なからず生まれました。やっぱり若いってすごいと率直に思いました。それから、3つ目は今年の1回生に、「神戸大学を選んだのは、ここの地域連携センターがあるからだ」と言ってくれた学生が1人いたということです。これは1人ですが、私たちにとってはとても大きな意味を持つ1人ではないかと思っています。

時間も無くなってまいりましたが、センターの今後の新たな課題について、簡単にご説明して終わりたいと思います。まず、連携活動は、なかなか三者が同じ温度でやるというのは難しく、時には大学に丸投げされるようなこともある。そういうことをどうやって避けていくのか、というのがこれからの問題です。また、人材育成に関して言えば、地域歴史遺産の保全と活用とまちづくりをリンクさせることが大事だと言っていると、学生もレポートにそのことばかり書く。一種のお題目みたいになってしまっている。そのお題目を脱していくためには、地域社会や地域の歴史について、自分で課題を見つけて考えていかなければならないということだと思います。そういう主体的な営為をどう促すかというのが一つの課題です。雑誌『LINK』をセンターで発刊しているのですが、そこでは多様な問題を取り上げて地域連携活動と結び付け、地域連携活動の間口を広げて



いくようなことを考えています。例えば、この雑誌が学生たちに地域について自分で考えてもらう、きっかけになればよいなと思っています。また、ソーシャルスキルが上達した反面、地域の人を一言い方は悪いですが、「あしらっている」のではないかという、点検を絶えずする必要があります。自分たちの研究は自分たちの研究、地域の人たちとのお付き合いは地域の人たちとのお付き合いと、分けてしまってよいか、両者を架橋するためには何が必要か、常に考える必要があります。本当に地域の人と一つのものを作っていく一学生アクションプランで報告のあったオーラルヒストリーの試みなどは、まさにそうだと思いますが、そういったことをどうやって実現していくかという点はまだまだ未熟ではないかと思います。

運営に関しては、もう教員の負担については、繰り返し言ってきたところですが、評価の問題がやはり気になるところです。人文学研究科のセンターがなぜ上手くいっているかを一言で言うと、センターの構成員が自分たちの経験を共有し、ノウハウを蓄積していったに新しい事業が出てきたときに、それまでのノウハウのどれを使ったらいいかということをもみんなで議論していくからだと思います。つまり、社会関係資本というか、共同の資本に依拠している部分が大きいのです。ですから、教員の「個人」評価になじまない。センターの会議には出ているけれど、個別のセンターの事業を担っていないから評価されない、というのはまずい。そんなことはなくて、センターの会議に出て議論していること、そのこと自体がセンターの財産になっていること。これを今後どう評価していくのか、考えていただきたいと思います。また、若手の研究者が就職するときに、彼らの地域連携活動に、大学がどうやってギャランティーを付けて、業績として外にアピールしてもらえるのか、この問題も、今後、「評価」の持つ比重が高まれば高まるほど問題になってくるのではないかと考えています。以上です。

奥村 ありがとうございます。それでは引き続きまして高田哲先生、保健学研究科地域連携センターの報告をお願いします。



高田哲・神戸大学大学院保健学研究科長・教授

高田（哲） 保健学研究科の高田です。保健学研究科地域連携センターの10年間ということで簡単にお話させていただきます。まず、現在、センターでは7つの事業を行っています。この7つの事業を行うずっと以前、今から20年前に、私は神戸市と一緒に、極低出生体重児（1,500 g未満で生まれた子ども）

保健学研究科の地域連携事業

- ①ハイリスク児とその家族への支援事業
- ②医療的ケアを必要とする子ども達への支援事業
- ③発達障害児とその家族への支援事業
- ④兵庫県、神戸市の資源を活用した国際保健推進事業
- ⑤父親の育児支援のための教育プログラム開発
- ⑥福祉施設を利用する障害者への生活支援事業
- ⑦認知障害の予防と家族支援

神戸大学保健学研究科地域連携センター

極低出生体重児のための親子教室



修正3か月からの受け入れ 6か月ごとに一クラスを形成

気持ちを共有できる仲間を作る (自らの体験を述べ、相手の意見を聞く)



遊びの中で子どもの様子を確認する 育児について話し合う(専門家を交えた非戸籍会議)

夏祭り、巣立った子たちも遊びに 一見通しをもつ



小学高になった子どもたち ビニールプールで食卓・コーヨー釣り
保護者たちの親友会、後輩のお母さんにアドバイスも

NICUから地域へ



小さな子ども達とともに 一食べる・回る・寝るに楽しみをみせて

子育て講習会 保健師研修

重い障害のある子どもへの支援

特別支援教育課との連携：・医療的ケアに対する知識の提供
・巡回指導
・校外活動支援



しおたせの村でのキャンプ風景 チューブ栄養管理

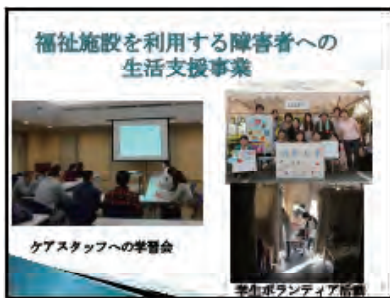
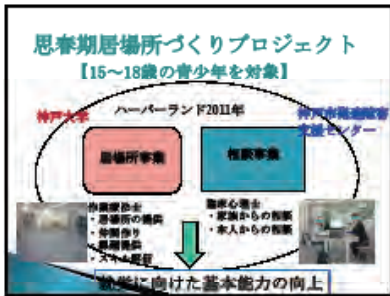
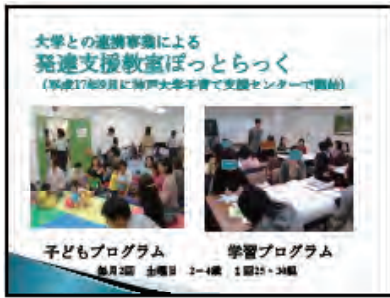
たちの教室を神戸市総合児童センター（こべっこランド）で始めました。小さく生まれますと、当然発達上のリスクも高いです。色々な問題を抱えます。お母さんたちも大変不安です。当時は児童虐待のリスクも高いと言われていましたので、お母さんたちの不安を解消するために教室を始めました。実際に産まれた日ではなく、予定日を基準に数えて3ヶ月目（修正3ヵ月）ぐらいから子どもたちを受け入れてきました。最近では、400～500g台で産まれた子どもたちもこの教室に入ってきています。

用意しているプログラムは2つあります。1つはお母さんたちが話し合うプログラムです。こういう特別な子どもさんを持つというのは、お母さんにとって、非常なストレスです。「私の子どもだけはみんなと違う」というのは、育児における孤立感を招きがちです。同じような立場の人と知り合って話し合う、時に専門家がアドバイスするというプログラムを行っています。その間、子どもさんたちは、学生たちが預かってみえています。大学院で保健師になろうとしている方、心理士になろうとしている方たちが、ここで実際の臨床の練習をしながら、子どもさんたちの発達チェックを行っているのです。夏になりますと、夏祭りを行っています。このときは、教室を卒業した方たちも来られます。夏祭りのような場では、将来、自分の子どももこのように大きくなるんだなど、発達の見通しをお母さんが持つことができます。また、卒業生のお母さんたちにとっては久しぶりにみんなに会った戦友会みたいなこともあり、非常に話が弾みます。秋には水族園や動物園に遠足に行きます。この極低出生体重児と家族に対する事業が最初のスタートです。

さらに、このようなNICU（新生児集中管理室）に特化した事業から、もう少し地域に出ていこうということで、新生児訪問をされている神戸市の保健師さんたちの研修を行いました。その後、同じような研修形式の事業を、発達障害や、さまざまな障害を持つ方たちへの取り組みにも応用してきました。

スライドに示しているのは神戸市の特別支援学校、教育委員会と一緒にやっている重い障害のある子どもたちとご家族のための事業です。現在では非常に重い障害があっても、子どもたちは自宅で過ごし学校へ来ています。胃ろうがあったり、人工呼吸器が付いたり、そういう方たちに、学校の先生方がどのように医療的なケアを実施し、サポートしたらよいかを研修しています。また、修学旅行などで遠くまで旅行するときには、医療の専門家が一緒に付いていくようにしています。

子どもを対象とした事業としては、最近、よく注目されています発達障害のある子どもとご家族への支援事業も行っていま



す。厚労省の研究事業として、神戸市との連携の下で始めました。平成17年に神戸大学の子育て支援センター‘あーち’でスタートし、翌年からは、神戸市の開発支援事業ということで、須磨区の大黒小学校跡でも一緒に始めました。現在は、須磨区の特別支援学校で行っています。子どもたちのためのプログラムとお母さんたち同士と一緒に話し合うピアサポートのようなプログラムを設けて、先ほどご紹介した極低出生体重児の親子教室と同じような手法で実施しています。もっと大きくなり、学校で学び始めた子どもたちを対象に、就学後のプログラムを須磨の自立支援協議会の方たちと一緒に始めました。さらに、摩耶山にある神戸市立自然の家で、自然体験型の日帰りとお泊りのキャンプ事業を神戸市、神戸市スポーツ教育協会と行っています。そこでは、カヌーを使ったり、お母さんたちと一緒に情報を分かち合うということを行っています。さらに、3年前から厚労省の開発支援事業として、ハーバーランドで発達障害のある高校生たちが集まる居場所づくりと相談事業を行っています。臨床心理士さんと作業療法士さんを配し、色々なスキルを覚えていく。スライドに示した6人のうち2人は不登校、2人は高校を中退した子どもたちです。そのような青少年が集える場所を作り、そこで日常生活スキルを作業療法士さんと一緒に覚えるということを行っています。

次にご紹介するのは、少し視点を変えた取り組みです。保健学研究科がある北須磨地区で‘お父さんがいかに子育てに参加するか’をテーマに、‘お父さんの子育て支援事業’をしています。食事を作ったり、離乳食を食べさせたり、絵本を読んだりということをお父さんと、私どもの助産師を目指す学生たちで行っています。さらに、保健学科の学生が近くにある福祉施設の中に入って、実際にボランティア活動を行うとともに、いろいろなイベントに参加しています。さらに、施設の職員の方たちに障害のある人々をケアするときのスキルを学んでいただくというような福祉施設と連携した事業も始めています。

最近、高齢者さんが増えています。私どもの研究科では、北須磨団地自治会と連携し、自立した高齢者の方たちと一緒に健康寿命を伸ばす試みを実施しています。地域の自治体の中の高齢者の方たちに定期的に名谷キャンパスに来ていただき、歩くプログラムを施行するとともに、定期的な健康チェック、血圧チェックなどを行っています。実は、同時に、認知面におけるポピュレーションベース研究（ある一定の人口をもつ地域の中でどれぐらいの方たちが認知面での問題を抱えていらっしゃるのか、予防プログラムがいかに有効なのかを前方視的に検証する研究）



を今、一緒に始めています。

こちらのプロジェクトは、既に認知症になってしまった方とご家族に対する支援のプログラムです。実は、なかなかこういう方たちへのプログラムはありません。医学的な最先端の知識を知ってもらう講習会とともに、私たちのところで2ヶ月に1回、ご家族が集まって話し合いを持ったりしています。

また、篠山市でも、5歳児の発達相談事業を行っています。平成22年に始まり、なかなか評判が良くて、兵庫県の中、5万人以下の小さな都市を中心に、次の年には5都市、そして昨年は13都市、今年は18市町村でこのプロジェクトを基盤とした事業が展開されています。このように一つの市町村だけではなく、どこの市町村でもできるようなモデル事業として展開しています。

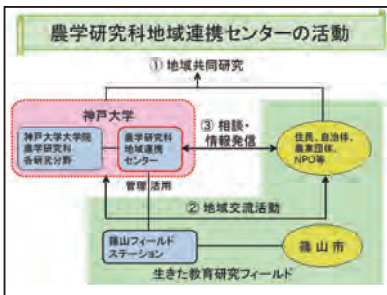
最後に、インドネシアのジャワ島の話をしていただきます。私たちの研究室では、ジャワ島中部地震があったとき、神戸市社会福祉協議会から寄付金をいただきました。そのお金を使い、被災地に‘子どもの家’を作りました。その後、現在まで6年、現地のガジャマダ大学と一緒に共同運営をしております。‘子どもの家’では、小さな子どもたちのプログラム、それから障害を持った子たちのプログラムを展開しています。インドネシアの被災地の子どもさんたちと神戸市の子どもさんとの絵の交換も実施しており、‘子どもの家’と神戸市総合児童センターで相互の子どもたちが描いた絵の展示会を実施しています。

私たちは、地域の中でさまざまな保健活動を行っています。特に少子高齢社会になり、ますます在宅での事業、在宅でのケアが重要になってきます。そのときに、しっかりとした知識を持った方たちをコミュニティに育てていく、さらに、その方たちをサポートできる専門的人材を大学で育てていく、ということを目指しています。このような試みは、ある特定の地域だけではなく、どこの地域でも応用可能です。そして、世界的な保健活動として応用・展開ができるようにと願って活動を続けているところです。これで、私の説明を終わらせていただきます。

奥村 ありがとうございます。それでは引き続いて農学研究科地域連携センターの高田理先生、お願いします。

高田理・神戸大学大学院農学研究科教授

高田(理) 農学研究科地域連携センターの報告をさせていただきます。農学研究科地域連携センターでは、大きく3つの活



(1) 地域共同研究

地域が直面している食料・農業・農村問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体、農業団体、NPO、地域住民などと共同で進める。

	2008	2009	2010	2011	2012
共同研究 ②	2 (2)	3 (3)	2 (2)	5 (3)	7 (4)
認定プロジェクト ③	8	8 (1)	9 (5)	3 (2)	—
合計 ④	10 (2)	11 (4)	11 (7)	8 (5)	7 (4)

注) ()内は、うち篠山市関連研究を示している。
 ② 地域連携センター独自プロジェクト(連携協定に基づき共同研究、連携の充実に資する継続的研究)
 ③ 農学研究科に所属する食資源センターの認定プロジェクト
 ④ この他、管内の職員が独自に地域と連携して行う研究もある。



(2) 地域交流活動

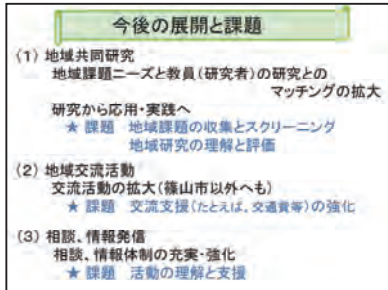


動に取り組んでいます。1つは地域共同研究、2つ目は地域交流活動、3つ目は相談・情報発信活動です。地域共同研究や交流活動は、篠山市を中心に行っています。農学部の前身の兵庫農科大学が篠山市にあったということで、篠山市を中心に活動しています。篠山市からは、篠山フィールドステーションの建物の提供を受け、さらにかかりの財政支援も受けて、活動を展開しています。

まず、地域共同研究活動ですが、農学研究科ですので、食料・農業・農村問題を共同で解決していくといった研究をしています。多くの研究は篠山市を対象に行っていますが、篠山市以外でも、プロジェクトの研究が展開されています。篠山市の場合は、黒豆の産地ということで、黒豆等の地域特産品関連の施肥技術の調査、有機資材の活用、地域内の流通システム、マーケティングなどの研究も行っています。黒豆に関する栽培技術をどのように伝承していくのか、というナレッジマネジメントシステム構築についても研究を行っています。最近ですと、農学研究科の食資源センターで、「香りヤマナシ」などを作っているのですが、それを篠山市に普及させて、スイーツという形で商品化ができないか、そういう研究もしています。さらに、里山林をどのように維持していくかという研究や、鳥獣害の被害も増加しておりますので、その対策についての研究など地域に関連する研究を行っています。

2番目は地域交流活動です。各種のフォーラムも開催しています。先週土曜日も篠山市で地域の方、市の関係者、学生、教職員など、200人以上集め、盛大にフォーラムを開催しました。そういう中で地域との交流を深めており、これまでも何回も行われています。

もう1つは食農コープ教育プログラムの支援です。コープ教育というのは、教室で勉強するだけではなく、現場でさまざまな実践を通してその繰り返しで教育の質を高める実践型の人材を育成しようというものです。1回生のときには「実践農学入門」、2回生のときは「兵庫県農業環境論」で、これは兵庫県の方から講義を受けてワークショップをするものです。さらに、3回生のときは「実践農学」というカリキュラムで行っています。篠山市の方に学生を受け入れていただき、教育のお手伝いをしていただいています。学生も教室だけではなくて、現場で生きた教育が受けられると好評です。受け入れ側の農家の方も、ちょっと面倒くさいところはあると思うのですが、自分の子どもたちとはしゃべる機会はないけれど、若い学生とかが来て、コミュニケーションができて刺激になると好評を得ています。3



年前には、中塚先生編著の『農村で学ぶはじめの一步』という本も出し、コープ教育のときにこの本を使って教育を行っています。篠山市の中での受け入れ先ですが、だんだん受け入れ地域も拡大してきています。

「実践農学」の一環として、食資源センターで開発された「赤じゃが」を普及し、販売する、といったことも行っています。それを使った農家レストランも行い、地域との交流を深めるとともに、学生の教育にも役立てているのが現状です。また、農村で受け入れられて、勉強した学生が授業が終わってもサークルを作り、農家との交流を継続的にしています。今年は大学構内に直売所を設け、そこで作ったものを販売しました。さらに、去年の秋には、柿がなっているとそこに猿が下りてくるので、「さる×はた合戦」と名付け、猿が下りてくる前に柿を獲って猿が下りてこないようにしようということを行っていました。柿については商品化し、鳥獣対策と地域づくりを行っています。

3番目は相談・情報発信です。オフィスアワーを設けて地域の問題の相談に応じたり、情報発信ということでホームページも開設して、更新をしています。昨年から、地域連携トークイベント「A-Launch」ということで、昼休みに先生方の研究を簡単に聞けるように、という試みも行っています。

最後に、今後の展開と課題です。1つは地域共同研究ですが、地域の課題やニーズと教員の研究のマッチングの拡大を図っていきたくと思っています。地域課題のニーズについては、どういうニーズがあるのか収集するとともに、先ほどお話があったように、全ての課題には対応できません。私のところにも「どうやったら儲かるか、そういう研究をしてください」という研究依頼がありました。それが分かるようだったら大学を辞めて私が企業を起こして社長になりますよという笑い話で済ませたこともあります。やはり研究できる課題とできない課題がありますので、それらをスクリーニングしていきたくと思っています。一方の教員の研究ですが、現在農学研究科でも研究が細分化されていてなかなか全てを把握できていません。今後きちんと把握し、できるだけマッチングを図っていきたくと思っています。さらに、研究から応用、実践ということで地域に役立つような方向に持っていきたいと思っています。

大学の研究についてですが、なかなか地域研究、地域連携についての評価が、農学部だけかもしれませんが、あまり評価が高くありません。論文数とか、外部資金をいくら獲ってきたか、というのが評価の対象になっていて、地域にどれだけ貢献した

かとかいうのはあまり評価されません。そのことをきちっと評価していただくことによって、他の研究者の方も地域活動に参加していただけるのではないかと考えています。2番目は交流活動の拡大です。篠山のモデルは、かなり上手くいっているのではないかと考えています。篠山市以外にもこのような活動をできるだけ拡大していきたいと考えています。ただ、交流を行うには、経費等もかかりますので、支援が必要です。今、篠山には布施さんという有能なスタッフがいますので、何とか廻っていますが、他に拡大していく場合には、そういうスタッフを確保、育成していくことも重要です。最後は相談・情報発信の充実・強化です。重複しますが、相談・情報の活動、体制の理解と支援をしていく必要があります。

私からの報告は以上です。今日、お話ししました篠山で実際に活動している布施さんや、コープ教育の立ち上げ以前からやっていた中塚先生もお見えです。篠山市からも来ていただいておりますので、質疑応答のときに補足していただければと思っています。以上です。

奥村 どうもありがとうございました。これで大学の室および各センターのこの10年間の状況がある程度ご理解いただけたと思います。この後神戸市大学連携支援室長の加藤さん、兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長の村上さんからコメントをいただきます。コメントをいただいてから、会場の皆さんと議論を進めていきたいと思っています。それでは、神戸市大学連携支援室長の加藤さんの方からお願いいたします。

加藤久雄・神戸市大学連携支援室長

加藤 神戸市役所の加藤でございます。今日はこういう機会を与えていただきましてありがとうございます。また、発表を聞かせていただく中で、神戸大学さんには神戸市政に関してご協力いただいているということで、改めてこの場をお借りして感謝したいと思います。ありがとうございます。私どもの大学連携支援室は、平成18年に作ったものです。その経緯ですが、市役所には、小学校、中学校、高校、あるいは保育所などはそれぞれに関する窓口がありますが、大学にはありませんでした。多分、県にもありません。その中で、大学の社会貢献がうたわれるようになり、どこが神戸市の窓口か分からないとか、大学生が社会参加をしたいという中で、どこへ相談に行ってもいいのかも分からない、という声が、学長懇という市長と学長が懇談会をする場に出てきたため、作っていったわけです。大学と行



加藤久雄
神戸市大学連携支援室長

政の連携事業は、平成 24 年度で神戸市だけで 634 件あります。主な部分は学生さんを中心とした地域活動と大学の知見を活かすという意味で教育関係での講座をしていただいたり、市議会に参加いただいたり、ということが一番多いです。

神戸大学とは、包括連携協定を平成 25 年に結びました。先ほど推進室からのご報告がありましたように、「空の協定を結ばない」と、中身を具体的に詰めながらやってきました。その中で、先ほどご説明いただいたような実践的なフィールドとして活躍いただくような事業ですとか、工学研究では、浸透膜という膜を、神戸のポートアイランドの処理場で実証実験という形で使っていただくような取り組みもその中に入れて、実践としてやっていっている状況です。

このような考え方は、先ほど奥村先生から地域社会の質的転換というお話がありましたけれども、神戸市もまさにそういうように考えています。震災以降、行政主導でのまちづくりは良くない。協働と参画の中でやっていこう。都市や公共を行政だけで作っていく、あるいは全部措置していくというのでは成り立たないという考え方の中で、どうやったら一緒になってやっていけるのかということで、協働という考え方を出しました。さらにそれを進めて、「2015 ビジョン」、今の中期計画では、「協創」という考え方で、今度は共に価値を作っていく、創造していこうという考え方を打ち出しています。今までは、大学の先生方には、どちらかと言うと貢献という形でお手伝いいただいていたのを、一緒になって何か Win-Win の形でもものが作れないかというのが今の我々の考え方です。

そうした中で、我々が大事に思っているのは、学生さんの社会参加という部分です。先ほど先生のお話の中で、地域連携を通して、ソーシャルスキルが伸びているのではないかとおっしゃっていました。まさに、学生さんに社会参加していただくときに、ともすれば労働力としてお願いするということだけになりがちな面があるけれども、活動を通じて、学生さん自身が市民力を伸ばしていただき、神戸市民として成長していただくというのが一番大事かと思えます。それを積極的に、行政なりに、地域と一緒に支援していこうとしています。例えば、今年度の取り組みですが、神戸大学さんのあるゼミが、1 年かけて神戸市の行政課題を勉強され、政策提案したいとおっしゃいました。1 年間神戸市のさまざまな部署で一緒になって議論したり、実践の中で街を見に行かれたりして勉強されました。我々も一緒について回ったりもしましたが、その中で学生さん自身が地域に愛着を持ち、さらに知らない行政という世界を見て、1

年間終わってきたときに、「ああ、行政ってこんなことをやってるんだな」とか、「地域ってこういう課題があるんだな」とか学ばれ、単なる受け答えが上手くなっただけではなく、スキルというか非常に成長されたなという気がしました。こういう取り組みをさらに一緒になってやっていきたいと思います。

また、研究者の方々との関係では、一方的に知見をお願いして提供していただくというのではなく、行政、地域にそれぞれシーズというものがあると思いますので、それを積極的に提供していく中で、例えば実践的なフィールドとして使っていたり、我々の持っているデータや情報を積極的に使ってもらい、一緒になって研究をしていただいたりして、その成果を市民社会に還元していくという取り組みの方法がないのかと、まさに模索している状況です。簡単ですが以上でございます。

奥村 ありがとうございます。では、引き続き教育委員会事務局参事の村上さんをお願いします。

村上裕道・兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長



村上裕道
兵庫県教育委員会事務局
参事兼文化財課長

村上 兵庫県教育委員会の村上です。今日のお話は10年というお話ですが、よく考えると奥村先生と最初にお会いしたのが20年ぐらい前でした。阪神・淡路大震災の頃で、歴史文化と地域の関連性について再構築しなければならない、地震後の新たな局面にどう対応するのか考えさせられたときだと思っています。そのときに、東北大震災においても実施している文化財レスキューのシステムの組み立てを一緒に考え出しました。その中で、歴史文化を慈しむ社会とはどんな姿かと考えさせられたことを思い出しました。その後、循環型社会における歴史文化遺産の活用方策とか、歴史文化遺産の活用構想とか、また、大学の協力を得て人材育成に取り組んだと記憶しています。現在、人材育成の状況は、建造物の分野から、樹木、造園、美術工芸、民俗、そして、考古学の分野に拡大し、全体で約800人の方々を育成できたかなという状態です。その内、建造物分野では、ヘリテージマネージャーという名前での人材育成の取組が30府県に広がってきた。民間活動リーダーの育成が重要であるということが、他府県でも認知される状況にもなってきました。一方、例えば、美術工芸、民俗の分野のように、なかなか育成が難しい分野もあるということも認知してきています。人材育成が、市民の方々の活動を励起する大きな要素となることが、産官学の方々、みなさんの共通認識になったと感じています。

大学の方への期待として、特に聞いておきたいことが1つあ

ります。現在、神戸大学では地域連携センターを3つのセクションで構成されておられます。歴史文化を扱うセクション、医療福祉関係を扱うセクション、農業、産業を扱うセクションの3つを考えておられます。今後、産官学民で地域再生に取り組む場合、連携の基礎セットをどのように作っておかないといけないか。その点についてのお考えをお教え願いたいところです。なぜ、そういうことを思うかという、セクションごとに見ると、さすがに10年ほど活動をやってくると、今日のご説明のように、それぞれの分野は一つの形をきっちりと作り上げてこられたという思いを持っています。ところが、現実の地域から見ると、それが全体として地域再生として表現できていないと思われる部分もある。例えば、私自身、淡路市の五斗長垣内遺跡の保存に取り組むにあたって、遺跡の保存プラス玉ねぎ、「〇五玉ねぎという昔からの伝統的な野菜の復元」とか、そういう話を営農組合の人としなければならなかった。遺跡保存と玉ねぎの復活が一緒になって、初めて地域の方々がリアリティをもつことを経験したものですから、この3つのセクションがどのように、コンビネーションを持ってくればいいのかということが実践には非常に重要になってくると考えています。また、実践的な段階に入りつつあることを想定すれば、基礎セットがこの3つだけで良いのか等、そのあり方について、お考えを聞かせていただきたいということです。以上です。

奥村 ありがとうございます。今大きな質問が一つ出ています。今のコメントも含め、会場の方からご意見も含め、ここまでの議論の中で何かありましたらお願いします。それぞれのセンターや関係団体で実際さまざまなことをされている方がたくさん来られています。自分のところも含めながら議論していただいても結構です。それも含めてご意見を出していただければと思いますが、いかがでしょうか。

松岡広路・神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター教授

松岡 「人間発達環境学研究科の地域連携センター」と言っているのかわかりませんが、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの、松岡と申します。この地域連携推進室、各地域連携センターのネットワークができたお陰で、我々部局のヒューマン・コミュニティ創成研究センターという、地域とつながって実践的な研究をしたいという元々の部局の意義みたいなものを、いわゆる大学側がサポートしてくれているという印象が強い



す。10年を経て、そのお陰というのは僕はかなりあると思っています。神戸大学が地域連携、具体的には、地域とつながる、あるいはアクションのようなものをキーワードにした取り組みに対して、全体的に予算を出してくれている。神戸大学の一つの特徴になり始めているなという印象を持っています。

先ほど村上さん、加藤さんに県や市の立場からご意見をいただきましたが、一言で言えば、まだまだ足りないということ。大学の先生方が、ゼミとか個人で自分の持っているものを出して、地域とつながっているというところを見せても、地域の方から見たら、大学というのはもっと総合的な力を持っているのではないか、その力を出し惜しんでいるのではないかと思われる、というご指摘かと思いました。まさにそのとおりだと思います。でも、この10年、最初の頃のこの発表会の形式的なものから比べると、相当こなれた事業が出てきているし、そしてまた、実はそれぞれがつながる可能性を持ち始めてはいると思います。

例えば、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターでは、大学のさまざまな領域を総合化していくということで、持続可能性とか、持続可能な社会づくり、つまりESDというキーワードでつないでみようと考えています。そして、そこでの人材育成とか、まちづくりに貢献できるようなものは、もしかすると行政側が総合的に考えたいこととつながっているのではないか、というような考え方もしています。これは全員が全員ではないのですが、これは奥村さんとも議論したのですが、何かつながる核みたいなもの、層みたいなものが、やや見え始めているというような印象を持っています。いかがでしょうか。

奥村 ありがとうございます。他の方も、何かございませんでしょうか。

伊藤真之・神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授（発達支援インスティテュート サイエンスシヨップ 副室長）

伊藤 人間発達環境学研究科の伊藤です。村上さんが最後におっしゃった事例ですが、それは例えば、昔の玉ねぎをもう一度復活させたいという相談を大学に持ってこられたときに、対応してもらえるのか、とそのようにとっていいのでしょうか。

村上 我々が地域として認知する形を作ろうとすると、文化財課に所属している私でさえ、営農組合の方とお話をして一つの製品にしていけないといけない、というような状況になってき

ていることを前提に「連携センター」を初めとする産官学の連携を構築しなければならないと言いたいのです。各セッションでの話は、おっしゃったようにそれぞれは非常に育ったと私自身も感じています。だけど、地域の方は、セッションごとの結果では満足しないというか、それでは一つの成果品として見にくい状態として感じているということです。成果品として、みな認知する形のものを総合的に創る必要があると考えています。そのときにはいろんなバリエーションもあるけども、基礎セットみたいな考え方が必用と思っています。また、総合大学であればさまざまな専門の方がいらっしゃいますから、必用にに応じて適任者を呼んでさまざまな対応パターンを構築できる。そういうことを考える段階にステージアップしなければならない時期と思っているということです。

伊藤 ありがとうございます。

奥村 その点で篠山市の竹見さんから、ご意見が伺えたらと思います。大学側ばかりでなく自治体側からどういうことが課題なのか、もしくは感じられていることを教えていただければありがたいと思いますがいかがでしょうか。

竹見聖司・篠山市政策部企画課 篠山に住もう帰ろう室 室長

竹見 篠山市の竹見です。先ほどからお話を聞いていて、篠山市が平成22年に大学協定にランクアップしたいとお話したときにも、形式的なものから入ったのかなという気がしています。私個人の印象で思ったのは、神戸大学さんの3つの地域連携センターが個別に動かれているのを総括されているというお話のときに、外から見たときには統一していただくのが分かりやすいのかと感じたのは事実です。ただ、その後、大学の先生や行政の方もそうですし、市民の人々も、属人的な形ではあると思うのですが、さまざまな活動に取り組むうちに、大学の活動というものが、篠山の場合は、市民の人たちに見えるような形で現れてきた。そういったことの積み重ねが今、少しずつ進んでいる状況で、どこを目標にどれぐらいの成果を出すというのは、これからのそれぞれの目標の持ち方かなとは思っています。少なくとも前に進んでいるなどは思っています。ただ、村上さんもおっしゃるように、市民の方も含めて、大学に対しての期待が大きい。高田先生も言われていましたが、「儲かる方法を教えてくれ」。そういう直接的な効果をすぐに求めてしまうというのも、一方であると思いますので、その辺を上手く説明しながら前に向い



て進んでいくしかないのかと思いました。

奥村 はい、ありがとうございます。いかがでしょうか。今、総合化といいますか、地域そのものの持っている全体性と私たちの持っている個別性、専門性、そして専門性の中にある独自の広がりのようなものをどのような形で考えていったらいいかという、比較的大きい問題がでました。すぐ結論も出ないかもしれませんが、具体的な現場も含めて、ご意見あるかと思います。もう1つか、2つぐらい出していただければありがたいのですが、いかがでしょうか。

布施未恵子・神戸大学大学院農学研究科地域連携センター／篠山フィールドステーション特命助教



布施 篠山フィールドステーション、農学研究科地域連携センターの布施です。加藤さんのお話の中で、行政のニーズに応じた研究の話が出ていました。昨年度から農学研究科の大学院に、行政の職員の方が社会人として入学されたこともあり、一緒に研究するという行政のニーズに合わせた研究が進んできたのかなという思いがあります。そういう形での行政の方の大学の入り方というのが一つの切り口としてあるのかと思いました。村上さんのおっしゃることは、難しい課題だと思います。平成22年に神戸大学と篠山市の連携が全学協定になりました。現場で携わっている人間からすると、先日の篠山市でのフォーラムで、丹波地域が兵庫県の中でも健康な高齢者が多いという結果があるので、丹波市、篠山市で一体どういうことをやられているから健康なのかを調べてみたいということを保健学研究科の先生がおっしゃっていました。それが農業という活動の中にあるのならば、農学研究科の活動と連携して何か研究できるのかなと思いましたし、人文学研究科の古文書調査をしている日置地区に、来年度農学部の実習で入るとというのがやっと決まりました。やはり3年ぐらいかかってきたというところなので、それぞれの分野のセクションが連携して成果をみんなが望むような形でできるには、数年かかる。しかし、もしかしたら何かできることもあるかもしれません。基本セットとして何が必要かというのは「これ」という答えはまだありませんが、少なくとも、しっかりした研究の視座と、それについていく地域のリーダーがあれば上手くいくのではないかと個人的には思っています。以上です。

村井良介・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員

村井 人文学研究科地域連携センターの村井です。今、先ほど総合というお話がありましたが、いくつか慎重に考えないといけない部分があるのではないかと思います。市澤先生のお話は、大学への丸投げというのはあまり良くない。「ここまではできるけれども、ここから先はできないから大学に何とかしてほしい」というようなことが、上手くいくための条件だというお話だったと思います。先ほどの儲かる方法ではないですが、何かよく分からないけれど何とかしてください、大学は総合力があるから何とかできるでしょうと言われても、上手く応えることができないと思います。丸投げという意味での総合ということでは、よくないと思います。では、その前に何をどう課題としたらいいかとか、どういうことを大学に求めたらいいかという整理をしていくことが何らか必要になってきます。大学はそこに支援ができるのではないかと思います。もちろん、元々地域に暮らしておられる方は、それぞれの暮らしの中でさまざまな自分なりの課題というか、それぞれの文脈の中で何か問題があったり、こうしたいとお考えの部分があったりすると思います。それをどうやって論点として整理するかというようにところに、大学の支援、力を発揮することができるのではないかと。それをなしに、中間のところをすっ飛ばして、いきなり総合的に何とかしてくださいという丸投げになってしまうのではあまり良くないと思ったところです。

奥村 いくつかまだご意見があるかと思いますが、今までのご意見を踏まえて3センターから出ている方からお話を聞いてみたいといいます。まずは人文の市澤先生からお願いします。

市澤 いろいろとご意見ありがとうございました。結構自分の関心と重なるところがあります。加藤さんが言われた、ソーシャルスキルの育成というのは大学の目標としてあっていいのではないかと。それができるのは地域をフィールドとした教育・研究ではないかと思うので、大学全体として専門的な勉強もしていくのだけれど、同時に市民として社会に一人一人の学生を送り出していくという意味を考える必要があると思いました。ニーズを活かすということについても、村井さんの発言にも関わりますが、そのニーズがきちっと形として見えてくるというのがどうしても大事ではないか。私の苦い経験だと、あるところで連続の地域史の研究会をやっていたのですが、中核の方が引退された後で、「次、いつ来ましょうか」と言ったら、「来ても

来んでもええよ」と言われました。「じゃあ、やめましょか」と言ったら、「やめんのは困る」と言われ、一体何を求められているのか分からないまま宙ぶらりんで数年間推移し、その間、非常に無為なやりとりをしました。結局、音信不通になってしまったのですが、やはりニーズというものも、形をはっきりさせていくのか、ということは大事かと思いました。

村上さんのお話は、僕は良く分かるというか、玉ねぎと切り離してこの遺跡の保存はない、というような地域からの問題の考え方というのは、大学の学問の成り立ちとは全然違う絡み方をしていると思うので、それをきっちり我々が組み上げて認識すること、それ自体が非常に大事だと思います。その上で、どう対応するか。総合性の問題になると、先ほど伊藤先生が報告されたことがやっぱり鍵になるのではないかと。大学全体がいろんなテラシーをコミュニティとして持っている。その中で、社会関係資本という言葉が使われましたが、誰に聞いたらどんなことが分かるとか、誰がどんなところでどういう活動をやっているというようなことが、このような場で共有することができれば、組織的にかっちりしたものを作らなくても、できるのではないかと。それをどう強化していくのかということが、今後の室の課題とかになってくるのではないかと。以上、いろいろとどうもありがとうございました。

奥村 はい、それでは高田哲先生、お願いします。



高田哲 保健学研究科教授

高田（哲） 私は元々医学科出身で、今は保健学研究科に所属しています。研究発表するときは、ヒューマンファクターをどんどん外して行って、できるだけ普遍化できるものに集約し、それを事実として証明していくということが、サイエンスだと考えていました。ところが、実際の臨床現場で働いてみますと、そういうことだけではなく、個々の人が持っている生き甲斐とか、日常の生活とか、さまざまなヒューマンファクターが絡んできます。地域連携活動をしながら、専門性だけでなく総合性が必要だということを再認識したと思います。センター同士が、それぞれの活動をしながら行政を含めてどう結びついていくかという時に、2つの側面があるかと思っています。1つは専門家集団の中でのネットワークを如何に上手く作っていくかに関する工夫です。逆に言いますと、ある程度専門家であっても、先端のところがごく狭い領域だけで働ける人ではなくて、先がある程度丸くなっていてカバーできる領域が広い専門家が必要なのです。大学では、先端のところが人材だけでなく、先端が丸く

なっている人材（総合的な知識を持った専門人材）も育てていくことが必要だと思います。もう1つは、先ほど行政の方から連携は大切だと言っていただきましたが、一方で危惧することがあります。といいますのは、専門的なことになればなるほど、専門的な集団にそれを委託するというようになっていきますと、行政組織そのものに、そういう専門性を持った方が全くいなくなってしまう。私たちが行政と一緒に事業を行うときには、当然行政側にもその事業を通じて専門性を高めていかれる方が生まれていきます。そういう方を行政の中でも評価していただきたいと思います。我々も大学の評価というところで、こういう地域連携活動に対する評価が低いということを述べてきていますが、評価を考えるときには、本当に大学でどういう人材を作っていくのか、行政組織にはどういう人材が必要なのかということを考えないとならないと思います。

奥村 ありがとうございます。それでは、高田理先生、お願いします。



高田理 農学研究科教授

高田（理） コメント等ありがとうございました。玉ねぎの復元の話、お伺いしましたが、マーケティングの視点から言いますと、最近はモノからコトにということで、そういう歴史的なことがないとモノも売れません。品種の復元だけではなく、歴史がどう関わっているのか、そのようなことも検討していく必要があると思います。そういう総合化が必要だと思います。現在、3つの地域連携センターしかありませんが、それ以外の学部でもセンターか何を作られ、それがネットワーク化していくことが必要だと思います。ただ、全て丸投げするというのではなく、地域からどのようなニーズがあるのかを整理し、受け手側の大学では専門的な研究が細分化していますので、それに応えられる専門家なり、専門的な知識があるのかを整理し、マッチングするというのを、推進室でやっていただけるとありがたいと思っています。以上です。

奥村 ありがとうございました。いくつか課題があるかと思うのですが、私は3つぐらい考えておく必要があると思います。1つは、先ほど高田哲先生からも出ましたが、大学側の持っている専門性とか、研究のスタイルなど、私たちの持っている弱み・強みを、上手くツボを押さえられると乗っていくということがあると私は思います。神戸大学で上手くいっているところの事例を見ていると、篠山市の竹見さんもお話されましたが、課長、

部長級の方が上手く我々を使っていらっしやる。ちょっと語弊がありますけども、大学にどんな人たちがおるかをつかんでいらっしやると、かなり上手く行って、日常的にもでき上がってくる気がする人が多い。大学よりは本当は行政の方のほうが、ジェネラルな力は当然持っていらっしやると私は思います。村上さんにも、さまざまな方をご紹介していただきました。一方で、その行政の人たちが大学の専門家の人たちとどう付き合っていくのか、また住民の方が大学と行政とどう付き合っていくのかというのは、三者の関連性だと思います。それ自身も変わり始めている、もしくは、そういう力のあるところで大学側の地域連携も進んでいると私は思います。恐らくは、松岡先生が東日本に入られて上手く関わっておられる自治体は、復興のときでも力を持っているのではないかと。ここのところは私どもと共に、広い意味での研究課題として捉えていただいたらすごく大きな仕事になるのではないかと思います。わりと勘でやっているところが相互にあるのではないかと、私自身は思っていますので、単に勘だけではなく、詰めていく作業をできればと思います。

2つ目に、神戸大学の実践では、やはり篠山にフィールドステーションを設けていただいたことが非常に大きいと思います。場所だけではなく、布施さんのように、他をつなごうという意思を持って駐在している研究員の方がおられることが大きいと考えています。本当は室自体が、神戸市や兵庫県との関係でそのような役割を果たさなければならぬのではないかと。現場で、全体を調整できるような形が作れるかどうか。今後、三木市とか新しく連携が深まりつつあるところでも、そのようにしていけるかどうかというのは大きな課題だと思っています。全体として「あーち」ができ、「篠山フィールドステーション」ができたことを受けて、私たちは、場と人をつなぐようなものを、各センターと関わらせて作っていくことによって、一種の総合性に関われるようなスタイルを採っていければと思っています。

3つ目は、松岡さんから出ましたが、全体として総合性を持つことを大学の中でしっかり考えていけるような集団、神戸大学という枠の中で、大事だと思われる地域との関わりを、それぞれの学問分野と関わりながら考えていけるような集団を、学内で作っていくことも大事かと思っています。今日もお話ししましたが、「研究部」と仮に言っていますが、何らかの形で系統的に分野を超えて議論する組織、そういうことをしていただける先生方を支援するようなシステムを、地域連携推進室としては作っていきたい。次の神戸大学と地域をつないでくださるよ

うな若手・中堅の方を中心としたシステムを作っていく時期になっているかと思っています。私たちの地域連携では、私自身も含め、阪神・淡路大震災での経験がきわめて大きい研究者が多く、それも含めて地域連携を考えているところがあります。逆に言うと、その世代がいなくなったら、なくなってしまうということになりかねない。今後神戸大学全体で、どう引き継いでいくかということが大きな課題になっていく気がしています。そのようなことも含めて室の活動を進めていきたいと考えているところです。

今のことも含め、最後に少し会場の方々、パネリストの方々、どなたからでも結構です。さまざまなお話が出たかと思いますが、「こういう形で進めていったらいいのではないか」、むしろ「ここはこう考えるべきじゃないか」というようなご意見等がありましたらお願いいたします。



佐々木和子 地域連携研究員

佐々木 一言だけ言わせていただきます。奥村先生がおっしゃったように、阪神・淡路大震災の経験が、私たちの大学での地域連携には大きな影響を与えてきました。それこそ震災から20年近く経ってきましたので、次の段階へつながる、つなげられる若い先生方が参加していただけるような仕組みが必要だと思います。3センターと言いながら、つないでいくのは人です。総合力という意味は、人間自体が総合で生きているということなので、そういった人々をつなげられる、若い先生方が大学の地域連携に関わっていただけるような仕組みを考えていきたいと思っています。私たちの実施している公募事業というのは、学内で3センター以外の先生方の中に、思いを持っていらっしゃる先生方を見つけないという考えで始めた事業です。何年か続けてきますと、公募事業を通じて、さまざまな先生方と一緒に仕事ができることを嬉しく思っています。また、いろいろな仕組みづくりの中で一緒にやっていける先生を見つけていきたいと思っています。

村上 もう一点大事なところですが、この地域貢献が先生方の業績として評価されにくいということについて、外部のセクションの人が評価し始めないと積極的に取り組む人が増えないということだと理解しました。いろいろな場を使って、顕彰する方法を考えないといけないと感じました。もう一点、丸投げの話ですが、基本的に丸投げをする地域はどう転んでも上手くいきません。そうではなく、健全にちゃんと考えて頑張ろうとされているところを、まずは考えましょうということでご理解願

たいと思います。

奥村 どうもありがとうございました。会場の方で他、いかがでしょうか。中塚さん、いかがでしょうか。

中塚雅也・神戸大学大学院農学研究科准教授

中塚 専門の話や総合の話ですが、基本的には、皆さんがおっしゃるように個人のネットワークだと思います。だからセクションの壁とか、そういうものを少し下げる取り組みとか考え方が大事かと思います。あと、関わっていて関心を持たれる先生は多いのですが、何せ忙しい。レポート150枚を採点するような仕事をされていると思うので、先ほどの評価とかと合わせて解決していかないと、先ほどからおっしゃっているように、僕は震災のとき学生だった世代ですが、次の世代に、なかなかつながっていかない。教養の授業を一コマするよりも、連携センターの仕事の方が評価が低い状態の中で、なかなかそのことには関わりにくい。その辺をしっかりと推進室の方をお願いというか、大学内でしっかりと評価するシステムを作っていただければと思います。

奥村 ありがとうございました。毎回この会は、最後に評価の話になって終わります。それは私たちにとって大きなことからです。ただ、私たちもあまり意識もしなかったのですが、先ほどお話したように、科学研究費の採択課題を見ていくと、地域をフィールドとした内容のもので、基盤AとかBが結構多い。たくさんの先生方が参加されて何かをしようとするとき、一つのものを作っていくときに、地域課題はやりやすいといえやうりやすいし、そこには大きな研究の課題があるということもなってきました。これまで研究の話と関連付けて意識して議論したことがあまりなかったのですが、先ほど高田哲先生の方から文理融合型の研究というお話がございました。新しい研究の芽もここから生まれてくるということも含めて、評価の問題を考え、保障していきたいと思っています。10年が経ちましたけれども、さらに一歩ずつ進んでいきたいと思っています。今後またいろいろとご協力のほど、よろしく願います。今日はどうもありがとうございました。



長井 ありがとうございました。以上をもちまして今回の地域連携活動発表会を終了いたします。どうもありがとうございました。

本日は、「神戸大学地域連携活動発表会」にご参加いただきありがとうございました。
今後の発表会の参考とさせていただきますため、下記のアンケートにご協力ください。

(該当事項には、□にチェックしてください。)

1. 本日は、どちらからのご参加ですか。

学内 学外 → [他大学 自治体等 その他 ()]

2. ご参加は初めてですか。初めてでない場合、何回目のご参加ですか。

初めて参加 2回目 3回目以上

3. 神戸大学地域連携活動発表会の開催をどのようにしてお知りになりましたか。

Web サイト チラシ ポスター 学内通知 その他 ()

4. (学内関係者の皆様へ) 学内に向けて地域連携事業を公募したことはご存知でしたか。

知っていた ↓ 知らなかった

[学内通知 大学 Web サイト 地域連携推進室 Web サイト その他 ()]

5. 活動報告の内容はいかがでしたか。

・映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携

大変興味深かった 興味深かった あまり興味を引かなかった 全く興味を引かなかった

感想

・佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援

大変興味深かった 興味深かった あまり興味を引かなかった 全く興味を引かなかった

感想

・大船渡ワークキャンププロジェクト

大変興味深かった 興味深かった あまり興味を引かなかった 全く興味を引かなかった

感想

・県営明舞団地における居住者目線の団地の歴史の記録・編集

大変興味深かった 興味深かった あまり興味を引かなかった 全く興味を引かなかった

感想

6. ポスター展示はいかがでしたか。

大変興味深かった 興味深かった あまり興味を引かなかった 全く興味を引かなかった

感想

7. 意見交換会はいかがでしたか。

参考になった 参考にならなかった その他

感想

8. その他、本日の発表会についてご感想またはご要望があればご記入ください。

()

9. 日頃、大学の地域連携活動について感じておられることがあれば、ご記入ください。

()

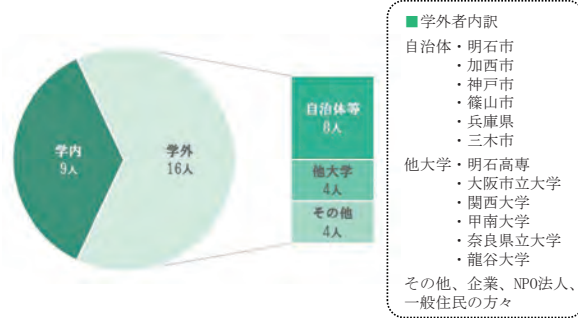
ご協力ありがとうございました。

(神戸大学地域連携推進室)

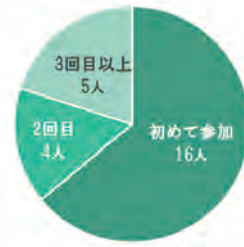
平成25年度地域連携活動発表会 アンケート集計結果

平成26年1月30日(木)実施 アンケート回収数：25名分

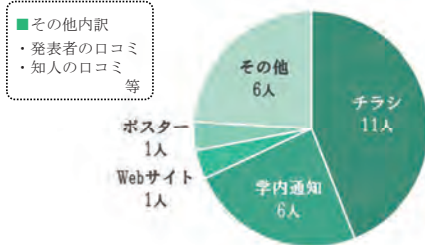
質問1 本日は、どちらからのご参加ですか。(N=25)



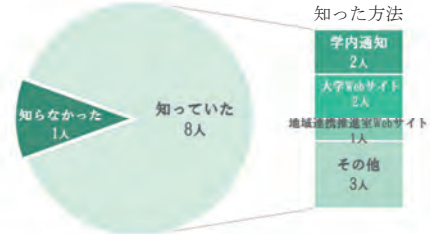
質問2 ご参加の頻度はいかがですか。(N=25)



質問3 発表会の開催をどのようにしてお知りになりましたか。(N=25)

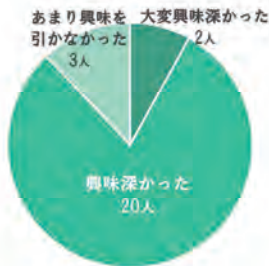


質問4 学内で地域連携事業を公募したことはご存知でしたか。(学内者のみ：N=9)



質問5 活動報告の内容はいかがでしたか。(N=25)

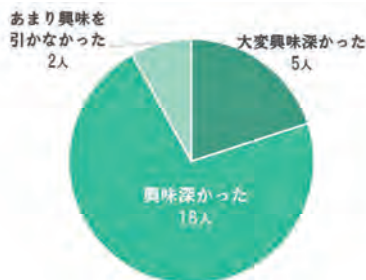
① 映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携



ご意見

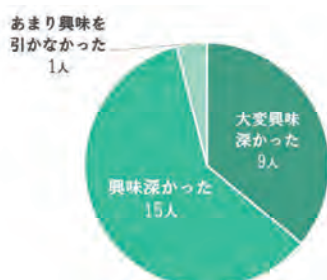
- 映像資料の整理など、市にとっても学生にとってもメリットのある有意義な活動だと感じました。【他大学】
- 昔の映像資料を後世に残すすばらしいプロジェクトだと思います。【学内】
- 映画フィルムが劣化するとくさいって知らなかった。【学内】
- 今後の展開（フィールド、教材としての活用）に期待しています。【学内】
- 映画の街 神戸の記録を整理してください。楽しみです。【他大学】

② 佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援



- 淡路、佐用の地域との関係で科学しているところに関心をもちました。【学内】
- 研究業績にもつながる地域連携活動の事例だと思います。【学内】
- 生物調査や実習についての、小中学生、市民の感想が知りたい。【学内】
- コミュニティ・リテラシーについて興味深い。【他大学】

③ 大船渡ワークキャンププロジェクト



- 学生の積極的な活動に、大変感心いたしました。【学内】
- 地域社会と協働した興味深い学生の活動である。【他大学】
- 活動報告ではなく、参加した学生の特徴、プロジェクトで得たこと、震災を経験した神戸だからできることなど分析的報告を加えてほしい。【他大学】
- 大船渡現地での活動だけでなく、地元神戸での募金活動など、遠隔地をつなぐ活動である点が、素晴らしいと感じました。【他大学】

④ 県営明舞団地における居住者目線の団地の歴史の記録・編集



- ・全国の団地問題に先がけた内容でおもしろい。【学内】
- ・オーラルヒストリーの蓄積は重要です。それがうまく地域に生かされるといいと思います。【学内】
- ・団地の外と団地との関係はどうなっているのだろう？【学内】
- ・学生個人の活動で頑張っているが、継続性が求められる。【他大学】
- ・学生が団地内に居住して活動している点が非常に有意義だと感じた。このような事例が今後も大学としてどんどん展開されることに期待したい。【自治体】

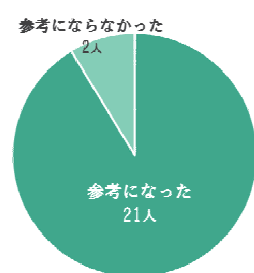
質問6 ポスター展示はいかがでしたか。(N=25)



ご意見

- ・地域連携について、さまざまな切り口の研究や活動があるのはおもしろい。【学内】
- ・大学らしく、細かい筋が通っていた。【一般参加者】

質問7 意見交換会はいかがでしたか。(N=23)



ご意見

- ・10年間の集大成でよく分かった。【学内】
- ・もう少し行政の方（加西や篠山など）にも発言していただければよかったですと思いました。【学内】
- ・話をもっと聞きたかった。【一般参加者】
- ・行政と大学の連携について、相互に求められる人材・内容を備えるため、ある市との連携に基づく経験を他市との関係づくり時に教示いただけたらと思います。【自治体】
- ・10年取り組んでなお、何が課題なのかを共有でき、大変参考になった。村上課長の問題提起がとても良かった。課題を乗り越えるための工夫についてもう少し聞きたかった。【他大学】
- ・大学の地域連携に対する取り組みへの大学の評価の確立にはまだ到っていないことを知った。【自治体】
- ・各部署を中心とした地域活動を推進しているということ、学生の活動にも助成されていることが特に参考になりました。【他大学】
- ・地域連携センターと、機会があれば是非連携したいと感じた。【自治体】

質問8,9 本日の発表会のご感想・ご要望や、日頃大学の地域連携活動について感じておられることなどをお聞かせください。

■ご感想

- ・社会と大学とのつながりを見ることができた。【学内】
- ・地域のニーズとのギャップの話は、三分野で地域連携していくことの必然性の問題であると感じました。【学内】
- ・大変楽しい発表会でした。次回も参加したい気持ちです。【民間企業】
- ・多くの大学が地域連携活動を進めているが、その課題には共通性がある。【他大学】

■ご要望

- ・時間どおりに終了してほしい。【他大学】
- ・ポスターをもう少し時間をかけてみたかった。長期にどこかに掲示することはできないでしょうか。【学内】
- ・公募事業の詳細(事業の一連の流れ、部局間での役割分担、資金管理など)にも触れていただきたかったです。【他大学】

■日頃大学の地域連携活動について感じておられること

- ・まだまだ少ないので、予算を含めてもっと広げることが重要だろう。【学内】
- ・評価、重要です。【学内】
- ・HCセンターや、科研研究にもスポットをあてて、積極的にプログラムの中に入れてもよいと思いました。【学内】
- ・多様な学生がもっと巻き込まれる形を模索していただきたい。【学内】
- ・(スポンサーに限らず)民間企業が介在する余地、可能性はどの程度あるのか。【民間企業】
- ・いかに、持続可能な組織をつくるかが、大切に思う。【他大学】
- ・地域で活動している教員への評価が同じく課題となっています。【他大学】

第II章

研究科地域連携センター等報告

平成 25 年（2013 年）度 人文学研究科地域連携センター活動報告 (2014 年 3 月現在)



大学院人文学研究科（文学部）では、平成 14 年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年 11 月には地域連携研究員制度を創設し（現在 5 名）、翌年 1 月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成 19 年の改組にもとづき、現在は人文学地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して支援していくことを目的とした事業である。事業を開始させてから 12 年目に入る今年度には、約 30 前後の個別事業を展開した。

このうち今年度の新事業として、加西市の歴史資料の保全・活用をめぐる事業があり、平成 24 年度までの特別研究プロジェクト「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業（文部科学省採択）を定着させる事業が始まった。またセンターを基盤研究組織とする科学研究費補助金基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保存論を基盤とした地域歴史資料学の構築」が最終年（5 年目）に入り、その研究成果を、奥村弘編『歴史文化を大災害から守る - 地域歴史資料学の構築 -』（東京大学出版会、2014 年 1 月）として刊行できた。

さらにセンターが担当する人文学研究科の「地域歴史遺産保全活用基礎論」の講義テキストとして、『「地域歴史遺産」の可能性』（センター編、岩田書院刊）を 2013 年 7 月に刊行した。

次頁以下が、今年度センターがおこなった個別事業の一覧である。

(1) 第12回 歴史文化をめぐる地域連携協議会の開催 @ 文学部

- 「地域歴史遺産の可能性を考える」をテーマにして、自治体・住民・大学関係者を一堂に会した協議会を2月2日に開催。58機関96名の参加者が活発な議論をおこなった。

(2) 地域づくり支援と自治体史の編纂

■神戸市

- 包括協定にもとづく灘区との連携事業・・・平成18年度刊行の冊子『水道筋周辺地域のむかし』等の普及活動。
- 神戸市文書館（都市問題研究所）との連携事業・・・館蔵資料の台帳整備。市民のレファレンス対応への協力。
- 神戸を中心とする文献資料所在確認調査・・・地域団体との連携（本山親父の会・新在家ふれあいまちづくり協議会）／神戸北野美術館への展示協力／有馬温泉奥の坊所蔵文書・絵画調査。
- 財団法人住吉学園（住吉財産区）との連携事業・・・関連資料の基礎的調査。資料館だよりの刊行協力。
- 淡河山田土地改良区との連携・・・土地改良区の東播用水土地改良区との統合に伴い不用となった土地改良区関係資料の現地調査および整理・保存・活用に関する助言。
- 神戸元町商店街連合会（みなと元町タウン協議会）との連携・・・とくに動きなし。

■大学協定にもとづく小野市との連携事業

- 下東条地区の地域歴史遺産掘り起こし事業に協力。地域展の開催を支援。協定更新に向けて協議中。

■連携協定にもとづく朝来市との連携事業

- 生野町奥銀谷自治協議会での山田家文書の整理活動への支援（月1回）／枚田家文書の整理、目録化。

■丹波市での連携事業

- 人文学研究科との「歴史遺産を活用した地域活性化」をめざす協定（平成19年8月締結）にもとづく丹波市との連携事業・・・①6町巡回歴史講座「丹波の歴史文化を探る一古文書との出会い」を7月～2014年1月にかけて計6回開催。平均参加者数30名。
②7月「地域歴史遺産の活用事例発表会」を柏原住民センターにて開催。参加者数33名。一般市民による地域歴史資料のまちづくり・まちおこしへの活用事例の発表会／③市内古文書調査。上田天満宮（市島町）、高座神社（山南町）などで実施。
- 春日町棚原地区との連携事業・・・地区内資料の基礎的調査の続行。

■連携協定にもとづく加西市との事業

- 2009年5月に締結された協定にもとづく青野原俘虜収容所関連資料の調査研究／加西市野上町の襖下張り文書の整理事業の開始（9月以降、現地にて住民と共同した作業）

■伊丹市との連携

- 東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクトにもとづく岩沼市との連携事業に協力。

■篠山市との連携事業

- 篠山市立中央図書館地域史料整理サポーター活動への支援（計6回）

■尼崎市

○尼崎市立地域研究史料館による新修市史の執筆活動に協力。

■三木市

○文化庁の「地域伝統文化総合活性化事業」助成にもとづく「三木市文化遺産活用・活性化事業」の協力を続行。市民と協同した玉置家文書の整理作業。古文書講座の開催（計4回）。報告書と書籍目録の刊行。

■三田市

○自治体史フォーラム（3月15日開催予定）への協力。

■明石市

○旧明石藩主松平家文書および旧明石藩士黒田家文書の調査・研究／明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界Ⅰ」（2013/9/21～10/20）の主催（展示立案構成・図録執筆・講演会への講師派遣・展示解説）／新・明石市史編纂へ向けた準備協議。

■たつの市

○神戸大学近世地域史研究会・・・『新宮町史』史料編刊行後、市民と協力して収集・整理した「町史未収近世史料」の調査研究会を継続開催。『観聞記』の研究結果の刊行予定。
○たつの市教育委員会との連携・・・平成25年度「市民と大学が創る歴史ひも解き事業」に協力（古文書講座、市民講座支援）

■高砂市

○文化財審議委員に任命されたスタッフが市の文化財行政について審議。

■淡路市

○市教委所蔵文書の保全事業（昨年度）を踏まえた新たな連携事業について協議中。

■佐用町との連携

○とくになし。

■福崎町との連携事業

○福崎町立神崎郡歴史民俗資料館、および柳田國男・松岡家記念館特別展の展示協力（2013/10/18～11/24）／福崎町域の風土記遺称地の調査／柳田國男を中心とした松岡兄弟にかんする研究／大庄屋三木家にかんする資料調査等／山桃忌への協力。

■猪名川町との連携事業

○平成24年度リバグレス猪名川歴史講座の開催協力（近現代史コース）

■自治体史の編纂事業

○『香寺町史 村の歴史』の普及定着活動／①香寺町史を読む会の実施（約30名。隔月開催）／②『いくはべの里岩部』の刊行協力／③大字誌フォーラム（2月）の開催協力。

(3) 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

■歴史資料ネットワークへの協力・支援

- 東日本大震災の歴史資料の救済・保全活動への協力等。
- 神戸市兵庫区平野地区における古文書調査と古文書教室の開催協力
- 石川準吉古文書の整理事業
朝来市生野町に関連する石川準吉文書（東京都と神奈川県に所蔵）。

(4) 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

- (S) 科研グループの主催する「地域歴史資料学研究会」に協力。

(5) 地域歴史遺産の活用をはかる人材養成（学生・院生教育）

- 現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供。
- 地域歴史遺産保全活用基礎論 A、B・・・地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。前後期とも金曜 1 限に開催）。本講義用テキストとして、地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』（岩田書院、2013 年 7 月）に刊行できた。
- 地域歴史遺産保全活用演習・・・篠山市内の古文書を用いた合宿形式の演習を開催（9 月）。
- 地域歴史遺産活用企画演習・・・市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を 2 月に開催予定（三木市にて）
- 教員養成 GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動
- 「地歴科教育論」の開講（前期）、御影高校と連携した地域をテーマとした課題学習。

(6) 平成 23 年度科学研究費助成金・基盤研究 (S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

- 科学研究の基盤研究組織として研究分析を支援。東日本大震災に対応した実践的な調査活動を実施。11 月に被災地フォーラム @ 宮城の開催。3 月に総括研究会の開催予定。

(7) 平成 22 年～ 24 年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

- 10 月 5 日・6 日に文学部公開講座として「まちづくり地域歴史遺産活用講座 2013」を神戸大学において開催（共催：兵庫県教育委員会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区）。1 月 12 日・13 日・25 日には、兵庫県教育委員会主催の篠山歴史文化養成教室「篠山の歴史文化を学ぶ」の一環として、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」を開催。
- 市民向けの古文書初級講座の開催、デジタル化した「神戸又新日報」データの公開。

(8) 神戸大学附属図書館との連携

- 神大附属図書館所蔵・貴重書庫文書整理・公開事業への協力。

(9) 地域連携研究とスタッフによる調査研究

- 地域連携センター発行の学術年報『LINK ー地域・大学・文化』第 5 号の刊行（2013 年 11 月）。特集 I「地域の歴史性・重層性と市民主体のまちづくりー新たな共同性を求めてー」、特集 II「工藤敬一氏インタビュー 歴史学は地域とどう向き合うか」など。
- センタースタッフによる個別の科研調査研究のほか、各地の講演会等への協力。

（以上の文責は、人文学研究科地域連携センター研究員坂江渉）

「地域歴史遺産」の可能性

神戸大学大学院 人文学研究科 地域連携センター 編

岩田書院



9784872948165



1921021048002

ISBN978-4-87294-816-5
C1021 ¥4800E

定価：本体4,800円＋税

【主要目次】

序章 地域歴史遺産という可能性……………奥村 弘

第Ⅰ部 地域社会の変容と「地域歴史遺産」

第1章 地域歴史学からの問い……………三村 昌司

第2章 市町村合併の現状と課題……………岡田 知弘

第3章 地域社会における歴史系博物館の役割……………古市 晃

第4章 自治体編纂事業の役割を考える……………村井 良介

第5章 戦後郷土史のなかの地域歴史遺産……………添田 仁

第Ⅱ部 「地域歴史学」の広がり

第1章 災害と地域歴史資料……………坂江 渉

第2章 風水害からの歴史資料保全……………河野 未央

第3章 現代資料論……………佐々木和子

第4章 地域歴史遺産としての公文書……………佐々木和子

第5章 地域の中の世界史……………大津留 厚

第6章 地域における伝統企業の史料と活用……………石川 道子

第7章 地域博物館の展示……………森田 竜雄

第8章 地域文庫資料の活用……………木村 修二

第Ⅲ部 「地域歴史遺産」「地域歴史学」を担う人びと

第1章 「省野のアーキビスト」論と地域歴史遺産……………大岡 正美

第2章 市民とともに伝える地域の歴史文化……………松下 正和

第3章 住民と協働した自治体史の編纂……………大根 守

第4章 地域博物館の地域における活動……………大村 敬通

第5章 地域文書館論……………辻川 教

第6章 地域歴史遺産の保全活用における教員の役割……………河島 真

第7章 地域の歴史文化と大学の役割……………坂江 渉

第8章 地域歴史文化を保全継承できる人材の育成……………坂江・村井

終章 地域歴史遺産と地域連携活動……………市沢 哲

【コラム】 町町村合併と史料保全／自治体史編さんの果実とその後
／郷土史団体の現在／絵図・地図を考え／尼崎市富松のまちづくり

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報

ISSN 2185-6280

LINK

【地域・大学・文化】

November
2013

特集Ⅰ

地域の歴史性・重層性と 市民主体のまちづくり

新たな共同性を求めて
坂江渉・板垣貴志 特集にあたって
遠州尋美 「もやい直し」と「あるもの探し」
大岡正美 「大字誌」の限界と地域史編纂

Reports from the Field

福部伸雄
阪神・淡路大震災時の道路における史
資料救出活動
堀石松隆
地域の歴史文化遺産を継承するために
——香典「ふるさとガイド」の取り組み——

LINKを読む

大平剛
地域資料としての「被災資料」そ
して学校資料
出田毅
地域の災害を記録すること、伝え
ること、認識すること——アセス
ト問題との関わりから考える——

活動報告

坂江渉 人文学研究科地域連携センターを
中心とした特別研究プロジェクト「香典入志
神戸市文書館企画展「開戦下に見えた阪神
大震災」／第1回「郷土史の継承を担うた
めに」／第2回「人文学研究科古文書室編
纂資料の紹介」／「板垣貴志 収蔵文書一
覧（2012-13年度版）」

目次

前田結城 姫路藩における版籍奉還への政治過程
井上 舞 『播磨国風土記新考』の著述とその助力者について
前田結城 黒田家文書「慶応元乙丑年
日記」(上)

特集Ⅱ

工藤敬一氏インタビュー 歴史学は地域とどう向き合うか

vol. 5

平成25年(2013)5月5日発行

住吉歴史資料館

第6号

住吉歴史資料館だより



祝津山海神宮(住吉の人じんさんぐうじんさん)
江戸時代、神戸も海神宮の神宮にまつられていました。神戸の中心の住吉地区、豊後宮の
住吉の神宮の神宮にまつられていました。住吉の神宮の神宮にまつられていました。住吉の神宮の神宮にまつられていました。
住吉の神宮の神宮にまつられていました。住吉の神宮の神宮にまつられていました。住吉の神宮の神宮にまつられていました。

資料館だより
第6号目次

ごあいさつ
一般財団法人住吉歴史資料館
住吉歴史資料館
中島賢一……………1ページ

住吉歴史資料館
平成24年の成果と
平成25年に向けて
住吉歴史資料館専任職員
住吉歴史資料館専任職員……………2-3ページ

江戸時代末期のだんじり屋
住吉歴史資料館専任職員
内田雅夫……………3-6ページ

住吉各学校合同お茶会と
阪神淡路大震災
住吉歴史資料館専任職員
前田結城……………7ページ

住吉村誌を読む
江戸時代における住吉川の大
洪水
神戸大学地域連携センター研究科
住吉歴史資料館専任職員
木村修二……………11ページ

住吉歴史資料館
専任職員
中島賢一
住吉歴史資料館
専任職員
中島賢一

再発見! 史原住吉、雪も来るへ
住吉歴史資料館

平成25年(2013)11月15日発行

第7号

住吉歴史資料館だより



住吉のまちかど

住吉の空区と山田区の境にある庚申塚(こうしんづか)です。住吉の古い家である横田五兵衛家が自家の家園を埋め先祖を敬う奉徳塚(こうしんづか)として建設したとか、いや、わかしからの古墳だとか言われています。北側を通る東西の道はとも古い道らしく、わかしより白い石で舗装されていたという話があります。西園街道よりも古いと言う人もいます。昭和35年迄のたんじり塚では、5月12日の宵宮に宮入りするために御旗所に下るとき、空区のだんじりが、山田のだんじりをこえて来て一帯にお祭の浜になりました。集合時刻は午後1時30分ごろでした。おおきな空区のだんじりが庚申塚の北の道(右側の道)を善善堂南館のほうから順にひかれて上って行きます。山田のだんじりは有馬道の阪急越切の下、この付近でそれを待ちました。ちょうど、この塚のところで出会うのです。

資料館だより

第7号目次

- 住吉のまちかど……1ページ
空区庚申塚(こうしんづか)
- 尚尚会100回を祝う
尚尚会会長 藤原孝典
住吉歴史資料館館長 高橋賢一……2ページ
- 湯が森小学校
竹本夏梨さん、おめでとう
前吉野史学館理事兼委員長 藤原孝典
前吉野史学館理事兼委員長 藤原孝典……3ページ
- 空区のだんじり
前吉野史学館理事兼委員長 藤原孝典
内田賢夫……4ページ
- 住吉の有馬道について
前吉野史学館理事兼委員長 藤原孝典
廣田敏二……7ページ
- 住吉村誌を読む
住吉村の聖地赤塚山
神戸大学地域連携センター 藤原孝典
住吉歴史資料館館長 高橋賢一
木村修二……9～11ページ

平成25年度連続講座

丹波の歴史文化を探る —古文書との出会い—

丹波市と神戸大学人文科学研究科は、平成19年度から地域連携協定を結び、地域に残る古文書を中心とした歴史資料の調査・研究を行っています。昨年に引き続き今年度も、これまでの調査成果を基に神戸大学地域連携センターの研究員らによる丹波市の歴史文化を探る講座を開催します。内容はそれぞれの回で完結しますが、連続してお聞きいただくとさらに理解が深まります。また、講座の終了後、お手持ちの古文書などで「保管に困っている」「町おこしに利用できないか?」「読み方がわからない」といった質問にお答えする古文書相談を開催します。事前申し込みは不要です。ぜひご参加ください。

- 7/28 (日) 地域歴史遺産の活用事例発表会
柏原住民センター 13:30～17:00
- 9/28 (土) 前田結城 明治・大正期における村社会と自然
春日住民センター 13:30～15:00
- 10/19 (土) 村井良介 戦国時代の見方/芦田岩男 丹波の戦国時代
山南住民センター 13:30～15:00
- 11/30 (土) 木村修二 丹波の古文書から見た江戸時代
青垣住民センター 13:30～15:00
- 12/14 (土) 井上 舞 内尾神社の歴史と信仰—寺社縁起から見る丹波—
氷上住民センター 13:30～15:00
- 平成26年1/18 (土) 加藤明恵 柏原藩政日記を読む
ライフアピいちじま 13:30～15:00

お問合せ先

丹波市教育委員会文化財課 (TEL 0795-70-0819)

明石藩の世界I

企画展 館収蔵品展

2013年9月21日(土)～10月20日(日)
月曜日休館 (9/23日(月)・10/14日(月)は開館)
9:30～18:30 (入館は18:00まで)
会場 明石市立文化博物館1階特別展示室

観覧料 大人200円/大高生150円/中学生以下無料
※60歳以上の高齢者(特別割引)高生(特別割引)は100円(中学生以下無料)です。
※観覧料は、明石市立文化博物館、神戸大学人文科学研究科地域連携センター
主 幹 1 所長室、若原教育委員会、明石市教育委員会、公益財団法人明石市立文化協会、
一般財団法人明石市立文化協会、神戸新聞社、NHK神戸放送局、テレビ朝日、サンテレビジョン、
アパチア、明石ケーブルテレビ
共 賛 日本郵船株式会社

同時開催 郷土のやきもの
9月21日(土)～9月29日(日) 企画展2階ギャラリー

明石市立文化博物館
兵庫県明石市上/大2丁目13-1 TEL 07945-5400

— 文書と絵画 —

明石藩の世界I—文書と絵画—

企画展 館収蔵品展

平成24年6月、旧明石藩主の松平家ならびに旧明石藩重臣の黒田家にゆかりをもつから、それぞれの家に伝来した貴重な資料一式を明石市にて寄贈いただきました。内容は工芸品、美術品、古文書などその数はおよそ1700点にもおよびます。同年9月には受贈を記念した展覧展を当館で開催しましたが、今年度より3回にわたり、展示各コーナーにそれぞれテーマ性をを持たせ、より内容を深めることを目的とした企画展「明石藩の世界」を開催いたします。

第1回目の本年度は「文書と絵画」を総合テーマとして、「明石藩主黒田家の由緒」「武家文書としての黒田家文書」「藩主松平齊宣と黒田長棟」「幕末の明石藩」「藩主松平家の年譜」「黒田家所蔵の絵画」を各コーナーのテーマとした展示をおこないます。

大車懸旗(黒田家文書)
黒田家所蔵書 蘭館絵巻(黒田家文書)
黒田(黒田家文書)
松平家所蔵文書(黒田家文書)
黒田家所蔵文書(黒田家文書)
黒田家所蔵文書(黒田家文書)

同時開催 郷土のやきもの
兵庫県には約100箇所あるやきもの窯が、江戸時代にはそれぞれ独特の製品を作り出していました。郡内を資料から明石藩、隣の備前といった地産のやきものを含め、郡内の窯で焼かれた製品が数多く残っています。今、新しくした武家御用が用いていたやきものとして、日本郵船 旧明石藩の窯の資料から、個人コレクションとして、郷土の産品の作品を展示し、市産の歴史を語り、人々に愛でてきたやきもの魅力を紹介いたします。また、郡内で現在活躍している職人の作品も併せて展示いたします。

【開催イベント】おもしろ体験が盛りだくさん
講演会 9月29日(日) 14:00～15:30
1「これまでなかった明石藩の歴史」 講師 木村修二(神戸大学人文科学研究科地域連携センター) 2「高橋賢一の経歴について(国)」 講師 藤本智子(神戸大学人文科学研究科)
定 員 10名(申込順) 9月21日(土) 10:00より電話受付
切紙ワークショップ「家紋のデザインを楽しもう!」 10月12日(土) 14:00～1(1時間程度)
家紋のデザインでオリジナルグッズを作ります。
定 員 10名(申込順) 9月21日(土) 10:00より電話受付
料 謝 100円(中学生以下は50円) 講師 藤本智子(神戸大学)

明石市立文化博物館
〒673-0001 明石市上/大2丁目13-1 TEL 07945-5400
http://www.akashi-museum.com

平成 25 年度

神戸大学大学院保健学研究科地域連携センター活動報告

【概要】

平成 25 年 2 月までに、地域連携センター運営委員会が計 5 回（年間 6 回予定）開催され、センターの運営方針について協議されてきた。平成 25 年度に実施したプログラムは、①ハイリスク児を持つ親への育児支援事業、②就学前の発達障害児とその家族に対する支援事業、③重度な障害を持つ子どもたちへの医療的ケア支援事業、④国際的視点から見た地域連携事業、⑤高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援事業、⑥就学後・思春期における発達障害のある児童・青年への支援、⑦父親の育児支援のための教育プログラム開発実践、⑧医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業、⑨高次機能障害の方への活動、⑩ Assistive technology を用いた在宅高齢者の支援の 10 事業である。

本年は、2008 年に須磨区と保健学研究科は連携協定を結んで以来 5 年が経過したことを受け、須磨区とより発展的な関係を継続させるべく、意見交換会を実施した。また、昨年度に続き農学研究科、人文学研究科地域連携センターと協働で、篠山市のフィールドステーションを有効活用し、子育て世代と高齢者が共に安心して暮らせるコミュニティーづくりの提案を行ってきた。今後は、須磨区、篠山市を中心に子ども、壮年期、高齢者の幅広い世代の健康問題を検討することにより、持続可能な社会づくりを推進して行く予定である。

【活動内容】

A) ハイリスク児を持つ親への育児支援事業（神戸市社会福祉協会との連携）

極低出生体重児（出生体重 1,500g 未満の赤ちゃん）とその家族を対象とした教室“YOYO クラブ”は、平成 25 年度に創立 19 年を迎えた。全国に先駆けた神戸市での事業として、すっかりと定着してきている。今年は、「娘が高校に入学して手を離れたので」と OB ママがボランティアに参加された。ご本人の経験からのアドバイスはとても好評であった。平成 25 年度も、通常クラス（計 30 回）に加え、夏祭り（8 月）、遠足（10 月：2 回）、クリスマス会（12 月：2 回）を実施した。親子教室は、神戸市総合児童センターにて毎週火曜日に開催しており、修正 3 カ月～2 歳 6 カ月までの 4 つのクラスを運営している。教室には、今年も神戸大学大学院保健学研究科、甲南女子大学・神戸親和女子大学臨床心理学科の大学院生がボランティアスタッフとして参加しており、貴重な研究フィールドともなっている。



B) 重度な障害を持つ子どもたちへの医療的ケア支援事業

神戸市教育委員会と協力して、肢体不自由養護学校において教職員が経管栄養などの医療的ケアに安全に参加できるシステムづくりを行っている。平成 24 年度からは、介護福祉士法の改正に伴って、一定の研修を積めば、教職員も法的に医療的ケアに携わることが認められるようになった。平成 25 年度には、教職員を対象とした 5 回の研修会に協力するとともに、神戸市看護大学とも協力して、肢体不自由児たちが在籍する 3 校へ計 7 回にわたり巡回指導を実施した（医

療的ケア研修チームによる研修日時)。また、校外行事の安全性を高めるために、修学旅行、キャンプへの小児科医師付き添いを兵庫県立こども病院、にこにこハウス療育センターと協力して実施している。

学校名	日時	テーマ	派遣専門職
友生支援学校①	11月5日	経管栄養・吸引等（手技・姿勢等）	医師、看護師、理学療法士
友生支援学校②	2月6日	経管栄養・吸引等（手技・姿勢等）	医師、看護師、理学療法士
垂水養護学校①	6月24日	児童生徒のケアにおける留意点	医師、看護師
垂水養護学校②	11月12日	体調管理について	医師、看護師、理学療法士
垂水養護学校③	2月4日	個々のケアにおける問題点	医師、看護師、理学療法士
青陽須磨支援学校①	9月26日	児童生徒のケアにおける留意点（手技・姿勢）	医師、看護師、理学療法士
青陽須磨支援学校②	2月5日	個々のケアにおける問題点	医師、看護師、理学療法士

C) 国際的視点から見た地域連携事業

インドネシアのガジャマダ大学の教員2名及び大学院生1名を3か月間受け入れ、神戸市で私達が行っている‘発達障害のある子どもへの支援活動’や‘ハイリスク児を持つ親への育児支援活動’に関して実地体験研修を行ってきた。神戸市での経験をもとに、2007年度からはインドネシア、ジャワ島中部地震の被災地バンツール地区において、ガジャマダ大学と共同で‘子どもの家’で運営している。本事業は、兵庫県海外研究者派遣事業からの援助などを利用したもので、保健学研究科で行っている世界力展開事業とも密接にリンクしている。私たちが、神戸市で行っているコミュニティを中心とした支援事業は、地域における子育て支援システムがまだ十分でない開発途上国にも容易に応用でき、高い評価を得ている。



D) 就学前の発達障害児とその家族に対する支援事業就学後発達支援教室

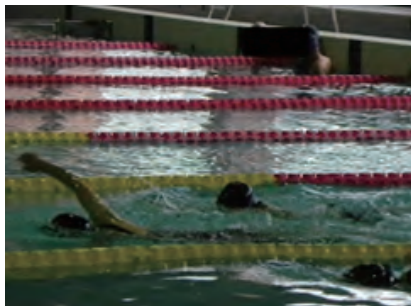
“灘ぽっとらっく”、“すまいるぽっとらっく”は、いずれも就学前の“発達が気になる子ども”とその家族のための教室である。この二つの教室では、保護者が発達障害について学ぶ講習会プログラムと学生や保育士、保健師、地域のボランティアの託児による子どもプログラムを実施している。“灘ぽっとらっく”は、神戸大学子育て支援施設“あーち”において、“すまいるぽっとらっく”は青陽須磨特別支援



学校において実施されており、各々が、神戸市東部、西部の子どもたちを中心に受け入れている。平成25年度には、計21回（現在19回を実施、3月にさらに2回を予定）の教室（1回は合同教室）を実施した。TEACCHに基盤を置いた個別支援教室“ほっと”も週1回、神戸市総合児童センターにおいて行っており、年間で12人の子どもたちを指導してきた。（20回が1クール）

E) 高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援事業

本事業では、在宅認知症高齢者と家族を対象に「その人らしさと尊厳ある社会」に焦点をあて、市民および医療福祉専門職者の協働による生きがい支援活動に力を注いでいる。本年度は、現在の介護保険サービスにはない、人としてその



人らしく生きるための高次の欲求（自己実現・所属等）を充足するための生きがい支援（アクティビティケア）を学生が高齢者の自宅を訪問し実施し、ライフコースアプローチをもとに、その人らしさに沿ったアクティビティケアを（例：卓球、水泳、生け花、洋裁、オリジナルカレンダー作成）展開した。



F) 就学後・思春期における発達障害のある児童・青年への支援

就学後の発達障害のある子どもとその家族を対象に、“就学後の集い”、“あじさいキャンプ”を実施した。さらに、厚生労働省開発支援事業の一環として、高校生年代の“発達上の問題を抱える青少年”を対象とした“相談事業あっとランド”と“居場所事業 Be ユース”を行ってきた。本事業は、神戸市との3年間にわたる連携モデル事業である。“相談事業”では、毎週3回、臨床心理士が高校生年齢の青少年とその家族を対象にカウンセリングを実施し、“居場所事業”では、毎週2回、作業療法士と共に日常動作の訓練を行ってきた。孤立していた青少年が次第にグループを作り、共同で夏フェスタを実施するまで成長した。平成26年度以降は、正式に神戸市の事業として予算化される予定である。

Beユース
夏フェスタのお知らせ

Beユース参加のみんなが作ったものを展示・販売します。Beユースのみんなががんばった成果をぜひ見に来てください！もちろん、「Beユースって何？どんなことしてるの？」って気になる方の参加も歓迎！Beユースをちょっとのぞき見できるかも！？
家族みんなで遊びに来てね！！

※Beユースの目的・お店で購入する報酬を通して、お客さんとの会話をやり取り、お金の計算や流れを学んでもらいます。お店での作業に時間がかかることをご了承ください。

日にち：平成25年8月10日（土）
時間：13:30～ Beユースメンバー、卒業生で夏フェスタを
14:15～15:15 保護者の方
場所：神戸市こころの健康センター会館
（みんなもの館・2F Beユースの場所です）
・カラージュ・うちわ・ワイヤーアート・ジュース
・おかし・アクリルたわし・パーラーピース・雑巾等

Beユース夏フェスタに
保護者（参加・不参加）卒業生（参加・不参加）本人（参加・不参加）
参加者名 連絡先

G) 父親の育児支援のための教育プログラム開発実践 —北須磨団地自治会との連携事業—

神戸市須磨区の北須磨団地さんと連携して、地域に住まわれているお父さんを主体にした“お父さんに役立つ育児セミナー”を計画した。セミナーは、育児の知識と技術を楽しく学んでいただける構成で、「子どもの食事の献立を考え調理を行い、一緒に食べる」「子どもとのかかわり方」「生活習慣に伴った世話」「病気やケガのときの世話」「親子遠足」などの内容で、座学と演習形式で行った。1回のセミナーには2人～15人程度の参加があった。

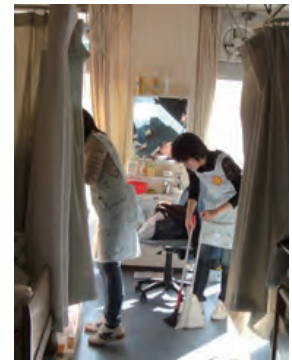


H) 医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業

地域交流事業の後方支援、ボランティア活動、ケアスタッフの実践力

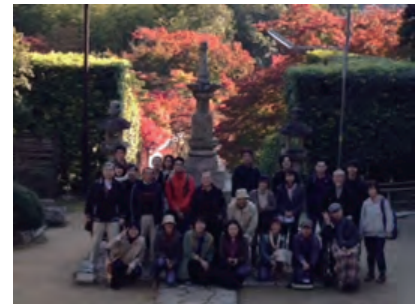


向上の支援（学習会）を柱とし、事業を展開した。今年度は、福祉施設への学生ボランティアの派遣事業、福祉施設スタッフの支援として学習会の開催などの事業を行った。



I) 高次機能障害の方への活動

高次機能障害は、知的な検査を行うと正常範囲で、そつない対応なのに行動が伴わない、昨日できたことが今日できないと言ったように「見えない障害」と言われている。当然ながら、その症状は周囲に分かりにくいだけでなく、当事者本人も障害であることに気づいていないことが多い。本活動は『障害に気づき、認めて、意識化する、改善する、そして伝える』を、仲間とともに、愉快地、認知リハビリテーションを行うことを目的に、2013年より開始した。開始初年度である本年度は院生ボランティアの計2-3名で、週1回のペースで勉強会、レクリエーション、旅行を行った。



J) Assistive technology を用いた在宅高齢者の支援

高齢者において認知症状が進むと家電製品の使用や公共交通機関などの利用が難しくなる。そのことは本人の自信が喪失するだけでなく、家電製品の使用を何度も聞くことにより同居者や周囲の人に負担感を与えてしまう。一方で、家電製品は多機能になるあまり、操作が煩雑であることも事実である。我々は、地域在住高齢者の家電製品の利用頻度や困難感を調査し、困難感解消のために Assistive technology を用いることによって在宅で少しでも長く生活できるように支援をしている。



【保健学研究科地域連携センターが主催・後援したセミナーと活動】

- 平成 25 年 8 月 4 日：発達障害のある子ども 就学後の集い 神戸市須磨区 神戸市立青陽須磨支援学校（須磨区自立支援協議会との共催）
- 平成 25 年 9 月 1 日：篠山市 5 歳児発達相談事業セミナー 篠山市（篠山市と共催）
- 平成 25 年 8 月 1 日：あじさいキャンプ（日帰り）（神戸市立自然の家、神戸市、兵庫教育大学、関西国際大学との連携事業）
- 平成 25 年 9 月 16 日：情報福祉機器展（兵庫県聴覚障害ネットワークを後援 ブース展示）
- 平成 25 年 9 月 23 日：第 33 回おいでやすカーニバル（神戸聖隷福祉事業団、神戸聖生園、友生園、愛生園 主催 保健学研究科地域連携センター 協催）
- 平成 25 年 10 月 5～6 日：あじさいキャンプ（1泊2日）神戸市立自然の家 神戸市・兵庫教育大学・関西国際大学との連携事業
- 平成 26 年 1 月 25 日：篠山市神戸大学地域連携フォーラム 丹波広域農業研修センター
- 平成 26 年 1 月 30 日：神戸大学地域連携活動報告会（神戸大学全体）神戸大学瀧川記念学術交流会館
- 平成 26 年 2 月 1 日：保健学研究科地域連携報告会 兵庫県民会館
- 平成 25 年 2 月 16 日：東北から神戸へ 要援護者への支援セミナー ラッセホール（神戸大学都市安全研究センターとの共催）

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

2013 年活動報告書

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

農学研究科地域連携センターは、住民・行政・NPO 等と農学研究科の各研究講座を繋ぎ、その活動をサポートする中間支援の役割を果たすとともに、センター独自のプロジェクトを実施することを目指している。2013 年度は、以下の 3 つの事業を推進した。

I 地域共同研究

1. 連携センター共同研究

地域のニーズや農学部シーズに基づき共同での調査研究を推進している。地域自治体や住民団体、NPO、協同組合等と協働で実施し、地域発展に寄与する調査・研究をおこなっている。

2. 地域共同研究公開サポート事業

この事業は、地域の課題解決・価値創造などを地域と共にすすめる地域共同研究の周辺サポートや、地域連携研究等の収集整理と情報公開（学内、地域、国際）の促進を目的としている。具体的には、取り組みの一般公開や地域との情報共有、セミナー開催、PR などをおこなう。

(地域共同研究公開サポート事業)

- 1) 学内栽培果実を用いたスイーツの開発
- 2) 失われつつある遺伝資源を利用する事で保全する：
よみがえる梨遺伝資源 'イワテヤマナシ'
- 3) 農業用水の維持管理と資源活用のためのアートプロジェクト～淡山疏水と東播用水未来遺産運動において～



(地域共同研究)

- 1) 地域コミュニティと連携した「創造農村ラボラトリー」の創出¹
- 2) 鳥獣害を軽減し地域に活力をうみだす獣害対策に関する研究²



¹ H25 年度「域学連携」実践拠点形成モデル実証事業

² H25 年度 兵庫県地域再生応援事業

II 地域交流活動

1. 地域連携研究会（A-Launch）の開催

これまでに、セミナー形式で開催してきた「地域連携研究会」を、昼休みの時間をつかった地域連携トークイベント（A-Launch）として開催した。より、気軽に、幅広く、地域での実践活動や農学の先端研究・理論に触れる場となることを目指している。

日時	テーマ	講師	所属
第5回 5/9	失われつつある遺伝資源を利用する事で保全する：よみがえる梨遺伝資源‘イワテヤマナシ’	片山寛則	植物遺伝資源開発学（食資源教育研究センター・資源開発部門・植物資源開発分野）
第6回 7/23	大学の地域連携の到達点と展望	内平隆之	兵庫県立大学環境人間学部 エコ・ヒューマン地域連携（EHC）センター
第7回 10/24	佐渡でふれあういのちのつながり～人とトキが暮らす島を孫の世代へ～	星信彦	資源生命科学専攻・応用動物学・分子形態学
第8回 2/12	サクラソウ咲く景色をふたたび～守るために、知ること・伝えていくことの大切さ～	吉田康子	植物遺伝資源開発学（食資源教育研究センター・資源開発部門・植物資源開発分野）

2. 学生たちによる小さな直売所「ささやま^や家」の開催

篠山で活動する学生団体が農家らと生産した農作物の販売所として、直売所を設けた。価格の決定や販売活動を通して、生産から販売までの過程を経験する機会となったほか、販売収益は、交通費などの学生活動団体の活動資金とした。



3. 学生地域活動サポート事業

学生地域活動サポート事業は、活動の一般公開や、地域との情報共有、セミナー開催、PRなどを支援、農学部・農学研究科学生の地域の課題解決・価値創造につながる協働活動のサポート地域連携研究等の収集整理と情報公開（学内、地域、国際）の促進を目的としている。H25年度のサポート承認団体は4団体（ささやまファン倶楽部・ユース六篠・はたもり・にしき恋）で所属人数58名である。今年度は、学生団体を取りまとめる組織として「篠山学生活動団体連絡協議会」（篠連）を立ち上げ、情報共有や、ささやま家の開催を支援した。

4. 福住地区まちづくり計画への参画

篠山市福住地区では、これまでに様々な地域づくりの取組みが行われてきた。このたび、伝統的建造物群保存地区への指定を受けたこともあり、地区全体で「2030年の福住」を見据えた地域づくりを進めるべく、兵庫県ふるさと自立計画推進事業に参加した。策定にあたって、神戸大学大学院農学研究科中塚雅也准教授と神戸大学の学生7名がワーキンググループ（WG）に参画し、「多様な参加者」と「動画を用いた情報共有」をキーワードに活動した。



5. 農村地域学習ネットワーク（Rural Learning Network）の構築

Rural Learning Network とは、1) 地域の問題や取組実態の理解、2) 先進的・革新的な取組や技術の共有、3) セクターと地域を越えたネットワークづくり、4) 現場発の政策、事業、研究の形成、の場となることを目指すもので、昨年度から取り組んでいる。NPO、行政、民間、大学等の有識者からなる編集委員（ステアリンググループ）のもと、運営事務局が実務的な企画運営を担う。



日時	テーマ	講師	所属
第8回 3/9	農業多様性：環境創造型農業を地域でひろげるには？	西村いつき	兵庫県農政環境部 環境創造型農業専門員
第9回 6/23	女性が輝く地域づくり：むらで仕事をつくり楽しむコツを考える	上垣美由紀	養父市女性農業者グループ「七つぶの種」
第10回 7/16	地域の種をつくる：在来種を探し・守り・活かすには？	伊藤一幸・中塚華奈	神戸大学・NPO 法人食と農の研究所
第11回 11/13	"最先端"をめざす若者たち：なぜ田舎で動き出すのか	井口元・藤本傑士・湯山加奈子	みんなの家／大路未来会議／株式会社ご近所
第12回 H26 2/1	獣害対策を地域資源に変えるコミュニティづくりとは？	鈴木克哉・布施未恵子	兵庫県森林動物研究センター／神戸大学

6. 食農コープ教育プログラム支援事業

7. 農村ボランティアバンク KOBE（ノラバ）の運営支援

現在、392名の人材がノラバに登録されており、農家ニーズとシーズのマッチングをおこなっている。今年度は35件のマッチングがあった。

Ⅲ 相談情報発信

1. 相談業務の概要

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答える地域連携センターには、本年度は連携センターと篠山フィールドステーションで合わせて、80件（2013年12月末集計分）の相談が寄せられている。

1-1. 農学研究科地域連携センターの相談対応

2013年度は40件の相談が寄せられている。これらの相談のうち、28件は学生の相談でインターンシップやボランティアに関するものなどであった。相談件数は、昨年度よりも増加傾向で、インターンシップ担当のスタッフの配置や、学生スタッフの増加にともない、対応可能時間が増えていることが関係していると考えられる。これまでは、研究員が地域活動に関する相談対応をおこなってきたが、地域活動の経験が豊富な学生らによる相談対応が増加しており、地域連携センターは、農学部内外の学生らの地域活動に関する情報共有や相談の拠点となっている。

2013年度運営体制

■センター長

高田 理（食料環境経済学コース教授）

■運営委員

庄司浩一（生産環境工学コース准教授）、中塚雅也（食料環境経済学コース准教授）：副センター長、原山洋（応用動物学コース准教授）、石井弘明（応用植物学コース准教授）、藍原祥子（応用生命科学コース教授）、杵本敏男（環境生物学コース教授）：副センター長

■マネージャー

中塚雅也

■地域連携コーディネーター

溝口尚子

■地域連携研究員

鈴木曜、布施未恵子 / 篠山 FS 駐在、野口陽平 / 篠山 FS 駐在

■アドバイザー

加古敏之（食料経済学分野名誉教授）、伊藤一幸（熱帯有用植物学分野教授）、
内平隆之（兵庫県立大学環境人間学部講師）

■学生補助員

岡田文子（M1）、中塚万智（B4）、（～12月）谷津弘美（M1）、橋田薫（B3）、菅原将太（B3）

神戸大学篠山フィールドステーション 2013 年活動報告書

神戸大学篠山フィールドステーションは、神戸大学と篠山市とが連携して地域の新しい価値を創造し、問題解決をすすめるための研究教育活動拠点である。学生や研究者が篠山市で活動するための情報収集・研究交流の場、地域と大学のネットワーク再生の場となることを目指している。2013 年度は、以下の 3 つの事業を推進した。



I 地域共同研究

地域共同研究の実施を通じて、地域課題の解決に資する研究を行うことを目指した。今後期待される成果として、新たな地域ブランド農作物の開発、獣害対策、森林管理などの里山整備方法の開発、地域づくり等の人材養成への貢献などが挙げられる。本年度は 3 つの共同研究を実施し、現場とともに社会実験を進め、他地域への普及可能な地域課題の解決に資する実践的な知の創造を目指した。

H25 年度 地域共同研究

(農学部)

- 1) 鳥獣害を軽減し地域に活力をうみだす獣害対策に関する研究
- 2) 大学連携による 6 次産業化と学びの実践研究
- 3) 里山林を健康に持続させる管理手法の実践的研究
- 4) 宿場町福住地区における在来種クララの生存
- 5) 新しい特産品づくりに関する研究—”香りヤマナシ” 栽培の可能性—



(保健学科)

- 1) 就学前発達障害児等早期支援システム構築

(文学部、人文学研究科)

- 1) 篠山市日置地区で発見された古文書の資料整理



II 地域交流活動

篠山市全体を生きた現場として教育・研究を行う大学の研究者および学生に、フィールドや連携先の紹介、活動スペースの提供をおこなう。また、篠山市にいる人材の登録をすすめ、大学と連携した地域密着型の人材ネットワークを構築する。これらを通じて、開かれた活動拠点として、地元の人々と学生、研究者との交流の場となることを目指している。



1. 食農コープ教育プログラムの実施支援

- 1) 「実践農学入門」（今田地区）、「実践農学」（畑地区・矢代集落等）の実施
- 2) 篠山市役所へのインターンシップの支援

2. 地域人材育成の支援

- 1) 丹波の森若者塾事業の支援
- 2) ボランティアについて学ぶ／篠山鳳鳴高校，農業を通しての地域・大学・高校の交流／篠山東雲高校
- 3) 文学部古文書合宿 in 篠山の実施補助
- 4) 各種委員会参加（篠山市創造都市ネットワーク推進委員会／ふるさと自立計画推進事業モデルアドバイザー／篠山市森づくり構想等策定委員会／篠山市まちづくり審議会／篠山東雲高校評議委員／篠山環境みらい会議アドバイザー／篠山市地域新エネルギービジョン策定委員会／実施事業における経済波及効果の助言／等）
- 5) 講演講師派遣（篠山市里山スクール／篠山市高齢者大学／地域資料整理サポーター）
- 6) 学生ボランティア団体の活動支援

ささやまファン倶楽部…篠山市真南条上宮農組合で里山整備活動を中心に定期的に地域活動をおこなっている。ユース六篠…篠山市福住地区で農作業補助や祭りの企画運営に関わっている。はたもり…篠山市畑地区ではた祭りを盛り上げるイベントを企画運営したり，畑小学校の閉校記念式典にて活動紹介をするなど，多様な地域づくり活動をおこなっている。にしき恋…篠山市西紀南地区にて，農業ボランティア，にし恋ファームの管理，里山整備計画の立案と実行，地域活動への参加などを通して積極的に地域と交流している。

3. セミナーの実施支援

- 1) Rural Learning Network の開催支援
- 2) 丹波地域大学連携フォーラム「地域とかかわり続ける～こんなんやったら続けられるで～」の開催支援

4. 神戸大学留学生の篠山訪問支援

神戸大学留学生センターが主催する「日本文化体験旅行」が3回実施され、丹波立杭焼き体験、篠山市内観光、季節に応じたツアーの実施を支援した。季節に応じたツアーでは、6月に茶畑と茶工場（熊野園）を見学し、11月は酒造（櫻酒造）見学をおこなった。



5. 新たな加工品の開発

食資源教育研究センターで栽培するヤマナシ品種のなかで、加工品として使用される予定のない果樹を使って、新たなスイーツを開発する取り組みを、篠山市内のレストラン（ささらい）の協力のもとでおこなった。また、Mサイズ以下または皸入りの黒大豆を使った加工品として、黒大豆納豆を若竹納豆の協力のもとでおこなった。

6. 宿泊型学習拠点の整備支援

篠山市で活動する学生らの宿泊可能な拠点整備を、総務省「域学連携」実践拠点形成モデル実証事業の支援を受けておこなった。空き屋の改修にはのべ30名を超える学生や教員が参加し、地元の大工や左官職人、瓦職人などから、直接指導を受けた。



Ⅲ 相談情報発信

1. 相談業務の概要

地域と神戸大学を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答える篠山フィールドステーションでは、40件（2013年12月末集計分）の相談が寄せられている。

2. 情報発信

情報を公開し、農村地域に広く成果還元をおこなった。

- 1) 年次報告書の発行
- 2) HP, twitter, Facebook を使った情報発信
- 3) 広報活動

篠山市のインターネットTV「まるいのTV」に出演し、篠山フィールドステーションの活動紹介などをおこなった。

2013年度運営体制

- センター長 : 高田理（食料生産管理学講座 教授）
- マネージャー : 中塚雅也（食料経済学講座 准教授）
- 地域連携研究員 : 布施未恵子・野口陽平・長井拓馬

第三章

学内公募事業活動報告

映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携

国際文化学研究所
准教授 板倉 史明

本事業の目的

国際文化学研究所と兵庫県唯一の映像メディア・アーカイブである神戸映画資料館（長田区）が連携し、大学-地域連携のための映像メディア・アーカイブ構築に向けた基盤の整備を行うこと。資料館は世界的に評価の高い映像メディア・アーカイブであるが、資料の多くは未整理のままである。本事業では、神戸映画資料館が所蔵する多数の映画フィルムや映画関連資料の一部を整理・活用することによって、本学における今後の映像メディアを用いた教育研究活動と地域連携の基盤を生み出すことにある。

成果報告

(1) 神戸映画史の開拓と調査

2013年6月8日(土)に神戸映画資料館において、「第1回 神戸と映画」が実施された。ここで板倉史明が「映画史研究から見えてくる神戸」と題する講演を行った。そのなかで、1931年の日本映画『一粒の麦』のフィルムの一部が発見されたことが報告され、『神戸新聞』（2013年6月17日夕刊）で板倉のコメント付きで紹介された。

また、2013年10月5日(土)には同じく神戸映画資料館において「第2回 神戸と映画」が実施され、松谷容作（神戸大学人文学研究科研究員）氏による講演「9ミリ半のフィルム—〈ホームムービーの日 in 神戸〉プレ企画」が行われた。

神戸と映画

第1回 神戸・新映画宣言
6月8日(土)



藤のしほ・山田Atsushi Wash

神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会の主催で「神戸と映画」をテーマにした定期イベントを開催。第1回目は、「神戸・新映画宣言」と題し、過去-現在-未来を標榜します。

<p>第一部 現在から過去へ</p> <p>13:30 参考上映 『観光の神戸』(1936年映/13分/16mm) 神戸市立看護学院蔵 製作:神戸電気局、神戸観光局 撮影:作られた神戸の観光PR映画。湊川神社や神戸港、まやヶ浦、生田神社などが次々に紹介される。元町通りを行き交う当時の人々の姿や、元町留場の風景も興味深い。 その他、神戸に関する貴重なフィルムを上映予定。</p> <p>14:00 お話 『映画史研究から見えてくる神戸』 講師:板倉史明(神戸大学准教授) 国際港湾都市として多文化的な特色を有する神戸と、20世紀最大のトランスナショナルな映像メディアとしての映画は、常に機密な関係を取り結んできた。神戸は、エジソンの発明試演映画であるキネトスコープが日本で最初公開された都市であり、また新開地というかつて日本有数の興行街だったエリアが存在する都市でもあり、さらには映画産業を、淀川(長谷)を生み出した都市としても知られるが、神戸と映画の関係はそれだけにとどまるものではない。実際、これまでに「神戸新聞地誌」(のじきく文庫、1973年)や、「神戸とシネマの世紀」(神戸新聞総合出版センター、1998年)をはじめ、神戸映画史に関するいくつかの重要な先行研究が生まれているが、また花を散らすべき書籍は多いものではなからうか、今回はその出発点として、いくつかのピンクや映画作品を取り上げることによって、豊かな神戸映画史の一面面を浮かび上がらせるきっかけとしたい。</p> <p>15:00 お茶会 『神戸の映画館を語る』 場所:シネマカフェエリー(お茶とお菓子付き) 神戸字である神戸映画資料館の安井善雄館長とともに、映画館をめぐる思い出話に花を咲かせましょう。</p>	<p>第二部 現在から未来へ</p> <p>16:00 座談会 『神戸発、映画』 ゲスト:濱口竜介(映画監督)、和田淳(アニメーション作家)、田中まこ(神戸フィルムオフィス)、吉野大地(ラジオ関西「シネマキネマ」)、森本アリア(旧クックパッド編集者)</p> <p>2013年春、新しい映画活動に向けて神戸に拠点を移された期待の大型新人・濱口竜介監督。6月から神戸・大阪・京都の三都市で開催される特集上映会が準備中です。 そして、東京藝術大学大学院終了後、文化庁新進芸術家海外研修制度によるロンドン滞在を経て、故郷・神戸に戻られた和田淳さん。「アート・ラビッド」でベルリン国際映画祭特別部門「銀熊賞」受賞されるなどアニメーション作家として国際的に活躍されています。 この二人の若手作家を中心に、神戸で作品を作ることに誇りを感じています。</p> <p>参考上映 『春のしくみ』(2010/4分/和田淳) 誰でも一冊一冊はおもしろいという春のうずさうさ感、気にはなっていないけれど、どこかで思っているようにしていた春のうずさうさ感、このうずさうさ感のメカニズムの解明に果敢に挑戦する。 アナーバー映画祭 Funnies Film受賞、Anifest国際アニメーション映画祭 観賞券作品賞(5分以下の短編部門)</p> <p>(終了予定 17:30)</p>
---	--

主催:神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会
助成:はぁ〜とるるふんど
協力:神戸市広報課、神戸芸術工科大学
神戸大学大学院国際文化学研究所メディア文化研究センター

参加無料

神戸映画資料館

JR長田駅から南へ徒歩5分、アスタくにつが1番線北棟2階
TEL 078-754-8039 www.kobe-eiga.net

(2) 神戸映画資料館の資料整理と研究活用

資料館の資料を整理・目録化し、今後の研究・教育に活用した。映画作品の宣伝用スティール写真は約3000作品以上(約1万枚)を登録した。映画作品の宣伝資料(プレスシート類)も1500作品以上を登録した。さらに、戦前に撮影された9.5mmフィルムの整理と調査を実施した。1930年代の神戸や大阪で撮影されたアマチュア映画やホームムービーの調査を行い、一部をデジタル化して研究活用を行った。特に大阪のアマチュア映画作家・森紅のフィルムが発見されたことは、映画史研究においても貴重な発見である。さらに1932年の録音レコード(ホノマトン)が発見されたことも話題となった。

(3) こども向けの映画教育イベントと地域貢献

2013年11月から12月にかけて実施された「こうべ こども映画まつり」(主催:神戸映画資料館、共催:神戸市、後援:神戸市教育委員会。「KOBE デザインの日」記念イベント2013・神戸ビエンナーレ2013 連携事業)に、板倉史明が企画および講師として協力し、地域の映像教育活動に貢献した。

・2013年11月23日(祝・土)「映画館へ行こう!」に講師として協力(於:元町映画館)

・2013年12月1日(日)ワークショップ「映画のひみつ」に講師として協力(於:神戸映画資料館)

その他、以下の追加イベントも実施した。

・2014年3月30日(日)「春休み こうべ こども映画教室」に、板倉が講師として参加(於:神戸映画資料館)。

3 days こうべ こども映画まつり
映画と出会う3日間 参加無料(要申し込み)

① 映画館へ行こう! こどもたちに劇場での映画体験を!
「蜂の巣の子供たち」(1948年/86分/劇映画)
子ども映画の歴史・清水宏監督が、戦中で戦も失った子どもたちと一緒に作った傑作です。勇敢な子どもたちも優しい「母さん」でうつし出します。
定員:46人(児童学年・小・小・中・高学年)
会場:元町映画館
観覧料:100円(神戸市立元町映画館)

11/23 (土)
11:15開演(終了11:35)

② サイレント映画ってすごい!
山崎ハコさん
伝統的な活動弁士の語りも再現!
昔の映画は音がなくて「サイレント映画」と呼ばれていました。考えてもとって見返り!
山崎ハコさんの解説と演奏でお楽しみ下さい。
定員:50人(児童学年・小・小・中・高学年)
会場:神戸市立元町映画館
観覧料:神戸市立元町映画館/学費別席別

11/24 (日)
11:00開演(終了11:30)

③ 映画のひみつ
1. 映画教室
動く絵本とちがって作るの? 観と作って楽しみながら映画のひみつを学びます。
定員:小・小・中・高学年(高学年対象)

2. 映画のいろいろ
映画とひみつにまついろいろな時代のいろいろな作品があります。
古い映画の魅力を学ぶと大発見と誇りましょう。
先生:板倉史明(神戸大学准教授)

定員:40人(児童学年・小・小・中・高学年)
会場:神戸映画資料館
観覧料:100円(神戸市立元町映画館)

12/1 (日)
11:00開演(終了11:30)

※観覧料:100円(神戸市立元町映画館)
※会場:神戸市立元町映画館
※観覧料:神戸市立元町映画館/学費別席別

(4) 「神戸アーカイブプロジェクト」の運営に協力

神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会(委員長:向恵子[神戸市立地域人材支援センター事務局長])が、神戸市から「まちの再生・活性化に寄与する文化芸術創造支援」の助成を受け(2013年10月~2014年3月)、神戸市の企業や機関が所蔵している映画フィルムの調査を実施した。フィルム所蔵のアンケートの送付については、神戸商工会議所の協力を得て、加盟企業に送付することができた。板倉が実行委員会の委員としてフィルム調査に協力し、数件の企業を訪問し、フィルムの所蔵状況や今後の活用について意見交換を行った。

(5) シンポジウムの開催

2014年3月1日と2日にかけて、「大学・地域・連携シンポジウム「映像、アマチュア、アーカイブ」と題するシンポジウムを実施した(共催:新潟大学人文学部、京都大学研究資源アーカイブ、神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会)

・2014年3月1日(土)「映像が生み出すもの—アマチュアとアーカイブ」13:00~18:50(於:神戸大学瀧川記念会館大会議室)

・2014年3月2日(日)「映像というモノと、地域をアーカイブする」10:30~19:00(於:神戸映画資料館)

兵庫県多可町における地域住民との多角的な連携事業

経済学研究科
教授 藤岡 秀英

兵庫県多可町での連携事業は、これまで4年間継続しています。その主な活動舞台は、多可町八千代区中野間集落と加美区観音寺集落、そして多可町全域に広がってきました。

- (1) 2013年度は、八千代区での稲作に「亜麻の栽培」、ASABANプロジェクトへの参加協力が加わり、新しい地場産業の振興に参画しています。
- (2) 「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」は、4年前から継続している「多可町菜の花・エコプロジェクト」のなかで、春の「菜の花祭」、秋の「菜種祭」で出店、イベント企画に貢献すると共に、菜種の裏作として「そば」の栽培にも携わり、「そば打ち」「そばの販売」にも活躍しています。そして、10月に「ログハウスの完成式典」ができました。
- (3) 「植林ボランティア」では、神大生を中心に80名前後の学生を募り、多可高校の生徒、観音寺集落の皆さんと一緒に、「紅葉と桜」の菜苗木500本を植樹しました。植林ボランティアへの参加者は、120名を超えています。

1. 年間活動

- 5月6日：「亜麻の花祭」学生3名が「おでんとおにぎり」150食分を提供
- 6月9日：「亜麻の収穫」藤岡ゼミの学生が8時間かけて実施
- 6月15, 16日：亜麻の畑を水田にして、「田植実習」学生18名、一般参加6名。
- 6月から7月末：ASABAN靴下の「モニタリング調査」、神戸大学職員50名の協力。
- 8月16日：「亜麻の脱穀作業」、「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」
- 7月から9月：亜麻畑の「除草作業」（学生ボランティアの参加6名×4回実施）
- 9月28, 29日：「稲刈り」学生18名と一般参加者を合わせて24名。
- 10月7日：神戸大学生協の支援により学内のすべての食堂で「菜っちゃんそば」を販売
- 10月19日：「ログハウス完成式典」、新米の脱穀、粃摺りから「新米を食う会」
- 10月20日：新米の脱穀、粃摺り作業の完了と新米の分配。
- 10月24日：神戸大学六甲台キャンパスにて「多可町とのふれあい祭」
- 11月2日：厳夜祭にて「木の家」が「多可町産鹿肉の料理」を出店
- 11月24日：多可町加美区観音寺集落の共有林に「植林ボランティア」学生80名参加
- 11月30日：「多可町なごみの里山都」にて「亜麻仁ケーキ」販売スタート
- 12月30日：八千代区中野間で「餅つき」
- 2014年2月10日：加東市「冬のまつり」で亜麻仁ケーキ、パンの販売ボランティア

2. 多可町での連携事業の成果

(1) ASABAN プロジェクト

亜麻の栽培、収穫、脱穀の作業は、ほとんどを手作業で行うため、学生による活動は非常に大きな貢献につながっています。学生にとっては、亜麻の栽培、亜麻の種の脱穀、繊維から糸を作り出す工程を体験し、「麻織物が高価であることを身体で実感しました」。

ASABAN織物商品は、三宮東急ハンズをはじめ大型店舗でも販売を開始しています。

「亜麻の種」を使ったマドレーヌ、チーズケーキ、シフォンケーキは、10月から試作品を作成し、六甲台キャンパスでの「多可町とのふれあい祭」で販売したところ、大好評につき、11月30日から「多可町なごみの里山都」で土日祝日の販売をスタートしました。

このように「ASABANプロジェクト・亜麻の栽培を考える会」はすでに地域の新しいブランドに成長し始めています。

(2) 「多可町菜の花・エコプロジェクト」

多可町の各地区で栽培された菜の花から「菜種油」を生産、販売し、連作障害を防ぐために「そば」の栽培を始め、「木の家」はこの事業に全面的に参加しています。「木の家」は、三宮さごう「ふるさと館」で、菜種油、無農薬・有機米（コシヒカリ）、「そば」の販売促進ボランティアを定期的に行いながら、多可町では「ログハウスを完成させ」、「多可町ふるさと祭」、観音寺集落のイベントにも参加しています。

10月7日には、神戸大学生協のご支援を頂きながら、学内のすべての食堂で「菜っちゃんそば」をメニューに加えて頂き、その宣伝に「木の家」と「藤岡ゼミ」が尽力した結果、20分で完売しました。

さらに、10月24日、六甲台キャンパスで「多可町とのふれあい祭」を藤岡ゼミと「木の家」が協力して実施しました。そこでは、多可町役場、観音寺集落とASABANプロジェクト、八千代区の農家、中区の鹿肉カレーなど、多可町の特産物を生産されている人たちが20名余り参加されました。

(3) 学生にとって学びと研究の舞台

「ASABANプロジェクト」「多可町菜の花・エコプロジェクト」は、地域への貢献と同時に、参加する学生・大学院生の学習と研究の舞台となっています。

藤岡ゼミと「木の家」の総勢60名を超える学生、大学院生は、亜麻の栽培、織物工業、生産物の販売活動という、「農・工・商の連携事業」に携わること、さらに地域住民の日常生活、地域のまつりに参加することで、さまざまな学習を積み重ねています。経済社会学の研究テーマとして、大学院生は、農業の6次産業化に実際に参加しながら具体事例を研究しています。

そして、60名を超える学生、大学院生を指導し教育するのは、地域の木工職人、ログビルダーの方々をはじめ、観音寺や八千代の集落の皆さんです。指導教員、サークル顧問としての藤岡だけでは、とても不可能な大学教育と研究活動がここに実現しています。



6月9日「亜麻の収穫」



10月19日「ログハウス完成式典」

六甲山の森林保全を目指した 文理融合型地域連携プロジェクト

経済学研究科
教授 石川 雅紀

はじめに

六甲山は神戸市のシンボルともいえる存在であり、神戸市民に長く親しまれ、愛されてきている。しかし、その森林生態系が危機に瀕していることは、ほとんど知られていない。事業実施者は、矢田前神戸市長と話した機会にこの事を知り、2012年度ESD演習Ⅱのテーマとして取り上げた。2012年は神戸市の協力を得て、現地調査、文献調査を行い、問題点を整理した。この結果を踏まえ、2013年度には、ESD演習Ⅰ、Ⅱにおいて、通年のテーマとして取り上げ、最終的に六甲山の保全につながる活動を実際に行うことを目標とした。

前期のESD演習Ⅰは履修者15名（経営学部3名、発達科学部2名含む。他は経済学部）、後期のESD演習Ⅱは履修者16名（経営学部1名、発達科学部1名含む。他は経済学部）であり、内、12名は両方履修した。ESD演習の趣旨から、このテーマに取り組む初期から、実際の活動までつなぐ事を計画していたので、森林専門家、行政、森林保全活動を行っているNPOなどとの連携を計画し、地域連携事業に応募した。

目的

本事業の目的は、六甲山の森林生態系が危機に瀕しているという問題に、神戸大学学生が産官学民など関係主体と連携して、主体的に取り組み、実際の活動につなげることを目的とした。

方法

前期には、森林生態系の専門家である、農学研究科の黒田慶子教授の支援を受け、講義で森林生態系の保全について学習するとともに、神戸市建設局六甲山整備室の協力を得て、六甲山の現状の調査、六甲山の森林保全所の問題などについて学んだ。

グループワークと資料調査を繰り返し、ブレインストーミングにより、アイデア出し及び、評価、企画立案を行った段階で前期を終了した。この段階では、六甲山保全活動の構造は、自然学校、婚活イベント、木工品制作などのビジネス活動で六甲山保全のための資金を稼ぎ、自然保護を専門とする団体に寄付することで、六甲山の保全を図ろうというものであった。

夏休みに、本事業で助成された資金によって、鳥取県及び岡山県の森林保全の先進事例である西栗倉村及び智頭町を調査し、現地で、森林組合の担当者、森林保全と地域興しを目的とするNPO（西栗倉・森の学校）、木工事業者（ようび）など多様、かつ、全国的に知られている成功事例のリーダー、経営者と直接議論を行い、現地を見学した。

後期には、夏休みの調査の結果を総括し、森林保護をビジネスに直接結びつけることの困難さを理解し、方向転換を図った。原点に戻ってのグループワークを繰り返す中で、そもそも、六甲山の森林が危機に瀕していることが市民に知られていない事が問題であるとの認識にいたり、六甲山の森林が危機に瀕して居ることを啓発・広報する活動に焦点を絞った。

学生が主体である事のメリットを最大活かす意味で、最近はやり始めているソーシャルマラソンを実施し、その過程で六甲山の森林保全の問題を参加者にうたえることになった。ソーシャルマラソンとは、石川の知人である佐谷恭氏が始めたイベントで、フランスのメドックマラソンに端を発している。メドックマラソンは、世界的なイベントで、パーティーのように走

るマラソンである。参加者はその年のテーマに沿った仮装をし、通常のマラソンにおける給水ポイントに当たるところで、前菜、スープ、サラダ、主菜、ワインなどが提供されるマラソンである。

ソーシャルマラソンは、スタート地点とゴール地点が決められているだけで、その間の移動手段、コースは自由で有り、協力してくれるお店を給〇〇ポイントとして、食事や飲み物（有料）を楽しみゴール地点では、パーティーを行う。

六甲山ソーシャルマラソンは、できるだけ暖かい時期と言うことで、3/21に神戸大学発神戸大学着として、現在広報を行っているところである。

活動の実際については、ポスターに示した。

いま六甲山が危ない!!

六甲山といえば、神戸にとって特別です。その六甲山が危機に陥っていることをご存知でしょうか？
現在、伐採や自然資源の利用や管理がされておらず、危機的な状況にあります。そのことを授業で初めて知り、この現状を人々に伝えたいと思い、どうすれば認知してもらえるのか考えてきました。
夏合宿で実際のフィールドに出てから、より考えが具体的になり、さらに森林ボランティアに行って、実際に自然保全にも携わりました。そんな中でより認知してもらえるようにイベントを実施することに決めました。



六甲山の現状を知り、とても驚き、自分たちで何か解決できる方法はないか考えました。



実際に考えてみてからか、アイデアが出てきました。フィールドに出てみることにしました！



実際にフィールドに出てみると、アイデアが出てきました。自然資源の活用について考えました。



森林ボランティアに行って、自然について学びました。実際に自然保全にも携わりました。

活動1 鳥取県と岡山県西粟倉村での夏合宿

森の現状を知る目的で、鳥取県智頭町役場の方に森を案内してもらいました。森の中は荒廃していて、手入れがされていない状態でした。荒廃した森は、公益的な機能を発揮できず、大雨によって土砂災害を起こしやすくなります。

しかし現状は、間伐をはじめとする森の整備を行ったり、主伐を行っても採算がとれず、赤字になるという悪循環が起きています。



岡山県西粟倉村は「百年の森構想」を掲げ、村全体で森を守ろうとしています。未来への想いを共有する森づくりを行う現地の方々のお話を聞いたり、森の学校で間伐材を使った家具やひき製品などを見学しました。

活動2 森林ボランティアと木こりろうそく作り

森の現状を知った私たちは、森の整備などを行っている森林ボランティアに参加することに決めました。まずは神戸市役所へ連絡を取り、六甲山の再度公園を中心に活動してられるボランティア団体の活動に参加できるよう交渉しました。一人あたり木を5本ほど切り、森の間伐を行いました。木を切ることで余分な木陰を減らし、地表近くに生息する植物もしっかり日光が当たるように伐採を行います。こうすることで、生物の多様性を守ることができることを学びました。



この活動はこれからも参加していく予定で、次は2/16(日)に再度、ボランティアに参加し、木の伐採や整備に携わる予定です。そして、間伐材を使って3月に使うイベントのための木こりろうそく作りも行いました。

活動3 シャルソン×木こりろうそくイベント 3月21日(金) 六甲山シャルソン 決定

多くの人に六甲山の危機や豊かな環境を守らなければならないことを知ってもらうために、「シャルソン(ソーシャルマラソン)×木こりろうそく」のイベントを立案進行中です。「パーティーするようにマラソンしよう」を合い言葉に走ることを通じてまちを再発見し、人と人がつながるランニングイベントです。新しい観光の形でもあり、主催者と参加者とまちが繋がることができます。六甲山の危機を知ってもらいミニパンフレットを配布したり、スタンブラリーなどを行おうと考えています。当日の夕方からは経済学部にてバーベキューを実施し、みんなで六甲山の驚きや感動を共有したいと思います。その時に、もりの学校で作った木こりろうそくをもします。木こりろうそくを使うことで、電気を使わずエコを実践でき、自然の炎でリラックス効果を得ることもできます。



ご指導下さった、石川教授、小島さん、農学研究科森林資源学研究室の黒田慶子教授、石井弘明准教授、本当にありがとうございました。

ESD ボランティア育成プログラム拡張支援事業

人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
ボランティア社会・学習支援部門 教授 松岡 広路

転換期・発展期に入った「ぼらぼん」

ぼらぼん事業の枠組みは大きく変わろうとしている。社会人メンバーの増加、他のプロジェクトとの連動、他組織との新たな連携などが生まれ、いよいよ発展期に入ってきた。これまでは、二つのプロジェクト「ワークキャンプ事業」と「ボランティアツアー事業」とを実施することで、地域の活動力とユース（大学生・高校生）の学びの場を豊かにしていこうとしてきたが、今後は、多様な活動が派生的に展開されると共に、より多様な組織・団体との連携のなかで事業の枠組み・仕組みそのものを変えていくことになる。

「人づくり」——スタッフとしての自己形成 in 邑久光明園

国立ハンセン病療養所：邑久光明園（岡山県瀬戸内市）でのワークキャンプは、今年度で八年目となる。ESD（持続可能な開発のための教育）事業を学生がみずから企画運営するだけではなく、他団体が実施している他地域の多様なワークキャンプ事業との出会いを演出するプラット



フォームの創成をめざし、学生たちがスタッフとしての自己形成を遂げられるようなプログラムも組み込んだ。6月の邑久光明園でのスタッフ合宿（2泊3日）や8月のリフレクションセミナー（一日プログラム）において、ワークキャンプリーダーの育成と共に、プラットフォームという多様な人間が集う場でのファシリテーターの育成を図った。さらに、活動の中で学ぶスタイルを多くの場で採用し、5月から7月のぼらぼん農園の管理、6月の野外活動実習、7月の福島避難者支援ワークキャンプ、8月のつどいの広場づくりワークキャンプ、神戸

大学ESDコース受講者を招いての冬のワークキャンプなどにおいて、スタッフとしての態度・スキル・役割を徐々に身に付け、それらを「ぼらぼんミーティング」と呼ぶ定例リフレクションセミナーで意識化する、ということも行った。「人づくり」という原点に立ち返った活動が、今年度の活動の特徴のひとつである。

邑久光明園未来づくりワークキャンプ

「邑久光明園の未来をどう構想し、どのような島を創るのか？」

入居者が高齢化し、光明園自治会もやや弱体化しつつある現在、「消えゆくハンセンの島」にならないために、ぼらぼんがどのような役割を果たすことができるのかが、ぼらぼんの大きな課題となっている。ぼらぼん大農園の管理運営（5, 6, 7月：8回）、夏ワークキャンプ（8月17日～22日：5泊6日）、冬ワークキャンプ（12月13, 14, 15日：2泊3日）、春ワークキャンプ（2014年3月27日～4



月3日：予定）の年4回のワークキャンプを通して、邑久光明園の新住民としての当事者性を高めてきた。参加者はのべ200名を優

に超える。海岸清掃、「集いの広場」の開墾だけではなく、まちとして人が住むことのできる島づくりワークショップなども行った。



福島避難家族の夏休み支援

邑久光明園をフィールドに、東日本大震災・原発事故の被害者である福島避難家族が夏休みを快適に過ごせる

ように、と企画された「わくわく保養ツアープロジェクト」(7月)にも協力した。真宗大谷派のボランティア団体との協働で、流しそうめん・星観察会・スイカ割などを盛り込んだ夏休みプランを企画運営し、被災者との深いつながりを切り結ぶことができた。今年でまだ2回目であるが、次年度以後も実施する予定である。

ESD プログラムの開発

神戸大学 ESD サブコースの授業科目「ESD 論」のアクションリサーチプログラムにも協力した。参加者 24 名。12 月初旬、1泊2日の邑久光明園での体験キャンプのなかで、試行的事業として「ワールドカフェ体験学習プログラム」を企画・運営した。邑久光明園のさまざまな資源や多様なボランティア活動を参加者がツアーすることによって、持続可能な社会づくりの課題を考えてもらう企画である。今後は、学生だけではなく、島を訪れる一般市民向けの事業としての発展を考えている。



ワークキャンプ実践ネットワークづくり



ESD を実質化するには、こうした多様な事業を推進するだけではなく、他地域や他団体の事業との接触・交流も求められる。とりわけ、ワークキャンプは、近年、その意義が再認識され、ボランティア活動支援方法のひとつとして注目されている。邑久光明園だけではなく、大船渡支援ワークキャンプ(被災地復興支援)や京都美山ワークキャンプ(限界集落支援)のメンバーの相互入れ替えなども行い、互いの交流を行った。

シニアボランティアとの交流による ESD ボランティアの創出

シニアボランティアとユース(大学生・高校生)の交流活動のモデル事業として、明石市立高齢者大学校と連携し、2月27日に「ワンデー交流プログラム」を実施した。ユース40名、高齢者70名が参加。話題の中心は「持続可能な社会づくりにわれわれはどう関わるのか」。何度もシニアスタッフとぼらばんユースメンバーがミーティングを重ね、互いに協働しながら ESD ボランティア活動を創出する仕組みについて考究した。

RCE 兵庫神戸ネットワーク会議への企画提案

今年度の特筆すべき事柄のひとつは、RCE との連携である。9月に、国連大学によって RCE (ESD 推進地域拠点) に認証された RCE 兵庫神戸 (ESD 推進ネットひょうご神戸) のネットワーク会議が開催された。そのなかで、ぼらばんが培ってきた「ESD ボランティア・トリッププログラム」の方式が採択され、今後、阪神間の ESD 学習を実質化する「ESD 学習ツアープログラム」が実行されることになった。RCE のメンバーは以下のとおりである。これまでぼらばんが連携してきた 14 団体に加え、多くの阪神間の組織・団体とのつながりが生まれてきた。



兎にも角にも、ぼらばんが培ってきたさまざまな地域とのつながりが、今、より強い絆になりつつある、という実感を得た一年であった。

兵庫県立大学 兵庫県嬉野台生涯教育センター 兵庫市民活動協議会 神戸 YMCA ホールアース自然学校
川崎重工業株式会社 ESD 推進ネット神戸 兵庫県教育委員会社会教育課 神戸市教育委員会生涯学習課
神戸市玉津南公民館 高津橋ふれあいのまちづくり協議会 ソーシャル・デザイン・センター淡路
あいな里山葺合同人 「海と空の約束」プロジェクト コープこうべ 兵庫県生活協同組合連合会
人と自然の博物館 NPO 法人プラス・アーツ NPO 法人 BERT 神戸市立工業高等専門学校
自然観察指導員兵庫連絡会 サンテレビ 神戸新聞 人と防災未来センター きんき環境館

佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援

人間発達環境学研究科 教授
発達支援インスティテュート サイエンスショップ 副室長
伊藤 真之

1. はじめに

「サイエンスショップ」はヨーロッパで生まれ広がった仕組みで、市民社会の課題に対する相談窓口あるいは解決支援を主な目的としている。平成19年神戸大学に人間発達環境学研究科に創設されたサイエンスショップは、それらに加えて、広義の科学教育や文化としての科学に関わる諸活動、それを通じたコミュニティ活性化に対する支援も重視し、コミュニティのエンパワーメントを理念として活動を進めている。平成25年度地域連携事業として、兵庫県西部の佐用川のオオサンショウウオに象徴される生態系の保全に取り組む市民グループ・地域への協力を中心として、淡路島の持続可能な地域づくりのための市民による学習・啓発活動、伊丹市および姫路市の市民グループによる科学コミュニケーション活動などへの支援・協力を行った。

2. 佐用における取組

平成25年3月、佐用町において、サイエンスショップが企画・運営を担当しサイエンスカフェひょうご「川の水をはかれば生き物がわかる？～環境DNA研究の最先端～」(主催：大学コンソーシアムひょうご神戸、公益財団法人ひょうご科学技術協会)が開催された。これを契機として、地域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」との間で連携・協力が始まり、佐用町(生涯学習課)も含めた連携として活動を進めた。環境DNAの手法は、河川などの水中にある生物のDNAを検出・同定することで、直接捕獲・観察をすることなく、その周辺領域の生物種の棲息を検知する方法で、人間発達環境学研究科の源利文特命助教が開発と生態系調査への応用を進めている。

佐用川流域は、平成21年の水害を受けて大規模な河川改修が進められてきたが、国の特別天然記念物オオサンショウウオに象徴される豊かな生態系が保持される地域でもある。今回の調査を通じて、従来よりも広い範囲で、オオサンショウウオの棲息状況が把握できた。棲息調査と併せて、地域の生態系に関する啓発・環境教育の取組として、市民グループとともに小・中学生を対象とした生物調査「佐用川の見えない生き物を探し出せ!!」を平成25年9月に実施した。さらに12月には、佐用町の要望を受けて同地域の小・中学生約20名が神戸大学を訪問し実習等に取り組んだ(実習テーマ：「環境DNAを用いた生き物調査」、「生分解性プラスチックの分解」他)。今後、佐用において調査結果の市民への報告を含めたサイエンスカフェの開催を予定している。



写真1. 市民グループ、佐用町と協力した、佐用川における生物調査・環境学習イベント

3. その他の活動

南あわじ市では、平成19年以降、市民グループのシカの食害への取組とそれを契機とした

地域活性化等への支援を行ってきた。地域では、蓄積された成果を活かして NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路（略称 SODA）が設立され、サイエンスショップも活動に協力している。平成 25 年度は、SODA が主催する市民を対象とした下記 2 回のフォーラムを共催し、学生の参加やディスカッションのコーディネートなどを通じて協力した（株式会社損害保険ジャパン、日本興亜損保株式会社の協賛を受け、「SAVE JAPAN プロジェクト」として実施された）。

(1) 森・里・海をつなぐ水循環と生態系について考える –その 1–

「諭鶴羽山系のホテルを見に行こう！」（平成 25 年 6 月）

南あわじ市の中学校と教員によるホテルの保全活動の紹介、生態系に関する講演、市民合唱団によるコーラス、諭鶴羽山へのフィールドワークが行われた。このイベントには、神戸大学の ESD（持続可能な開発のための教育）に関する授業科目「ESD 演習」を履修する学生が参加、運営に協力し、その後、地域の農業のあり方や古民家を利用した移入促進に関するアクション・リサーチが進められた。平成 26 年 3 月には、SODA が企画・開催するイベント「農カフェ」の場で、これらの学生のリサーチの報告が予定されている。

(2) 森・里・海をつなぐ水循環と生態系について考える –その 2–

「東日本大震災の経験から学ぶ淡路島の防災と海の保全」（平成 25 年 10 月）

瀬戸内海の水環境保全、東日本大震災からの復興の取組（自然共生型の地域づくり他）に関する講演と、パネルディスカッションが行われた。このフォーラムには、それぞれ東北と関西で環境保全や持続可能な社会づくりに取り組む NPO 法人からも各 10 名程度の参加があり、主催団体である SODA との間で有意義な交流・情報交換が行われた。



写真 2 南あわじ市で開催されたフォーラム「東日本大震災の経験から学ぶ淡路島の防災と海の保全」

このほか、下表に示すように、伊丹市の市民グループによる「サイエンスカフェ伊丹」、姫路市を中心とした播磨地域で活動する市民グループ「サイエンスカフェはりま」などへの支援も行った。

表 市民グループによる開催を支援したサイエンスカフェ等の例

テーマ	開催日（開催地）
<サイエンスカフェ伊丹>	
身近なモノに隠された金属のヒミツ	平成 25 年 10 月（伊丹市）
昆虫の行動とそのしくみ –小さな隣人の秘密に迫る–	平成 25 年 12 月（伊丹市）
統計で、世界を見る目が変わる	平成 25 年 12 月（伊丹市）
<サイエンスカフェはりま>	
環境中でたくましく生きる微生物	平成 25 年 11 月（姫路市）
ビジュアルで計算結果を理解しよう！ –スパコンだけではダメなんです–	平成 25 年 11 月（高砂市）
姫路城周辺の植物観察 ~秋冬版~	平成 25 年 12 月（姫路市）
芸術と数学の出会い ~ Art meets Mathematics ~	平成 25 年 12 月（姫路市）
科学って文化なの？（講演会）	平成 26 年 2 月（姫路市）

地域の子どもたちとの

フラッグフットボール教室を通しての交流

神戸大学アメリカンフットボール部 Ravens

経営学部 1 回生 越智 玲奈

1. 背景～国立大学アメフト部の課題～

アメリカンフットボール部は 1975 年創部で、現在までほとんどの間 1 部リーグに所属しています。ちなみに 2013 年のリーグ構成は国立大学が 3 校、私立大学が 5 校です。やはり私立大学はスター選手を獲得し、また付属の高等学校や中学校から選手を育成することができ、そして練習の環境も国立大学よりも良いため、同じ 1 部リーグでも上位チームと下位チームの間に大きな差が出てきました。このように、資金面、選手獲得面で制限のある国立大学としては、私立大学とは別の観点から対策を講じる必要があります、その方法を模索し続けています。その 1 つの方法として、もっと地域の人々を巻き込んだ活動を行えないか、そのためにどうすればアメフト部が地域の方々に貢献できるのかということを考えてきました。

2. 背景～子供たちのスポーツ離れ

ゲーム産業等の発達に伴い、最近の子供は外で遊ぶ機会が減少し、スポーツ離れが進行しています。しかし、スポーツは子供たちの成長過程において、社会性の形成や身体能力の向上といった大きな役割を果たしています。そういったスポーツの重要性を見直し、地域の子どもたちにスポーツをする機会を提供して、その楽しさを知ってもらうことが必要です。そこで、アメフト部が直接指導を行うことで、地域のスポーツ活動の推進に貢献できるのではないかと考えました。



3. 企画の概要



アメフト部の学生が地域の小学生にフラッグフットボールを教えます。これはアメフトの簡易版で 2011 年度から小学校の学習指導要領に加えられた競技です。人体接触が少なく安全で、学年や性別を問わず楽しめるスポーツです。また、各々の役割が明確であるため、スポーツ導入に適しています。まずはゲームが出来るように基礎的なプレーを練習し、最終的にはチーム分けをしてミニゲームを行います。

スポーツをする楽しさを感じ、プレーを身につけることができたという自信をつけてもらうことが狙いです。将来的には、フラッグフットボールチームを作り、一般の試合にも参加できるようになっていきたいと考えています。それによって、もっとアメフトを知ってもらい、レイバンズのことでも知ってもらいたいと考えています。

4. 実施報告

6月22日、王子スタジアムにおいてフラッグフットボール体験会が開催されました。準備は小学生の新庄フラッグフットボールクラブの代表の方に協力していただき練習メニューを決め、当日はそのチームの生徒と地域の小学生の参加があり、アメフト部学生が指導にあたりました。スナップリレーやフラッグ取りなどフラッグフットボールの基本となる動きから、休憩をはさんでパスやランの練習をしました。基礎的なメニューをどんどん吸収してくれて、アメフト部を含めて試合を行えるほどに上達しました。

また、7月には神戸大学国際文化学部グラウンドにおいて3度にわたってフラッグフットボール教室を開催しました。体験会と同様に新庄フラッグフットボールクラブの生徒と近隣の小学生たちが参加してくれました。パスキャッチやハンドオフなどの練習をこなし、ミニゲームを中心としてフットボールを楽しみました。休憩時にはアメフト部学生と楽しくおしゃべりをしたり、ボールで遊んだり、交流を深めていました。ボールを上手くキャッチできたり、目の前の相手を上手く交わしたりしたときには嬉しそうな表情が見られました。暑い中でしたが、小学生たちはのびのびとした様子で、楽しく生き生きと練習をしている姿が印象的でした。



5. 今後の展望

今後もこのように、地域の小学生がフットボールに触れる機会を作っていきたいと思います。フットボールを通じてスポーツの楽しさを感じてもらいたいです。また、このような教室の開催によって、アメフト部と地域との関係性を深め、地域貢献につながればよいと考えています。また、神戸大学アメリカンフットボール部を多くの方に知ってもらい、神戸大学のアメフト部に入りたいと受験をしてくれる学生の増加につながってほしいと思います。



神戸ビエンナーレ 2013 / 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業 Site Specific Dance Performance #3 『春の祭典』

舞踊ゼミ（関典子研究室）

人間発達環境学研究科博士前期課程 2 年 花岡 麻里名・講師 関 典子

■目的

本事業「Site Specific Dance Performance」は、過去 2 回（2009『GATE』、2011『KIRA』）の成果から、兵庫県立美術館と本学の協定事業およびビエンナーレ事業として、定着しつつある。各回約 500 名という異例の観客動員は、美術に留まらず、幅広い芸術を扱う「芸術の館」の愛称をもつ兵庫県立美術館の魅力を一気に拡充した。会場の屋外大階段は普段、地域の人々の憩いの場ともなっているが、ダンスを介することで新たな魅力を引き出すことが可能となる。これまで培ってきたネットワーク（大学・美術館・地域など）の協働のもと、「場の固有性」を活かしたダンス・パフォーマンスの創作と公演の実現を通して、芸術の振興・地域活性・本学の広報を図ると共に、創造性に満ちた人材の育成を目的とする。

■概要

「Site Specific Dance Performance」第 3 弾。初演から 100 周年を迎えたストラヴィンスキー作曲『春の祭典』に挑み、「場の固有性」とビエンナーレのテーマ「Saku（咲く／裂く）」をテーマに、安藤忠雄建築を活かし、異化するパフォーマンスを上演する。

【総合演出・監修・振付】関 典子（人間発達環境学研究科 人間発達専攻 表現系 講師）

【振付・出演】学生 22 名（院生・学部生）

【スタッフ】学生 15 名、プロ（映像・音響・写真）、美術館・ビエンナーレ事務局、他

【日時・会場】2013 年 10 月 20 日（日）15:00～ 兵庫県立美術館・屋外大階段

2013 年 10 月 27 日（日）13:00～ 神戸ビエンナーレ・メリケンパーク会場

【主催】神戸ビエンナーレ組織委員会／神戸市

【共催】兵庫県／兵庫県立美術館／神戸ミュージアムロード振興協会

■事業の効果

過去 2 回はビエンナーレ協賛事業であったが、今回は主催事業として認定され、兵庫県立美術館に加え、メリケンパーク会場でも抜粋上演を行った。観客動員は約 500 名、アンケートによれば、年齢は 90 代まで、職業は学生・教員・主婦・会社員・芸術家など、幅広い観客層にご覧いただき、総じて「満足」との高評価を得た。通りすがりの観客や、事前の練習風景をご覧になり、本番当日にも来場された方も多く、地域に根ざした芸術振興の意義を果たすことができた。

また、11 月 17 日「神戸大学のミリョク」シンポジウム（東京・秋葉原）での抜粋上演、2014 年 1 月 11 日「加川広重 巨大絵画が繋ぐ 東北と神戸 2014」（デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO）での改訂再演など、本番をご覧いただいた方からの依頼上演という発展にもつながり、本学の広報的効果の面でも、大いに寄与することができた。

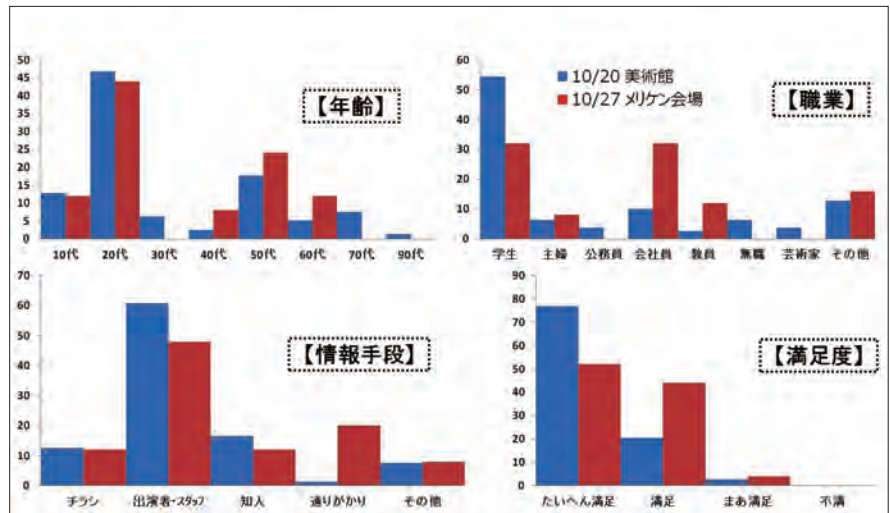
■アンケートより

- 表情が素晴らしい。空間をいっぱい、工夫して使われていて、クリエイティブでした。場所を生かしたダイナミックな動き、楽しかったです。学生らしい元気さで、これからも神戸を元気なマチにしてください。（20 代・美術館職員）
- すごかったです！身体があれば、どこでも舞台になるんだなと感じました。その場にある環境をなんでも利用して表現するのって、面白い！（30 代・学生）

- とても完成度の高いアートを見ることができました。何にも取り繕われていない原始性、エロティシズムなど、全て伝わってきて、様々な犠牲を払ってパフォーマンスをしていることも分かり、心がいっぱいになりました。(20代・フリーター)
- 年々本格的になり、すごい！頑張ってください。(50代・主婦)
- マンションの窓から、イベントがあるのを見て駆けつけました。若い人の活動に元気をもらいます。次の機会も是非見たいと思います。頑張ってください。(70代・無職)
- 噂には聞いていたけれど、個々のレベルが高くて、感動しました！(20代・会社員)
- 2011年の公演の様子を知人から聞き、次回公演は必ずお邪魔しようと思っていました。初めて関さんの振付を見ることができましたが、こう、言葉にできなくて……口がふさがりませんでした！忘れられない公演になります。(20代・学生)
- 空間と踊り手、群舞の構成が素晴らしかった。期待以上の舞台でした！(50代・美術家)
- 芸術祭にふさわしく、素晴らしかった。益々のご活躍、応援いたします。(50代・主婦)



【チラシ表面】



【アンケート集計】



【10月20日開催 兵庫県立美術館公演】



【10月27日開催 メリケンパーク公演】

■今後の展望

舞踊ゼミは近年、全国ダンスコンクール「アーティスティック・ムーヴメント・イン・トヤマ」3年連続受賞(2011・2013 特別賞、2012 松本千代栄賞=最高賞)、「こうベユース賞」(2013)、「学長表彰」(2013)、国内最大級のコンテンポラリーダンスフェスティバル「横浜ダンスコレクションEX」コンペティションII 新人振付家部門 奨励賞(2014)など、多方面からの注目を集めている。また、地域活性・社会貢献の面からの期待も高く、早くも次回の「神戸ビエンナーレ2015」での開催の他、より幅広い活動を期待する声も聴かれている。

今後も、神戸大学、とりわけ、学際的な研究と学びを切り拓く、本学部・本研究科を代表するような心意気と責任感をもって、表現および研究に精進して参りたい。

地域資産を用いた篠山市畑地区の地域再生

はたもり

農学部3回生 森田 綾子

1. “はたもり”とは

篠山市畑（はた）地区を盛り上げるサークル。平成23年度“実践農学入門”をきっかけに畑地区と関わり、これからも関わり続けたいという受講生を中心につくられました。農・経・発達等、約30名のメンバーで構成されています。



豊かな自然や歴史・文化・伝統など、畑の地域資源を発掘し、地域内・外へアピールをする橋渡しとなるよう、地域から“学んでいること”“影響すること”を大切に活動しています。今年度は以下の4つの活動を中心に行いました。

1. 農作業：畑地区の特産品である黒大豆の栽培作業のお手伝いをする。
2. はた祭りへの参加：山車や神輿の担ぎ手となる。はた祭りの良さを地域内の方々や地域外の人々にもアピールする活動を行う。
3. 各イベント参加：イベント運営の手伝いを通して、地域のさまざまな世代の方と交流する。
4. 学園祭での取組：地域の農産物を使った模擬店等を行う。畑地区の良さを広める企画に取り組む。

2. 今年度の活動報告

① 黒大豆栽培



篠山の名産である黒枝豆・黒大豆の栽培から販売までを行いました。昨年までの活動では農家さんのお手伝いをするのが中心でしたが、今年は畑をお借りして、実際に生産者の立場として携わりました。作業が多い時期には毎週末活動を行い、作物を育てることの喜び、ひとつひとつの作業のしんどさ、大変さなど“お手伝い”だけでは知ることのできなかった多くのことを経験できました。

また、たくさんの地域の方々が見に来て下さり、分からないことだらけの私たちに作業の方法を教えてくださいと、暑い日にスイカやトマトなどの差し入れを持ってきて励ましてくださったりと、いろんな面から活動を支えていただきました。黒豆畑を通じて地域の方々との交流の機会が増え、喜怒哀楽を共有しながら、今までより地域に密着した活動ができたと感じています。また、どこか他人事のように感じてしまっていた日本の農業について深く考える機会となりました。地域の自然環境や、地域の方々と関わる中で、身近に動植物の多様性があること、土が豊かであること、人々のあたたかさなど、あらためて畑地区の良さを見つめることができました。また今までの活動では関わったことのない農家さん方とも交流する機会が増え、多角的な視点から地域について知るとともに、学生が地域に入っていること、入ることへの地域理解につながったと感じています。



② はた祭り



はた祭りは多紀郡三大祭の1つであり、集落ごとに合計山車10台と神輿7基が地域を練り歩き、最後は流鏝馬で締めくくられる畑地区最大の伝統行事です。

しかし、地域の高齢化・過疎化を背景に、担ぎ手となる若者や乗り子となる子どもの不足によって規模が縮小してきており、実際神輿は現在3基しか出せていない状況です。祭りへの思い自体が希薄化しつつあるという問題も抱えています。



平成23年度から学生が担ぎ手として、各集落の住民の方々と交流しながら参加させていただいており、はたもりにとっては3回目の参加となりました。

平成23年度から学生が担ぎ手として、各集落の住民の方々と交流しながら参加させていただいており、はたもりにとっては3回目の参加となりました。



今年はFacebook やチラシで畑地区に関わったことの無い学生の募集を行うことで、はた祭りのPRをするとともに、来年度以降もはた祭りに参加したいというファンを増やすことを目指しました。当日は全部で約40名の学生が大型バスを利用して祭りに参加しました。山車を曳き神輿を担ぐという体験、普段なかなか交流することのない様々な年齢層の方との交流は、学生にとって忘れられない経験となっているようです。また地域の方を中心に、祭り写真集の作成実行委員会が立ち上げられたことから、祭りの

カメラマンとして写真集作成に携わりました。

③ 学内活動



10月毎週月曜日の昼休みに、農学部直売所“ささやま家”を利用して、畑で収穫した黒枝豆を試食販売しました。直売所には教職員の方・学生、地域の方など多くの方が訪れてくださりました。大学で販売することによって、黒枝豆の存在自体を知らなかった人にそのおいしさを伝えることができました。

また、篠山で活動する他団体合同で“ささやま家”を出店し、各団体で作った農作物や、篠山の食材を用いた料理を出しました。はたもりからは畑で育てた黒枝豆やさつまいもをスイーツに加工しました。当日は大盛況で、すべてのメニューが完売となりました。

④ 各イベント参加

畑地区には数多くの地域イベントがあり、毎年はたもりも参加し交流させていただいています。

・クリンソウハイキング
兵庫県絶滅危惧種Aに指定されているクリンソウの自生地が畑地区には存在し、毎年シーズンである5月にハイキングが行われています。クリンソウを守る会の方とメンバーとでハイキングに行き、畑地区の自然の豊かさを実感しました。



・デカンショ祭り
毎年8月に篠山市で開催されるデカンショ祭り。デカンショ節にあわせてヤグラで総踊りが行われ、畑地区の住民のみなさんは“みたけ連”として参加しています。その連にはたもりのメンバーも加えていただき、交流を深めました。

・敬老会
畑地区では、敬老の日に敬老会を開催しています。出し物をする依頼を受け、地域で親しまれているクリンソウにちなんで高齢者の方でも座って簡単に行うことができる“クリンソウ体操”を考案しました。

・クリスマス会
クリスマス会の準備・片付け、地域の子どもの合唱練習、ジャグリング、ゲームの実施など、クリスマス会を運営する側として参加し、地域の子どもたち、保護者や高齢者の方々と交流しました。出し物では、初めて見るジャグリングの見事さに会場内が拍手に包まれ、技が成功した時には、歓声が大きかったです。ゲームでは、「久しぶりに子どもに戻ったようでとても楽しかった」「夢中になれた」という声をいただきました。



3. まとめ

全体をふり返って、3年目である今年度の活動は、地域への認知度も高まり、世代を超えてさらに多くの方々と関わることができました。畑地区は六甲から電車で1時間半の篠山口駅から車で30分ほどの場所に位置しており、ここで継続的に活動するための交通費が支援金によって補助され、特にはた祭りでは大型バスによってより多くの学生が継続して参加することができました。この1年間の活動人数は、のべ200人に達し、地域の方々と交流を深めました。また、野菜販売や学園祭出店などの学内活動や、はた祭りのPRを通じて、畑地区の魅力を発信することができました。

一方で、現在のほとんどのメンバーが3回生であるという問題があります。今後どのように関わっていくのか、来年度以降の活動の課題です。

「イルミネこうべ」光る募金箱プロジェクト 神戸ルミナリエのための電飾募金箱制作と募金活動

「イルミネこうべ」プロジェクト

工学研究科博士前期課程1年 今井 淳南

1. 事業概要と背景

「神戸ルミナリエ」は阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めるとともに、都市の復興・再生への夢と希望を託し、大震災の起こった1995年の12月より毎年開催されている。震災の記憶を語り継ぐ「希望」を象徴した光のアーチは大きな話題を呼び、神戸市民だけではなく、全国から多くの人々が来場している。神戸ルミナリエの運営は、来場者や協賛企業からの募金で賄われているが、年々その額は小さくなっており、開催規模の縮小や時期の短縮など、存続が危ぶまれている。そこで、神戸ルミナリエ存続の願いに答えるべく「イルミネこうべ」プロジェクトが設立された。本プロジェクトは神戸大学塚本・寺田研究室を中心となり、LEDによる電飾や最新のIT技術を盛り込んだ募金箱を制作し、神戸ルミナリエ会場で募金活動を行うことによって、阪神淡路大震災への鎮魂の願いを込めた募金活動の意義を広く認知してもらうことを目的としている。プロジェクトの発足は8年前であり、毎年継続して電飾募金箱の制作および神戸ルミナリエ会場での募金活動を続けている。本プロジェクトの特徴として以下の点が挙げられる。

- ・募金する人が楽しくなる「募金箱」を作る

見るだけでも楽しい、募金するともっと楽しい電飾募金箱の形と仕掛けを新たに設計。

- ・募金してもらう人も楽しくなる「募金箱」を作る

募金箱の仕掛けによって、募金を呼びかける人々にも喜びや充実感を与えられる募金箱の要素を検証。

- ・「募金箱」を通じた最新のテクノロジーの紹介

研究室が最新技術のエッセンスを織り交ぜて募金箱を作成することで、現代社会を支える科学技術を人々へ発信。

2. 本年度の活動実績

本年度は、「学生地域アクションプラン」の一事業として採択され、前年度よりもバリエーション豊かな電飾募金箱を制作することが可能となった。新たな試みとして、神戸芸術工科大学プロダクトデザイン学科の見明暢助教の協力を得て、同学科の学生とともに、外観を重視したコラボレーション募金箱の制作を行った。塚本・寺田研究室の工学的知見と見明助教のデザインの知見を組み合わせることにより、プロダクトとしての完成度が高い電飾募金箱を制作することができた。この他にも、数種類の電飾募金箱を制作し、神戸ルミナリエの会場において制作に携わったメンバが実際に募金活動を行った。その結果、過去最高額となる1,553,107円の募金を来場者の方々から募ることができた。来場者の声として「楽しく募金することができた」「毎年新しい募金箱が見られて楽しい」「つつい何度も募金をしてしまう」などが聞かれた。また、大手新聞社をはじめとした各種メディアに活動内容が掲載され、募金活動の意義を多くの方々に認知していただくことができた。



3. 制作した電飾募金箱の紹介

(1) 超絶 LED 募金箱&スーツ

過去最多となる数のLEDを搭載した募金箱。大量のLEDを同時制御するために、LEDテープという新しいハードウェアを導入している。募金を感知すると付属のLEDスーツと光の演出が連動する。

(2) サーカス募金箱

神戸大学国際文化学部の学生とのコラボ作品。募金すると募金箱の中の動物が芸を披露し、色鮮やかなLEDで演出する。回転台の制御にはモータを使用。どの動物を見られるかはお楽しみ。

(3) openClearPanels シリーズ

神戸芸術工科大学とのコラボ作品。設計図データは一般公開されており、アクリル板をベースに誰でもオリジナルの電飾募金箱を作ることができる。今回は3種類を制作。

(4) ゆきだるま 募金箱

電飾を施した光る傘と季節感あふれる雪だるま型募金箱。募金を感知すると、傘から光の雪が降ってくるようにLEDが光る演出が。募金箱本体の素材は軽量性および透過性を重視して選択した。

(5) ツカラボキン

前年度制作作品のリファイン。内部に通信機能を備え、募金を感知するとTwitterにてお礼のツイートをつぶやく。外観はプロジェクトのマスコットの存在である「ツカラボキン君」。

(6) コウボキン

前年度制作作品のリファイン。一般公募した募金箱アイデアを取り入れた募金箱。投入されたお金（硬貨）をセンサ感知し、色鮮やかな光のラインが追従する。

(7) Re kobe

前年度制作作品のリファイン。神戸芸術工科大学とのコラボ作品。透明のアクリル板と極薄木目シールを用いた視覚的トリックを用いている。募金を感知すると、神戸の街並みが影絵のように映し出される。

4. 取材実績

神戸新聞、読売新聞、産経新聞、朝日新聞、毎日新聞、朝日小学生新聞、神戸市広報誌 2013年12月号掲載「楽しさと感謝を届ける募金箱」、

KOBE ムービーチャンネル こうべ動画館 2013/12/10 配信「楽しさと感謝を伝える募金箱－神戸大学大学院工学研究科塚本・寺田研究室」

「イルミネこうべ」プロジェクト公式ホームページ

<http://cse.edept.kobe-u.ac.jp/illumineBOKIN2013/>



大船渡ワークキャンププロジェクト

大船渡支援プロジェクト実行委員会

人間発達環境学研究所博士前期課程1年 水坂 洋介

大船渡支援プロジェクト概要

大船渡支援プロジェクト実行委員会は、2011年4月から岩手県大船渡市赤崎町で継続的に復興支援活動を行っている。今まで、合計で31回、のべ270名以上学生が、赤崎で活動してきた。私たちは現地の方と相談しながら、被災地の現状や必要性に合わせながら支援活動を行っている。今年度は「被災地復興活動の支援」、「被災住民と復興をつなげる」、「神戸と被災地をつなぐ」といったアプローチで赤崎復興市支援などの活動を行った。

赤崎町の津波被害と平成24年度当初の状況

赤崎町は、津波で60名が亡くなり、650戸(45.5%)の家屋が被害にあった。津波の被災にあった地区は、瓦礫はなくなったが、手つかずのまま放置されている。この地区をどう活用するかの目処はまだたっていない。このような中、2012年11月に自分達の町を行政にまかせきりにするのではなく、自分たちでも復興を実現していこうという有志が、赤崎地区公民館のもと赤崎復興隊を組織して、まちづくりワークショップなどを始めた。

平成24年度のはじめに、赤崎町は「定まらない防災集団移転事業」、「津波被災跡地の活用方法の模索」、「復興に対する停滞感、行き詰まり感」、「企画を運営するための若い力の不足」、「復興のプロセスへの被災住民の参加し難さ」、「長引く復興の過程で忘れ去られることへの恐怖」といった課題を抱えていた。



津波被災跡地の様子



津波被災跡地に作られた
フラワーロード



復興市でチョコバナナを作る
子ども復興隊

「被災地復興活動の支援」

赤崎復興隊のまちづくりワークショップと復興企画を支援した。今年度は、「はじめての赤崎復興市の開催」、「津波被災跡地でのフラワーロード作り」、「町民大運動会の復興」、「復活2年目の灯籠祭の開催」、「だべこ祭り開催」、「赤崎復興のまちづくり宣言書策定」、「防集移転希望者の集い」といったものを支援した。

特に、「はじめての赤崎復興市」は、津波被災跡地の活用を模索するために、赤崎町の公共のスペースとして自分達で管理していけるようにするために、被災跡地で行うことで周りの被災者に希望を持ってもらうために考えられ行われた、地域内外から400人以上もの人があつまり大盛況だった。この復興市には復興対外にも多様な人々が関わった。仮設住宅のおばあちゃん達は、お菓子や手芸品を出品し、これらの商品は大人気であった。子ども達は子ども復興隊

として、チョコバナナを販売した。私たち大学生は、復興隊Tシャツをきて、皆さんが復興市に集中できるよう、設営・後片付けや駐車場の整理、11えん募金からお客さんに飲み物をプレゼントした。

私たちは、企画のときにいきなり参加するのではなく、毎月行われている、「赤崎復興隊の集い」に参加しながら、住民とともに活動を考え、それに寄りそいながら支援している。

被災住民と復興をつなげる

赤崎復興隊の集いに参加したくても、町民全員が参加できるとは限らない。私たちは仮設住宅にいく度に、今の生活の状況を伺いつつ、赤崎復興隊の情報などを口頭で伝えたり、「赤崎の声宅配便」という広報紙をつくり赤崎の復興の状況を回覧板で回したりしている。

また、昨年3月から、復興市や地区運動会の運営に参加し、中には復興隊の集いに顔を出してくれる子ども復興隊が出てきた。復興隊と一緒に活動を行いやすいよう、年齢の近い大学生があいだに入っている。

神戸と被災地をつなぐ

2011年7月から、毎月11日に六甲道駅前、「11えん募金」という街頭募金を行っています。これは、被災地から離れた神戸にいる時も出来ることはないか、東日本大震災を風化させないようにと始めた活動です。毎月、募金してくださる方やがんばってと声をかけてくださる方がいます。この募金から、赤崎復興隊に「復興隊Tシャツ」をプレゼントした。



仮設住宅での盆踊りに参加している様子



毎月11日の11えん募金



復興隊Tシャツを着て住民と学生が入り混じった集合写真

第二の故郷赤崎の復興は、まだまだ、これから！

今年度、赤崎町と私たちの繋がりは深まり、「ボランティアとしてではなく、赤崎町の新しい若者として関わってほしい」という言葉を頂いた。第二の故郷である赤崎の復興に私たちはまだまだ、関わっていきたい。復興隊は、来年度に第二回、第三回赤崎復興市の開催を予定しており、津波被災跡地にそば畑を作る企画が動き始めた。私たちは、津波被害と復興を生で感じる、語られるスタディーツアーとボランティアプログラムの両立した事業を模索している。「高台に新しくできるまちが、周りのまちになじむように」、「復興から取り残される人が出ないように」、「復興の過程でも住民が希望を感じられるように」。

私たちの活動は、まだまだ続いていく。

県営明舞団地における 居住者目線の団地の歴史の記録・編集

明舞団地の歴史を記録する会

経済学研究科博士前期課程2年 石坂 将一

1. 本プロジェクトの前提

明舞団地とは神戸市垂水区と明石市にまたがる、兵庫県と兵庫県住宅供給公社が主体となって開発した大規模団地である。しかし入居開始から約50年経ったということもあり、近年は少子高齢化が進んで地域の活力が失われつつある。そのため兵庫県や団地自治会が地域の大学やNPOなどと協力して盛んに活性化活動に取り組んでいる。

その活性化活動の一端として付近の大学に通う大学生・大学院生が団地に入居し、地域活動への参加を通して活性化に貢献するという「学生シェアハウス」という取組みが兵庫県主導のもとに行われている。本プロジェクトの代表者もこの学生シェアハウスの制度を利用して団地に居住しながら活性化活動に従事している。よって本プロジェクトはこれら明舞団地において行われている活性化活動の中のひとつと位置づけられる。



明舞団地の風景

2. 活動内容とその目的

具体的な活動内容としては、初めに明舞団地に居住する住民の方々、特に長年にわたり居住している方を対象にオーラルヒストリーにおける聞き取りを行った。これは住民の方々に明舞団地に住んでから現在までの人生を振り返り、特に明舞団地での生活の様子を中心に語ってもらうというものである。そしてその語りをICレコーダーを用いて録音し、後にテープ起こしを行う。そして最後にすべての記録を編集して冊子にまとめ、地域共有の財産として後世に残すということを目的としている。さらに明舞団地の歴史を居住者目線から振り返ることにより、今後のまちづくりに資する地域資源を再発掘すると同時に、今一度明舞団地という地域の魅力を再認識することを意図している。

3. 活動結果

本報告書の作成時期においても引き続き聞き取りは行われているため最終的な結果ではないが、現段階における聞き取り人数は12名であり、最終的には20名になる予定である。聞き取った人数は少ないが、今回のオーラルヒストリーを通じて明舞団地に対する住民の方々の想いや考えが多少なり浮き彫りとなったことは収穫であろう。明舞団地では少子高齢化が大きな問題となっているが、住民の方々もそのことを強く認識しており、子供が多くいた時代を懐か

しむ声が多かった。今後のまちづくりにおいても子供や若年層を増やす方法を考えてほしいとの要望が強かった。また明舞団地の特徴として、入居開始当初からスポーツ関連のサークル活動



オーラルヒストリーの様子

が盛んであったことも分かった。住民同士で野球やバレーボールなどのチームを結成して大会にも積極的に参加していたようであり、地域活動に積極的な住民が多い風土はこれが影響しているのかもしれない。聞き取った内容を冊子にまとめる作業は編集ソフトを使って今も進行中である。住民の方々に興味を持って読んでいただけるような物を作れるように努力したい。

4. 助成金の使途内容

本プロジェクトにおいては、助成金を備品の購入と他の団地の見学のための費用にあてさせていただいた。備品としてはI Cレコーダーと冊子を作成するためのパソコンのソフト等を購入させていただき、プロジェクトの実行に大いに役立った。そして団地見学では東京都の高島平団地、および千葉県の常盤平団地の地域活動を見学した。両団地は大学と連携した活性化活動や活発な自治会活動がメディアで取り上げられるなど先進的な活動を行っており、本プロジェクトのみならず広く明舞団地での活性化活動の参考とするために見学に赴いた。そして実際に団地で活動する学生や大学の先生、自治会長などと議論を行い、まちづくりや活性化活動に関して多くの意見やアドバイスをいただくことが出来た。

5. 今後の活動の展望

本プロジェクトは学生地域アクションプランでの採択をきっかけとして始めたものであるが、来年度も可能であれば継続して行いたいと考えている。今後はより広範囲にわたって参加者を募り、また様々な世代の明舞団地への想いを聞き取っていきたいと思う。

おわりに.

本プロジェクトにご協力いただいた明舞団地住民の皆様、および神戸大学地域連携推進室の皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。



オーラルヒストリーの道具一式

灘区在住高齢者における未診断 COPD 患者の現状と対策

神戸在宅呼吸ケア勉強会

保健学研究科博士前期課程 沖 侑太郎

【はじめに】

慢性閉塞性肺疾患 (COPD; Chronic Obstructive Pulmonary Disease) は、たばこなどの有害な空気を吸い込むことによって、空気の通り道である気道 (気管支) や酸素の交換を行う肺 (肺胞) などに障害が生じる病気である。その結果、空気の出し入れが上手くいかなくなり、通常の呼吸ができなくなり、日常生活で息切れを起こしてしまう。長期間にわたる喫煙習慣が主な原因であることから、COPD は「肺の生活習慣病」と言われ、社会的にも注目を浴びている (図 1)。また、我が国で 530 万人の未診断 COPD 患者が存在すると予測



図1 COPDについて



図2 日本における COPD の現状

され、現在、厚労省主導で COPD 啓蒙活動が行われ注目されている (図 2)。神戸市の高齢化率は 22.6% (2011 年 3 月末) であり、2025 年には灘区における高齢化率が 27.3% (国立社会保障・人口問題研究所による推計値) と推測されている (図 3)。COPD の多くは高齢で発症するため、灘区内においても増加の一途を辿ることが予想される。したがって、今後高齢者における COPD の早期発見・予防という概念は非常に重要となる。

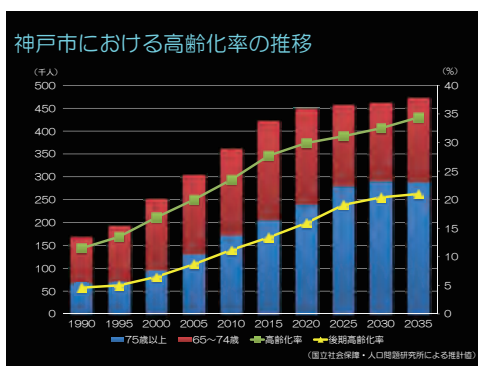


図3 神戸市における高齢化率の推移

【本プロジェクトの概要】

本プロジェクトの概要として、灘区に在住する 65 歳以上の高齢者を対象に呼吸機能スクリーニングを実施し、COPD 疑いのある未診断患者を明らかにすることである。平成 25 年度は、灘区の COPD 患者の現状把握を目的とし、将来的には呼吸機能スクリーニングにより COPD 疑いのある方に対し、病院での検査を促し、確定診断後に訪問看護およびリハビリテーションによる介入を支援していただけるようなネットワーク構築を目指す (図 4)。



図4 COPDの診断と呼吸機能検査

【本プロジェクト実施の問題点】

- ・平成 25 年度灘区「地域力を高める」手づくりの活動・事業助成についての面談で、本活動計画について灘区行政関係者に本事業計画の説明を行った。しかし、「灘区独自の課題でなく、国レベルの課題であるため」という理由で協力を得られなかった。
- ・呼吸機能スクリーニングによる COPD 未診断者に対する医学的診断を行う際は、保健所の申請許可が必要であり、実施責任者として医師が必要である。

【神戸呼吸ケア勉強会の紹介】

平成 24 年 12 月「呼吸器疾患を早期発見し、その後の病院から在宅へのフォローアップ体制を確立させる」という在宅呼吸ケアに関するレベルの向上と神戸市における在宅呼吸ケアネットワーク構築を目的に神戸呼吸ケア勉強会を発足した (図 5)。主な活動内容としては、月 1 回の定期勉強会と年 4 回の外部講師を招いての研修会の開催である (表 1・2)。平成 25 年 12 月に神戸在宅

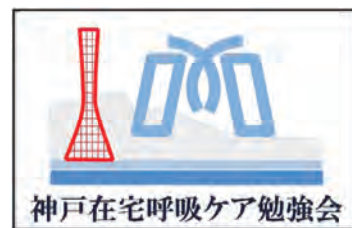


図5 神戸在宅呼吸ケア勉強会ロゴマーク: 神戸市を象徴とするポートタワー・六甲山・海、そして神戸市章に肺をモチーフとしたイラストを加え、神戸の地を中心として、在宅呼吸ケアの芽生えをイメージしている。

表1 平成25年定期勉強会の実施報告

回数	日程	内容
第1回	1月22日(火)	在宅呼吸ケアの基本事項とその意義
第2回	2月19日(火)	呼吸不全の基礎Ⅰ
第3回	3月19日(火)	呼吸不全の基礎Ⅱ
第4回	4月16日(火)	呼吸不全の基礎Ⅲ
第5回	5月21日(火)	在宅呼吸ケアにおける呼吸リハビリテーション(総論)
第6回	6月18日(火)	在宅呼吸ケアにおける呼吸リハビリテーション(各論Ⅰ)
第7回	7月16日(火)	在宅呼吸ケアにおける呼吸リハビリテーション(各論Ⅱ)
第8回	8月20日(火)	在宅呼吸ケアにおける呼吸リハビリテーション(各論Ⅲ)
第9回	9月17日(火)	在宅呼吸ケアにおける呼吸リハビリテーション(各論Ⅳ)
第10回	10月15日(火)	在宅酸素療法の基礎
第11回	11月19日(火)	在宅人工呼吸器の基礎
第12回	12月17日(火)	在宅呼吸ケアのまとめ

表2 神戸在宅呼吸ケア勉強会主催 研修会

回数	日程	講師	内容
第1回	平成24年12月2日(日)	神戸大学大学院保健学研究科 地域保健学領域 教授 石川 朗 先生	在宅呼吸ケアの現状と課題～在宅呼吸ケアネットワーク構築を目指して～
第2回	平成25年3月3日(日)	大阪大学医学部附属病院 感染制御部 副部長 関 雅文 先生	医療・介護関連肺炎(NHCAP)を攻略する～NHCAP診療ガイドラインを理解し、在宅ケアにおける感染予防を考える～
第3回	平成25年6月2日(日)	須藤内科クリニック リハビリテーション科長 中田 隆文 先生	在宅呼吸リハビリテーションの実際～東日本大震災を経験して～
第4回	平成25年9月1日(日)	兵庫県看護協会 慢性心不全認定看護師 主任教官 前田 靖子 先生	在宅における呼吸器疾患の急性増悪の早期発見～呼吸・循環のフィジカルアセスメント～
第5回	平成25年12月1日(日)	大阪大学歯学部附属病院 顎口腔治療部 医長 野原 幹司 先生	歯科医からみた在宅医療における嚥下障害の評価と治療
第6回	平成26年3月2日(日)	駒沢女子大学 健康栄養学科 准教授 田中 弥生 先生	慢性呼吸不全患者の在宅における栄養管理～栄養アセスメントと栄養療法～

呼吸ケア勉強会第一期生の全受講が終了した。全参加者65名中42名が、前12回の勉強会皆勤賞という非常に高い参加率で、参加者満足度も高かった。また、平成26年1月より第二期生の勉強会が開始している(図6・7)。

【活動報告】

平成25年1月～12月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会 定期勉強会の実施

平成25年3月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会主催 第2回研修会

平成25年6月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会主催 第3回研修会

- ・平成25年度灘区「地域力を高める」手づくりの活動・事業助成についての面談で、本活動計画について灘区行政関係者に本事業計画を説明

平成25年9月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会主催 第4回研修会

平成25年12月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会 第一期受講生 定期勉強会終了

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会主催 第5回研修会

平成26年1月

- ・神戸在宅呼吸ケア勉強会 第二期受講生 定期勉強会開始

平成26年2月

- ・東灘区多職種連携会議「こぶしの会」の合同ミーティングに参加



図6 神戸在宅呼吸ケア勉強会 第一期生



図7 定期勉強会の様子

【おわりに】

当初は、神戸在宅呼吸ケア勉強会を主体に測定会を実施する計画であったが、呼吸機能スクリーニングによるCOPD未診断者に対する医学的診断をすることについては、保健所への申請が必要であり、実施責任者として医師が必要であるという問題点が生じた。本勉強会はリハビリテーションスタッフと看護師が中心であり、当初の計画について検討を重ねた結果、測定会開催のみの実施責任者として医師に依頼して開催するだけでは今後の発展性に乏しいという結論に至った。本プロジェクトの目的であるCOPD疑いのある方に対し、呼吸機能スクリーニングを実施することで病院での検査を促し、確定診断後に訪問看護・リハビリテーションによる介入を支援していけるようなネットワークを構築していくことを実現するためには、本勉強会の目的に賛同して頂ける医師に依頼することが今後の発展性に重要である。

平成24年12月に神戸在宅呼吸ケア勉強会を発足以降、定期的な勉強会や研修会を開催することで神戸市内において少しずつではあるが認知され始め、医師・看護師・リハビリテーションスタッフからなる在宅呼吸ケアネットワークが構築されつつある。来年度に向けて、定期的勉強会と研修会の継続、平成25年度勉強会受講者を中心に本プロジェクトも含めての研究活動グループを新たに結成した。平成26年2月に東灘区での在宅医療に携わる医師・看護師・リハビリテーションスタッフによる東灘区多職種連携会議「こぶしの会」の合同ミーティングに参加し、本事業計画であるCOPD未診断率の現状を明らかにするためのプロジェクトについて来年度中の開催を目標に検討していく。

平成 25 年度 学内公募事業 募集要項

平成 25 年度「地域連携事業」募集要項

1. 目的
各部局等で計画している地域連携事業に要する経費の一部を支援することにより、本学の地域連携事業の一層の推進・発展を図ることを目的とします。
2. 対象テーマ
地域活性化について、自治体・地域団体等と連携した活動
3. 対象取組事業
部局の支援のもとに下記の①～③いずれかに該当する事業を対象とします。
 - ① 協定締結に基づく、もしくは協定締結につながる取組事業
 - ② 自治体等や地域団体と協同で行う萌芽的事业
 - ③ 複数部局による取組事業

注) ただし、人文学研究科、保健学研究科及び農学研究科の各地域連携センターとの共同事業及び補助金又は競争的資金等と重複利用する地域連携事業は除きます。
昨年度までの採択例については産学官連携グループまでお問い合わせ下さい。
4. 支援額及び採択件数（予定）
支援額 1事業につき 30万～80万円
採択件数 3～7件
5. 対象
全部局及び各センター（地域連携センター及び同センター設置部局を除きます。）
6. 公募期間及び結果通知
受付期間：平成 25 年 4 月 1 日（月）～4 月 26 日（金）
結果通知：平成 25 年 5 月中旬
7. 提出書類
 - ① 平成 25 年度「地域連携事業」申請書
 - ② 所要経費内訳書
※地域連携推進室ホームページより様式をダウンロードできます。
8. 対象事業経費
謝金、旅費、印刷費、会議費（会場使用料、機材使用料等）、消耗品
※光熱水費、備品費、飲食費等の経費は対象外です。
9. 事業報告
 - ① 平成 25 年度地域連携活動発表会（12 月頃開催予定）でのプレゼンテーション
 - ② 平成 25 年度地域連携活動報告書（平成 26 年 3 月発行予定）に掲載する実施報告の提出（平成 26 年 2 月中旬までに提出願います）
 - ③ 下記報告書類の提出
（所定の様式により平成 26 年 4 月中旬までに提出願います）
 - ・実施報告書 1 部
 - ・実施経費経理報告書 1 部

提出及び問い合わせ先

連携推進課 産学官連携グループ 078-803-5427, 2394 担当：長井・佐藤
ホームページ：<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>
e-mail：ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

《選考》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め 8 名程度で構成する審査委員会で、次の方針に基づいて審査します。

審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。
- ② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確化され、かつ実現性の確保に適切な配慮がなされているか。
- ③ 自治体や他大学、NPO 等と部局を挙げての組織的な連携を図る取り組みとなっているか。
- ④ 地域連携の取り組みが大学の教育・研究に結びついているか。
- ⑤ 他の地域のモデルとなり得るような先導的取組であるか。
- ⑥ 地域文化の振興、育成した人材の定着・活用及び地域の活性化につながるような取り組みとなっているか。
- ⑦ 今後の展開の見通しが確実なものであると考えられるか。
- ⑧ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

平成25年度 「学生地域アクションプラン」 募集要項

1. 趣旨

地域を元気にする学生の様々な活動は、地域に歓迎され、また、期待されています。神戸大学地域連携推進室では、地域に根ざした、地域を活性化しようとする学生の活動を支援するため、「学生地域アクションプラン」を公募します。

2. 募集対象

学生の力を活かし、地域社会と連携して地域を活性化しようとするための活動。

ただし、特定の政治、宗教、営利等の活動を目的としないこと。

また、以上を踏まえた上で、東日本大震災被災者への復興支援に資すると考えられる事業については、審査の際に考慮を加えます。

3. 応募資格

神戸大学の学生が主体となって組織され、活動を支援する教員と共に地域活性化のための取組みを行う団体。

※事業責任者（申請者）は、教員とします。

4. 支援額及び採択件数（予定）

申請上限額は25万円とし、2～5件の採択を予定しています。

5. 支援対象経費

① 謝金 : 講演会の講師等に支払う謝金等

② 旅費 : 講演会の講師等に支払う交通費及び宿泊費等

③ 印刷費 : ポスター、チラシ、報告書の製本・印刷費等

④ 会議費 : 学外施設の会場使用料等

⑤ 消耗品費 : 文房具、製作用資材等

※予算配分は、申請教員に対して行いますので、同教員により執行していただきます。

6. 公募受付期間

平成25年4月1日（月）～4月26日（金）

7. 結果通知及び事業費配分予定

平成25年5月

※採択、非採択に関わらず、すべての申請教員及び代表学生に結果を書面で通知します。

8. 提出書類

① 平成25年度「学生地域アクションプラン」申請書

② 団体概要（会則、構成員名簿等）

③ 活動企画書

④ 収支予算書

※地域連携推進室 Web ページから様式をダウンロードして下さい。

※書類作成にあたって不明な点があれば、別記問合せ先までご連絡ください。

9. 提出先

研究推進部連携推進課産学官連携グループ

（文理農キャンパス正門すぐ連携創造本部棟5階）

10. 事業報告（採択者に義務が生じます）

① 平成25年度地域連携活動発表会（12月開催予定）でのプレゼンテーション

② 平成25年度地域連携活動報告書（平成26年3月発行予定）に掲載する実施報告の提出
（平成26年2月中旬までに提出願います）

③ 下記報告書類の提出（所定の様式により平成26年4月中旬までに提出願います）

・実施報告書 1部

・実施経費経理報告書 1部

問い合わせ先

地域連携推進室 Tel : 078-803-5977 佐々木

連携推進課 産学官連携グループ Tel : 078-803-5427・2394 長井・佐藤

ホームページ : <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

e-mail : ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

《選考について》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め、8名程度で構成する選定委員会で、次の方針に基づき選考します。
なお、学生の自主的な活動であることを重視するため、申請者である教員名を伏せて選考します。

審査方針

① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。

② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確にされ、かつ実現性の確保に適切な配慮がされているか。

③ 自治体や地域住民、NPO等と協働で実施する組織的な連携を図る取り組みとなっているか。

④ 地域における活動が実施団体等の構成員の地域貢献に対する意識の向上に繋がっているか。

⑤ 地域における保健・福祉、社会教育、まちづくり、学術・文化・芸術又はスポーツの振興、環境保全、地域安全等に貢献する活動であるか。

⑥ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

※申請書の電話番号等の情報は、申請団体との連絡を目的としており、これ以外には使用しません。

付 録

おいでやすカーニバルへの参加

— 保健学研究科地域連携センター —

保健学研究科地域連携センターでは、「医療と福祉の連携による障害者への生活支援」事業の一環として、学生ボランティアによる障害者への生活支援事業を展開しています。

2013年9月23日(月・祝)に、名谷キャンパスのある須磨区友が丘地域において、この地域の障がい者福祉施設((福)神戸聖隷福祉事業団 神戸愛生園、神戸友生園、せいれいやさかだい、神戸聖生園)が主催する「第33回おいでやすカーニバル」が開催されました。保健学研究科地域連携センターもこの催しに協賛しており、教員3名、学生10名が参加しました。「おいでやすカーニバル」は毎年開催され、



地域住民も多く参加されるとも盛大なお祭りです。保健学研究科地域連携センターとして参加して6年目になりました。

今年は、作業療法学専攻学生が学内演習で学習した「ちぎり絵体験」と、看護学専攻学生による「聴診器・血圧測定体験」を設置し、近隣住民の皆さん、同園利用者の方々とともに楽し



完成した作品と一緒に！



い時間を過ごすことができました。特に今年はお子さんご家族の方に多くご参加いただきました。

また、学生は他にも施設利用者の方がお祭りに参加するためのサポートや、着ぐるみをきてお祭りを盛り上げる等、それぞれが役割を持って参加しました。

来月は、本学学園祭「名谷祭」へ神戸愛生園の皆さんをご招待する予定です。これからもボランティア活動を通して、共に楽しい時間を過ごし、利用者の方たちと一緒に活動していく中で、それぞれが医療専門職者として成長していきたいと思ひます。



『神戸又新日報』のデジタル化が完成

— 神戸市立中央図書館との連携事業

神戸又新日報(こうべゆうしんにっぽう)は明治17年に創刊され、昭和14年に休刊した兵庫県全域を対象とした日刊紙です。明治中期から昭和初期までの兵庫県を知るための基礎資料として、非常に重要なものです。創刊から2年後の明治19年からの原紙を神戸市立中央図書館が所蔵していました。

この度人文学研究科が文部科学省の採択を受けた特別研究プロジェクト(「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」)の事業の一環として、神戸市立中央図書館と連携し、所蔵マイクロフィルムからのデジタル化がおこなわれました。これによって、兵庫県下の歴史資料の市民利用の推進が期待されます。

デジタル化完成に伴い、市民や研究者が利用できるよう、検索用端末が神戸市立中央図書館と神戸大学附属図書館に設置されています。



篠山市・神戸大学 連携推進協議会を開催



篠山市と神戸大学の連携推進協議会が、7月4日(木)、神戸大学連携創造本部大会議室で開かれました。大学協定を平成22年8月に締結して以来、初めての協議会です。市側からは上田政策部長、大学からは内田産官学社会連携担当理事をはじめとする、市・大学両者の連携担当部局の責任者が一堂に会し、今後の連携活動について意見交換をおこないました。

平成25年度の活動として、就学前発達障害児等早期支

援システム構築(保健学研究科)、日置地区古文書調査(人文学研究科)、獣害対策(篠山フィールドステーション)、里山林管理手法の実践的研究(農学研究科)などの地域共同研究とともに、実践農学入門などの教育・研究支援などの計画が、市・大学の各事業担当者から説明されました。今後も引き続き、定期的に協議会を開催していくことが確認されました。



学生団体「にしき恋」、野菜の試食会を開催

学生団体「にしき恋」が、7月23日(火)、農学部学生ホールで、自分たちが栽培した野菜の試食会をおこないました。

「にしき恋」は、実践農学入門をきっかけに、篠山・西紀地区で活動している団体です。現在同地区で畑を借りており、そこで収穫された野菜を大学で販売するためのヒントを得るため、教員や学生たちを招いて今回のイベントを開きました。



参加者は、「にしき恋」の活動や農場の説明を聞きながら、新鮮な茄子、胡瓜の浅漬けやオクラ、ピーマンなどの和え物に舌鼓をうちました。参加者から料理のヒントや販売方法のアドバイスが出るなど、大盛況でした。その後、学生団体が栽培した野菜の学内での販売許可があり、秋には黒豆などの販売がおこなわれることになりました。



神戸のつどいに参加

神戸市では、東京で活躍中の神戸にゆかりのある政治、経済など様々な分野で活躍している方々と交流し、神戸の取組みなどを紹介する機会として、毎年「神戸のつどい」を開催しています。今年は、8月8日(木)に東京會館で開かれ、約600人を超える参加者が集まりました。



今年初の企画として、展示コーナーに「大学連携の取り組み」が設けられました。神戸市内から、神戸大学、神戸学院大学、甲南大学が参加し、「大学の「知」の集積を活かす」と題して、個性豊かな展示がおこなわれました。神戸大学は、5月に締結した神戸市との連携協定に基づくシンボル事業についてのポスターを展示しました。大学との連携に関心を持たれている方々と直接意見交換をおこなう良い機会になりました。また、参加者の国会議員から、「このような大学と自治体との連携は、これから必要なことですね」との声も聞かれました。

平成25年度 地域連携 学内公募事業

地域連携推進室では、学内の新しい地域連携の芽を育てるため、各部局等で計画されている事業の支援や、学生による地域社会を活性化しようとするための活動の支援をおこなっています。今年度は、次の各事業が採択されました。

地域連携事業（教職員対象） 採択事業

申請部局名	申請事業名
国際文化学研究所	映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携
経済学研究所	兵庫県多可町における地域住民との多角的な連携事業
経済学研究所	六甲山の森林保全を目指した文理融合型地域連携プロジェクト
人間発達環境学研究所	ESD ボランティア育成プログラム拡張支援事業（継続事業）
人間発達環境学研究所	佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援（継続事業）

学生地域アクションプラン（学生対象） 採択事業

申請団体名	申請活動名
神戸大学体育会アメリカンフットボール部	地域の子どもたちとのフラッグフットボール教室を通しての交流
舞踊ゼミ（関典子研究室）	神戸ビエンナーレ 2013 / 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業 『Site Specific Dance Performance #3』
はたもり	地域資産を用いた篠山市畑地区の地域再生
「イルミネこうべ」プロジェクト	「イルミネこうべ」光る募金箱プロジェクト
大船渡支援プロジェクト実行委員会	大船渡ワークキャンププロジェクト
明舞団地の歴史を記録する会	県営明舞団地における居住者目線の団地の歴史の記録・編集
神戸在宅呼吸ケア勉強会	灘区在住高齢者における未診断 COPD 患者の現状と対策

平成25年度 神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成

灘区との間で締結された連携協定に基づき、平成17年度より、本学の教員・職員・学生からなる組織を対象に「地域の課題解決および魅力向上を目的として実施する活動・事業」に対して灘区が助成を行っています。今年度の採択事業は次のとおりです。

申請団体名	申請事業名
神戸大学人間発達環境学研究所（教職員）	鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト
まちプロジェクト実行委員会（学生）	まちプロジェクト ーまちTゆうえんち'13ー

活動報告（2013年3月～2013年8月）

3月 11日	兵庫県教育委員会と意見交換、兵庫県立大学と意見交換
15日	岩手大学地域連携推進センター訪問
18日	大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（灘区公募事業）公募開始
27日	3地域連携センター長意見交換
28日	地域・だいがく連携通信第12号を発行、学生ボランティア支援室アドバイザー会議に出席
29日	平成24年度神戸大学地域連携活動報告書を発行、神戸市と協定締結について協議
4月 01日	地域連携事業・学生地域アクションプラン公募開始
08日	明石市政策室と協議
16日	兵庫県教育委員会と意見交換、大手前大学来訪
18日	三木市と協定締結について協議
19日	大学と連携したまちづくり助成事業審査（灘区役所にて、オブザーバーとして出席）
23日	篠山市と意見交換
5月 01日	大学教育推進機構と意見交換、神戸市と協定締結について協議
02日	平成25年度第1回地域連携推進室会議
09日	第5回A-launch（農学研究所地域連携センター）、神戸市と協定締結について協議
14日	農学研究所地域連携センターと打合せ
16日	平成25年度第2回地域連携推進室会議、神戸市と協定締結について協議
23日	神戸市と協定締結について協議
24日	神戸市との連携協定調印式
6月 04日	神戸大学留学生が篠山市を訪問
06日	兵庫県企画県民部大学課と意見交換
12日	国際文化学研究所教員と地域連携事業について意見交換
13日	三木市と協定締結について協議
20日	神戸市大学連携支援室との意見交換、神戸又新日報デジタル化についての記者発表（人文学研究所地域連携センターほか）
25日	篠山市と協議会開催について協議
27日	三木市との連携協定調印式
7月 04日	篠山市・神戸大学連携推進協議会
19日	第6回A-launch（農学研究所地域連携センター）
20日	地域活性学会に参加（高崎市立高崎経済大学）
24日	兵庫県議会総務常任委員会が篠山フィールドステーションを視察
30日	神戸新聞社と協議
8月 06日	灘区民まちづくり会議に出席
08日	神戸のつどい（東京）に参加





平成25年度 神戸大学 地域連携活動発表会

地域と共に ～ 10年の活動と今後の展望



日時 平成26年1月30日(木) 13:30～16:40

入場無料
当日参加可



場所 神戸大学 瀧川記念学術交流会館 2階大会議室
(神戸市バス36系統 神大文・理・農学部前バス停下車 南へ徒歩5分)

PROGRAM

開会挨拶 内田 一徳 理事(産官学社会連携担当)

【第一部 学内公募事業活動報告】

- 1. 平成25年度地域連携事業報告
映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携 国際文化科学研究科 板倉 史明 准教授
佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援 人間発達環境学研究科 伊藤 真之 教授
- 2. 平成25年度学生地域アクションプラン報告
大船渡ワークキャンププロジェクト 大船渡支援プロジェクト実行委員会
県営明舞団地における居住者目線の団地の歴史の記録・編集 明舞団地の歴史を記録する会

※その他採択プロジェクトについても、活動報告ポスターを展示します。ぜひご覧ください。

【第二部 意見交換会：地域と共に ～ 10年の活動と今後の展望】

- | | | |
|------------------|-------|------------|
| 全体趣旨説明 | 奥村 弘 | 地域連携推進室長 |
| 地域連携推進室報告 | 佐々木和子 | 地域連携研究員 |
| 人文学研究科地域連携センター報告 | 市澤 哲 | 人文学研究科教授 |
| 保健学研究科地域連携センター報告 | 高田 哲 | 保健学研究科長・教授 |
| 農学研究科地域連携センター報告 | 高田 理 | 農学研究科教授 |

<自治体からのコメント>

- 加藤 久雄 神戸市大学連携支援室長
- 村上 裕道 兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長

<意見交換>

閉会挨拶 奥村 弘 地域連携推進室長

神戸大学地域連携推進室

<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

○ 参加申し込み・お問い合わせ先 ○

神戸大学研究推進部連携推進課産学官連携グループ
TEL : 078-803-5427 FAX : 078-803-5389
E-MAIL : ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

平成 25 年度 神戸大学地域連携活動発表会報告書
平成 26 年 3 月発行

発 行 神戸大学 地域連携推進室
連絡先 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
Tel:078-803-5427 Fax:078-803-5389
Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印 刷 田中印刷出版(株)
